

# 忍耐の倫理的な位置（細論）

近藤良樹

（論文「忍耐論—その倫理的な位置—」（広大リポジトリ所収）の細論）

## 1. 節制の物足らなさ

おのれを制する徳として、節制がよくあげられる。自身を節し制するということがであるが、節制が制するものは狭い。西洋では、古来、節制(temperance)は枢要な徳の一つとされてきたが、その狭義の対象は、快樂享受で際立つ食欲と性欲の二つにほぼ限定されていた。

自然的には、人も動物も快にはひかれ、不快・苦痛は回避する。だが、ひとは、動物的自然を超越できる存在であり、必要とあれば、快不快の自然から自由になって、自身のこの自然を制し支配することができる。嘔吐しそうな不快なものでも薬となれば、ひとは、これを拒まず甘受することができる。快であっても有害となれば、これにのめり込まず抑制もできる。節制は、そういう自然超越・自由の営為の一つであるが、これは、広義に解されたとしても、快樂の抑制に限定され、もうひとつの自然の不快・苦痛には直接的には関与しない。

不快や苦痛の回避という自然的対応を抑制する、ひとの超自然・反自然の営為としては、特定の領域に限定された形で、たとえば、恐怖（の不快）の自然的な回避を抑制して勇氣が存在している。あるいは、寛容は、他者の有り様を不快に思いつつ、その自然の思いをうちに抑え込んで成り立っている。ひとは、これらに限らず不快や苦痛の全般について、逃げたり排撃したりせず、これを受け入れていく姿勢をとることができる。我慢とか忍耐という構えである。忍耐は、心身に生じた辛苦を甘受して、これから逃げず逆らわず忍び耐えていく卓越した人間的営為になる。

### 1-1. 食の節制は、不味いものの甘受には関与しない

ひとは、生の健やかさを求めて節制する。美味しいものを食べ過ぎて不健康になることがないようにと、節制は、美味の過食を抑制する。他方で、健やかであるには、必要な食物は、不味くて食が進まないとしても、これを無理してでも摂取しなくてはならない。食での「養生」をいう場合は、美味（快樂）の過食を節するとともに、他方で、きれいなニンジンや納豆でも、必要ならこれの摂取をすすめる。だが、養生とちがい、節制では、このいやなもの甘受をすすめることはない。かりに「納豆を節制する」ということがあるとすると、それは、養生のように、これが嫌いでも滋養だからと、無理して食べるのではない。これが好物で食べ過ぎるので、節食へと制限すること、快樂享受の抑制を意味するものになろう。節制は、少なめにと節することである。節制は、快樂享受を抑制する営為であって、不快なものを無理して食べることには関与しない。節制では、健康な食の促進に欠けるところがあるというべきである。

ギリシャの古代から徳目として（食の）節制をいうが、食の快楽を充たして過食することができるようになったのは、庶民ではつい最近のことである。それまでの長い歴史においては過食の節制など無用なものであった。だが、古い時代ほど、庶民においては、食べる物がなくて、あっても不味いものが多かったであろうから、節制とちがい、我慢・忍耐は、常々必要であった。

あるいは、現代でも、食事を用意する者は、栄養バランスを考えてするから、美味であっても多過ぎないように限定して出し、不味いものでも摂取すべきなら、これを添えて出す。美味の過食は、好き勝手にできるわけではない。そこで必要になるのは、どちらかという、節制よりは、栄養を考えて出された苦手のニンジンや納豆を無理やり口にに入れて我慢して食べることである。「節制を！」ではなく、養生のため滋養のために「我慢を！辛抱を！」という忍耐になる。

## 1-2. 性的節制は、夫婦の間では用がない

節制は、快楽の節制であり、生に必須の食欲と性欲の抑制を主とした規範である（古代ギリシャのむかしからこのふたつに限定されてきた。このことに関しては『節制論（講義ノート）』（<http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/00040174>）4-3-6-1以下の管見を参照ください）。両欲求における快楽享受の過度を戒める。だが、性の快楽の場合、それを楽しみとする夫婦の間では、抑制は無用で、毎夜でも存分にこれを楽しみたいのである。節制は、通常、夫婦の楽しみを抑えることはない。節制は、快楽享受での健やかさを求め、性的節制では、主として社会的健全さからの逸脱を戒め、これを厳禁とする。夫婦間では快楽の抑制つまり節制は無用で、夫婦間以外への逸脱は、節制ではなく禁止である。こう見る限りでは、節する節制の出番はない。

古来、「殺すな」とならべて、「姦淫するな」は、どこでも根本の戒となっていた。これらは、ときに強い欲求・衝動となる。多くの者が人生に一度や二度は「くそっ、死ぬ！」等と妄念をいだいたことはあろうが、その自然的な衝動・欲求の恣の充足は、自他と社会の安寧を著しく損なう。社会はこれに死刑などの重罰をもって厳しい対応をし、各人はこれを自身のうちでの禁戒として堅持してきた。妄想はしても、夢と現実を峻別するのがひとである。ときに破壊的で醜悪になる自然的欲求を制御・抑制できるのが人間であり、現実には殺人をするものは希で、姦淫も希である。いずれも節制することでは済まされず、姦淫は、殺人同様、厳禁である（殺人の方は、例外があり、英雄は殺害の多さを競い、仇討ちは賞賛された。だが、姦淫は、常に、唾棄すべき背徳で禁止であった）。

長い歴史のなかで、性的節制では、売春とか一夫の多妻が言われえた。ほどほどにと。だが、これは、人間の尊厳をかかげる現代社会では、やはり禁止であって、節制して済むものではない。異常性愛も、多くは禁止であり節制では済まない。性的逸脱といえばマスコミでは不倫がしばしば話題となるが、当然、ほどほどにと節することではなく禁止が前提になってのものである。仮にそういう場に直面したとすると、過度にならないようにという節制ではなく、厳しく欲求を抑制し禁欲を貫くことが求められる。性的快楽の抑制についても、食と同様に、節制では不十分となるように思われる。

### 1-2-1. 性的節制は、食の節制とあり方がちがう

節制は、性的逸脱を抑制するが、それは、単に節するのではなく、逸脱の全面禁止を求めるものである。不倫などの逸脱をほどほどに節するとなると、逸脱を許容したものとな

ろう。健全さを求める節制の精神にはふさわしくないこととなる。

だが、大局的見地から見ると、節制は、性欲の規範として妥当性を有する。つまり、夫婦間では楽しみ、それ以外への逸脱を禁じるのであり、性欲の発現の場を制御・制限し節制しているのである。食の節制で、お膳や弁当箱に盛り切りにして、それ以外は駄目とするのと同じことである。不倫などの逸脱は、自分のお膳のものでなく、となりのお膳を盗み食いすることに相当するわけである。

食の場合、快楽享受の節制とはいっても、美味（快楽）のみを問題にしているわけにはいかない。通常の食の第一の関心は栄養補給にある。美味の享受は食の一部のことである。不味いものでも栄養ということからは食べる必要もあって、それは節制の対象ではない。あるいは、美味でも、栄養のあまりないものなら、抑制、つまり節制の必要はほとんどない。さらに過食の逸脱は、翌日粗食にして、なかったことにもできる。食の節制は、いうなら複雑で節制に当てはまらないことも多々ある。だが、性欲の場合は、その一般的な状態においては、食とちがい常に快楽が主目的となり、性行為では、節制の対象である快楽がつねに実現される。そして、その性的な欲求・行為は、夫婦の間では無抑制でよく、それ以外は厳格に禁止である。節制は、快楽欲求に関して、健やかなものは肯定し、その過度・逸脱を禁じて抑制する。この節制における肯定（快楽の享受・推進）と否定（快楽の抑制・禁止）に、性欲の節制は、単純明快びたりと当てはまる。

### 1-3. 小学生には狭義の節制は、あまり意味がない

「節制」は、道徳教育では、自分自身を律する徳目として挙げられる。だが、節制は、狭義には食欲と性欲を対象とし、後者は、未熟な子どもには言う必要がない。食欲の方は、旺盛だから節制することがいるが、こどもの場合、通常、食は学校や親が用意するもので、美味で過食しそうなものは余分には出ない。つまり、快楽（美味）の食は節制するまでもなく必要量しか摂食できない。逆に不味いものは、こどもは食べたくはないが、必要な栄養であれば、摂食を強制される。こどもは涙をだしながらも無理やりに食べなくてはならない。先生や親は、そのとき、きれいなニンジンや「節制しなさい」とはいわない。いやでも「我慢して、食べなさい」ということであろう。節制は、きれいなものの摂食をすすめるものではない。こういう場面で、こどもに自身を律する規範をあげるのなら、我慢とか辛抱、忍耐ということになる。

狭義の節制は、こどもにはあまり用がなさそうであるが、広義の節制、快楽全般についての節制は、現代社会では結構こどもにも意味がある。最近では、多様な快楽がある。パソコンゲームとか携帯電話での遊びでは依存症になるぐらいだから、「夜更かしはいけない」などと節制をいう必要がでてきている。ただし、ここでも節制では一面的になる。過度に遊びほうけていたら「節制しなくては！」という。が、節制は、不快な苦痛になることの甘受は、よりよい生に必要であっても進めることはない。いやな勉強・宿題も、これをこどもはしなくてはならない。近所のこどもの歓声が聞こえると、宿題をしても身がはいらない。そこで、親は宿題について、「もう少し我慢しなさい、辛抱しなさい」と忍耐をいう。こういう宿題を、「節制しなさい」とすすめられたら、子供は大喜びで遊びに出かけることであろう。

## 2. 快楽の節制（抑制）、不快の忍耐

こどもの場合、食べる事を気ままにさせておくと、当然美味（快樂）の方に流れるから、これを節制させることがいる。それ以上に、不味いものには手をつけようとしない。したがって、大人以上に、我慢して食べることをしつけることがいる。この、不味いもの（不快）の甘受をいうのは、節制ではない。不味いがこれは健康に必須ということで、養生とか健康管理で言われることであろう。我慢し辛抱して食べるのであり、忍耐になる。

狭義の節制である食欲・性欲の抑制においても、その抑制が欲求不満をもたらすなら、その不快には当然、節制は関与する。空腹の苦痛に我慢し、出産を控えている状態では性的営みを我慢する。しかし、それは、あくまでも、快樂の享受にかんしてのことで、それを抑制することでの不快・不満に忍耐するだけのことである。食欲自体をそぎ嘔吐するようなものを、いやなもの・反欲求となるものを我慢して食べることは節制ではない。健康・養生のためには、嘔吐したくなる嫌いな食べ物も、我慢して食べなくてはならない。だが、こういう食欲のわからない、本質的にうけつけがたい苦痛・不快なものは、節制では甘受せよとはすすめないであろう。

節制は、広義には快樂全般を節制するものになるだろうが、逆の不快なもの・苦痛になるものの全般については対象にすることはない。快樂の欲求を抑制し遊びすぎを節制するようにはいっても、つらい勉強とか仕事をしっかりやるべきことは節制ではない。それをいうのは、辛抱とか忍耐になる。

## 2-1. 仕事や勉強に、節制は無力だが、忍耐は頼もしい力となる

ひとは、動物的自然を超越できる自由の存在である。快不快の自然にひとも動物も生きるが、ひとは、これを基礎におきつつも、これを超越して、必要なら、この自然にそむくことができる。自然的には快樂に引かれるが、この快をひとは拒否できる。節制は、快樂抑制の一典型である。しかし、節制は、他方の、不快・苦痛には関与しない。ひとは、これに対しても超自然的に振舞うことが可能である。自然的には避ける苦痛を避けることなく、受け入れ、これを手段・踏み台にして、より価値あるものを得ることができる。この苦痛・不快の超自然的な受け入れを担うのは、忍耐である。

仕事も勉強も、食べたり遊んだりするのはちがいが、苦しい事、不快となることがしばしばである。不快を避けていたのでは、仕事も勉強もさきには進められない。つらいことを乗り越えていくために、「我慢」とか「辛抱」といった言葉が、たびたび登場する。「辛抱」は、排除したい「辛」いものを逆に受け入れて「抱」く。忍耐は、辛苦を甘受する。嫌なこと（したくないこととか苦痛・不快なもの）を嫌がらないで受け入れ、逆に、欲するもの（したいこととか快であるもの）を欲さないようにと押しとどめる。そのことで生じる辛苦から逃げることなく、これを甘受して、ひとは、快不快に従う自然のもとでは達成不可能な、超自然的な人間世界の諸目的を実現する。仕事や勉強は、困難を引き受け、辛苦を甘受する姿勢なくしては成就できない。忍耐が必須である。

## 2-2. アリストテレスは、節制の「抑制」では、「忍耐」にもふれる

アリストテレス『ニコマコス倫理学』は、節制は、快樂への「抑制 enkrateia」(1149a21)だと捉える。食と性の触覚の節制論(1117b23ff.)とほぼ同等のページを費やしてこの「抑制」を論じるころには、「忍耐 karteria」も取り上げている(cf.1145a14ff.)。節制の具体的な営為として忍耐・抑制を論じるのである。「抑制」は、快樂欲求に挑戦してこれに打ち勝とうと「強力である krateō」(1150a35)ことで、力をいれて能動的に働く。「忍耐」は、不快・

苦痛に負けないでこれを受動する状態に「持ちこたえる antechō」(1150a34)ものになると言われている。

「抑制」するのは、動くものを動かないようにと抑えつけることであろう。美味(快樂)を求めて動く食欲をそれが動かないように食を充足させないようにと、力づくで強引に抑えて制するのである。「忍耐」は苦痛に耐えるが、それは、不快や苦痛を前にこれに逆らわないで受動状態を甘受し、逃げ出したり助けを求めて騒ぎ立てたりしたいのを、しないで、忍び耐えて、じっと持ちこたえることであろう。快樂の抑制である節制では、不快・苦痛に耐える忍耐は、あまり出てくることはない。だが、抑制は辛くなれば忍耐すべきものになるからであろうか、これをアリストテレスは抑制＝節制を論じる場に登場させている。

(なお、トマス・アキナスの『ニコマコス倫理学注解』は、この辺りの注解では、*karteria* について、感性的で短期の *patientia* (我慢) などではなく理性的で長期の *perseverantia* (辛抱・忍耐) で捉えている(第7巻第1講)。*karteria* は、ここでも「忍耐」と訳しておきたい。)

### 2-2-1. 古代ギリシャの節制＝抑制は、忍耐をもって語られることもある

アリストテレス『ニコマコス倫理学』によると、「抑制 *enkrateia*」は、「無抑制 *akrasia*」の反対で、この *akrasia* (だらしなさ) をこらしめようと「強力である *krateō*」ことといったニュアンスのことばになるものようで、かれは、エンクラティア(抑制)といったら、即、「節制 *sōphrosunē*」のことになるのだという(cf. 1149a2ff.)。日本語では「抑制」といっても節制のそれになるとはいえず、「抑制」とか「自制」というと、怒りの方が先に想起されそうだが、端的なエンクラティアは、快樂享受の抑制としての節制になるようである(アリストテレスは、それゆえ(抑制即節制なのだから)、怒りの抑制・無抑制をいう場合は、「抑制」だけではだめで、「怒りの」と明示した表現にならねばならないとも言っている(cf. 1149a2ff.))。

これは彼だけの言葉使いなのではなく、おそらく古代ギリシャでは一般的な理解だったのであると思われる。クセノフォンの『ソクラテスの思い出』は、この「抑制 *enkrateia*」と「無抑制 *akrasia*」を対立させて扱い、「無抑制」は、快樂を、飲食やセックスや睡眠などの(つまりは節制の対象である)欲求の充足を求めて我慢できない状態を示すという。「抑制」は、したがって、その反対で、飲食や性の欲求の抑制ということであり、節制を指すものとなっている。クセノフォンは、さらに、この「抑制」を、「忍耐する *kartereō*」こととも言い換えて、エンクラティア(抑制)即ち節制の方が実際にはよりよく快樂を享受できるのだと論じている(cf. *Xen. Mem.* 4.5.9)(このエンクラティア(抑制)やカルテリア(忍耐)は、禁欲主義のストア学派では生の主軸をなす概念になっていったようである)。

節制の具体的な営みが「抑制」や「忍耐」になるのだとすると、単に快樂のみでなく、不快なものの「忍耐」とか、不快回避の「抑制」をも節制で論じうることになるだろうか。アリストテレスも節制を具体化した「抑制」を論じる場面に「忍耐」を取り上げた(cf. 1145a14ff.)。もちろん、かれの節制論は、快樂の過度を抑制する中庸を問題にしているのであり、不快を主題にするようなことはない。が、「忍耐」といえば、快樂でなく、不快・苦痛の忍耐である。食の場面で忍耐といえば、嘔吐したくなるような嫌いな食べ物をあえて口にし滋養のために甘受するようなことが想起される。

### 2-3. 抑制にも、我慢(忍耐)のいる時がある

理性的「抑制」は、感性的欲求が逆らい抵抗するのでなければ、これを強引に抑えつける必要はない。猛毒が仕込まれたケーキだと知ったら、いくらケーキが好物で空腹であっても、これを食べようとする者はいないであろう。食べてはいけないという理性の抑制に従順になる。感性的欲求の方にとっても、それは、抑えられるのではなく、導かれ引かれるということになる。抵抗ゼロなのであれば、力づくで強引に抑えつける必要はなく、抑制は、無理に抑えて制する抑制としては働いていないといえよう。

猛毒と知って、この知に従うというのは、理性精神があればこそであろう。幼児は、おそらく動物と同じで、猛毒と言ってもこれを理解できない限り、おいしそうなら、制止を振り払ってこれにむさぼりつくことであろう。だが、猛毒が理解できるだけの理性が働くようになると、どんなに美味しそうでも、これを食べることはない。大局的には、感性は理性に従順であり、その限りでは、理性は、制御するのだが抑えつける抑制としては働かなくてよい状態だといえよう。

理性による抑制が名実とも抑制になるのは、感性の抵抗があつて、理性にも感性にも不快・苦痛が生じてであろう。美味への過食は、猛毒とちがい、その一食だけを考えれば害悪はほとんどない。そう理性が思えば、感性は、快楽享受の過度をگری押ししてもかまわないと、自己主張したくなる。だが、大局を考え原理・原則をもって動く理性は、過食は常に抑えるべきだと抑制をそこでも進めようとする。感性に欲求不充足の不快・苦痛を我慢させ、理性も素直でない感性に四苦八苦して強引に抑えつけ力をいれて辛抱することになる。快楽の抑制も、その抑制が苦痛になる厳しい状態になると、苦痛を甘受する我慢・忍耐となる。

### 2-3-1. 抑制は、辛くなるころでは忍耐に変身する

こどもに「このケーキは、3時（お八つ）まで待つように」と、快楽欲求を抑制、自制させるとする。そこでの抑制がスムーズに効いて感性の抵抗が小さければ、わくわくと楽しく美味しさを想像するだけになる。それは、抑制してはいるが、不快ではなく、むしろ愉快なのである。感性を無理やりに抑えて制するのではない。

自分の欲求を真に抑えて制するのは、「のどから手が出そうだが、待たなくてはならない」といった欲求不充足が辛い状態になってである。その抑制の持続が困難になりはじめたとき、「我慢しなさい」ということになる。その辛い欲求抑制の状態では、抑制しているのではあるが、「抑制しなさい」とはいわない。そういう段階では不快・苦痛が主導権をとり始めるから、そこでは意志は辛いことに対処しなくてはならなくなり「我慢」「辛抱」となる。抑制がつらくなり辛苦の状態になると、これを制御するのは、忍耐ということになる。

「欲しくて欲しくて！」と手が出てしまうといったことになって、抑制の持続ができず負けてしまうときは、「抑制力がない」というよりは普通は「忍耐力がない」という。抑制の持続がつかなくて持ちこたええなくなり、その辛苦を受け止め甘受しつづけることができなくなる。つまり、忍耐ができなくなるのである。快楽抑制の節制も、強引に抑えつけて制する辛いものにおいては、我慢・辛抱の忍耐となる。

### 2-3-2. 忍耐は、外からの苦痛のみでなく、内の欲求も対象とする

耐えがたいものを耐えるのが忍耐だが、その耐えがたいものとは、まずは、そこから加えられる妨害や傷害の不快・痛みである。いやなものは、うちで育てたくはないから、多

くは外からやってくる。痛みがあるとは、傷害が生じているということだから、これから逃げたり、排除の行動に出たくなる。だが、ひとは、その痛みを受け入れることで大きな価値あるものが獲得できるような場合、苦痛を犠牲・手段にしてその目的を達成しようと忍耐する。

耐えがたいものとしては、さらに、そとからではなく、うちから生じるもの・欲求を抑えて不充足に留める場合もある。節制で食や性の欲求の抑制が辛くなってする忍耐は、これになる。外的な妨害や傷害への苦痛・不快の忍耐でなく、内に抱いた欲求を不充足にとどめての不快・辛苦への忍耐である。欲しいもの、したいことを抑制して、その欲求の不満・不快に耐えるのである。

いずれの忍耐も、苦痛・辛苦に耐える。欲求を抑制するとしてもその充足を待つ間がわくわくと楽しいのであれば、忍耐などいらぬ。どんなにひどい怪我でも、痛まないのなら、この怪我に忍耐はいらぬ。尿意は、これが小さいときには、不快・苦痛はないから、我慢など無用である。これが強い欲求になってその抑制が苦痛となる段階になって、我慢・忍耐の対象となる。忍耐は、つねに、苦しみ・辛苦に耐える。

### 2-3-3. 我慢・辛抱・忍耐のニュアンス

忍耐では、我慢と辛抱の言葉がよく使われる。ケーキを食べるのを待たせて子供に忍耐させるとき、「3時まで我慢しなさい」といい、「もう30分辛抱しなさい」という。しかし、忍耐であろうけれども、こういうとき「忍耐しなさい」とはあまり言わないのではないか。同じ忍耐を意味する言葉であるけれども、忍耐の有り様や忍耐へのかかわり方のちがいがこれらの言葉づかいにこめられているのであろう。

禁煙で喫煙欲を抑制するとき、たばこを「吸うのを我慢する」といい、「吸わないで辛抱する」という。我慢は、「喫煙を我慢する」と、吸いたいという喫煙欲を禁じるもので、感性的な喫煙欲求自体に向かって働くものであろう。だが、「喫煙を辛抱する」とはあまりいわない。辛抱は、禁煙をリードする忍耐の意志に働きかけることが中心になるのではないか。辛抱は、「喫煙」ではなく、「禁煙を辛抱する」のである。

我慢は、抑えられるべき自然（感情や欲求）に面と向かってこれを戒める。おやつ欲の我慢は、たばこの吸いたいのを、我慢せよと戒める。これに対して辛抱の方は、主として忍耐する意志に働きかけ、この意志を貫徹するようにと励ます。おやつ抑制の意志を、「3時までの辛抱だ」と励ます。禁煙していることの辛い、くじけそうになる意志の状態を前にして、「もう一月もしたら、落ち着く。辛抱、辛抱」と、禁煙の意志を貫くようにと励ますのである。我慢は感性的忍耐になり、辛抱は理性的意志的忍耐になる。我慢は、苦痛の生じている現場の忍耐として断片的短期的となり、辛抱は、そういう苦痛の連続・断続を貫いての、強い意志をもつての長期的忍耐になるともいえようか。注射は我慢で、点滴は辛抱である。

ただし、禁煙持続の忍耐を、「禁煙を我慢しろ」「喫煙を辛抱しろ」といっても通じないことはなかろう。「忍耐」という言葉の場合は、「禁煙の忍耐」はいうが、「喫煙の忍耐」は誤解を生みそうである（この表現だと、タバコ嫌いなのに無理やり副流煙などを喫煙させられる状態がまず念頭に浮かぶ）。「忍耐」は、おやつとか禁煙の具体的な場面では、使いにくい。おそらく、日常の生活用語としては、我慢や辛抱のように使われない。よそ行きのことばであり、かしまったときに使うものになるのであろう。我慢とか辛抱として

日常生活に具体化されているものを前に、一步距離をおき、総括的に抽象化して語るような場合は、忍耐をつかう。「我慢、我慢!」「辛抱、辛抱!」と日頃は励まし、一步離れて高みから、「忍耐が必要」というのである。

#### 2-3-4. 自制・自己抑制・抑制

節制は、快楽享受の抑制になるが、自分の抑制することで、「自制」と捉えられることがある。自制は、「自己抑制」であるが、両者は若干ニュアンスを異にする。自己抑制は、「自分から」「自己による」という面が強いだらう。自己抑制で対比的に想起されるものは「他者」(からの)抑制である。他者による、外からの抑制である。それに対しては、自己抑制は、まずは「自己による」ということになろう。他者によるのではなく、自分によって自発的にする抑制だと。ひとに言われる前に、自分から、それを見越して自己抑制すると。

自制は、それに対比しては、「自分を」抑制することが中心になろうか。怒りで、あるいは妖艶さに「自制心を失った」という場合、その「自」は、制すべき「自分を」であり、自分の冷静な判断を失い、自分の欲望を抑制することができなくなったということであろう。もちろん「自制」も「自分から」という自発性が前面にできることもある。上司の意をくんで同僚の批判を「自制する」というのは、強制されたものではなく、自発的に「自分から」ということであろう。

抑制は、自制もそうだが、対象の動きを前にしてこれを抑圧してその動きを制限する。その動く対象が、自制では自分、自分の心身になるが、これはさらに限定される。抑制では、胃の動きを薬で抑制するというように、不随意の心臓や胃の動きを小さくなるように抑制できる。だが、そのために自分で薬を飲むとしても、それを自制とはいわない。自分が直接に抑制できるものではないからであろう。自制は、「自分が」あるいは「自分で」抑制・制御できるものにと限定されるわけである。自制の抑制対象は、随意の自分ということになる。自制は、「自分の」「自由」(自律)にできる「自分を」対象とし、「自分から」(自発)「自分が」(自主)「自分で」(自力)抑制するのである。

さらに、嫌いなもの、いやなことは、求めることはないから、動きを抑えて自制するまでもないことである。自制の対象は、したがって、随意のものうちでも、したいこと、ほしいことという、放置しておく過度になりがちな欲求あたりが中心になる。

自制は、自らを制するということだが、その「制」は、自己「抑制」に限定されることはないのかも知れない。抑制・制限とともに、制御・統制といったものも想起されうる。自制は、英語で *self-control* と訳すようだが、コントロールは、抑制を含む「支配」「管理」「制御」「統制」であろう。「不安に自制心を失う」(パニックで、どうしていいのか分からなくなり、おどおどする)といった場合の「自制」には、単に抑制のみでなく、統御・制御・支配も含めていような感じがする。

#### 2-4. 抑制と忍耐のちがい

抑制は、抑え制することで、抑制する者からみて放置しがたい動きを抑えて、これを制御しようという積極的能動的な営為であろう。積極的能動的とはいえ、大きな動きにと推進していくことを「抑制する」とはいわない。その放置しがたい動きを抑圧して動かないようにすることが中心になろう。その対象が自分自身の場合、「自制」ということになる。自身の欲求などを動かないように抑えつけるのである。

これに対して忍耐の場合、その対象は、自身のうちの苦痛・不快であり、これを忍耐す



るのである。もちろん、苦痛の原因自体は、しばしば外にある。「お客の傍若無人」に我慢し、「いつもの悪口」を辛抱するという。それらが愉快で心地よいのだとすると、なんら忍耐はいらない。あくまでも自分に不快なものが忍耐の対象である。抑制の場合は、例えば「振る舞い」を抑制するとは、これに能動的にかかわり押さえつけることである。だが、忍耐は、その「振る舞い」を甘受することにもなるが、なによりも、それによって自分に生じた心中の不快・苦痛を対象としこれを甘受するのである。

抑制する場合の対象は、忍耐の対象とちがって、これが不快とか嫌なものとは限らないであろう。好きなものであろうと嫌いなものであろうと、とにかく、その動きを動かさないようにか、動きを小さく制御するのが抑制であろう。そとにあるものであろうと、自分のうちの心身の動きであらうと、この動きを小さめにと抑圧するのである。

抑制は、能動的積極的に対象にかかわるが、忍耐は、その点では、あくまでも受動的で消極的である。忍耐は、苦痛・不快を対象にするが、能動的になってこれを抑圧・抑制するものではない。自分のうちに生じている不快・辛苦を排撃したり積極的に小さく抑制するとしたら、忍耐してないことになる。忍耐では、苦痛をそのままに甘受する。歯痛に忍耐するものは、歯痛を排撃しない。もし、薬を使ったり抜歯などして歯痛をなくするのなら、痛みを抑制し排撃するのであって、忍耐しないのである。忍耐するかぎりでは、歯痛をそのままにして抵抗・排撃せず、その痛みのままを受け入れ甘受することになる。

#### 2-4-1. 忍耐は、面従・腹背である

抑制では、心の内と外の分裂は、どうでもよいことである。だが、忍耐では、基本的に内面と外面は反対になる。いやなものを我慢するとき、外面では、これを甘受して抵抗せず受動に徹する。だが、内面はそうではない。内心・本心においては、これを拒否し排撃したいのである。もし本心においても外面と同じように無抵抗になり、不快とも排撃したいとも思わないのなら、これを忍耐することはいらない。忍耐するかぎり、外面では淡々と受け入れるが、内面では、猛烈に不快とし排撃的なのであり、この不快や排撃欲をうちに隠し禁圧している。ニンジン我慢して食べるのは、これが不快でいやだからである。ニンジンが好きになったら、すこしも忍耐することはない。忍耐するかぎりでは、外面では無抵抗の受容だが、本心においては、外面とは裏腹に、不快・苦痛とし、これを拒絶しているのである（苦痛は、多く外から来るから、外面と内面となるが、専ら自己に起因する苦痛もある。この場合も内外の二面に見てよいであろう。苦痛を回避・排除したいという自己の内的自然本性に対立する外は、この苦痛を受け入れねばならないという、自然感性を外から制御する理性であり、うちへ抑え込む自己ということになる）。

忍耐が、内心の通りにして苦痛を排除する攻撃的能動的な対応をしたら、忍耐できていないということになる。能動的攻撃的な振る舞いはせずに、外面的には、これを従順に受け入れるのが忍耐である。攻撃も逃走・回避もせず、抵抗することなく、あえて受け入れる、甘受する。うちにある反発・不快・排撃欲を押さえつけてそとに出ないようにして、いわば「面従腹背」に徹する。

欲求の忍耐の場合も同じく二重になろう。本心では欲求しているのだが、外的には（個々の理性的統体としては）その発現を抑制して欲しくはないかのように振舞う。忍耐は、「外面如菩薩、内面如夜叉」といってよいようなことになる（この「内面、夜叉の如し」は、邪な本心を隠して人を偽るような時に言われることだが、忍耐の場合の内面は、邪悪

というわけではない。内にとどめられた、外面とは逆になっている本心・自然・感性を語る)。

#### 2-4-2. 苦痛甘受の受動的忍耐における能動性

忍耐は、不快・苦痛に抵抗せず、あくまでもこれを甘受するだけの受動に徹する。苦痛を排除したり攻撃するのだとしたら、忍耐しないということだから、表向きは、忍耐は、あくまでも、苦痛を静かに受け入れているのである。だが、忍耐には、どこかに大きなエネルギーを感じる。では、忍耐に感じるそのエネルギーは、どこに注がれているのであろうか。

その中心は、なんといっても、苦痛に対決して譲らずこらえるというところにある。苦痛・辛苦がここに与える不快刺激をしっかりと受け止めて、不安・嫌悪・抑うつ等の押しつぶし悶えさせる感情的重圧に向かい合い、逃げず屈せず緊張し力んで踏ん張るのである。激痛に面と向かって一歩も引かない対抗的な構えをとる。生じる緊張・抑うつなどを持ち堪えようと汗を流して耐える。

苦痛は、自分の心身が傷つき障害の生じていることを知らせ、心身は自然的にはその傷つけるものを拒否し苦痛を回避しようと緊張し激している。忍耐は、この苦痛からの逃走や排撃への自然的な大きな力を強引に抑えて冷静に装って忍び耐える。左手は動こうと全力でもがき、右手はこれを強引に全力を傾けて抑止する。その使われるエネルギーは外には出ないが、自己において二重の全力をもって衝突して消しあう。自己内での膨大なエネルギーの消耗となる。忍耐が成り立っている限りでは、そとには何も出ず、穏やかで消極的な受動状態にとどまる。うちは、猛火に身を焦がしながら、そとは、何事もないかのように穏やかに苦痛を甘受しているのが忍耐である。苦痛が去れば、どっと疲労感が押し寄せてくるほどのエネルギーを使う。

欲求の忍耐の場合、その欲求自体はしっかりと持っている。それがなくなっておとなしくなるのなら、忍耐は無用である。外面と裏腹にうちでは、活発に欲求が息づいている。忍耐は、この強い欲求をより大きな力でもって動かないようにする抑圧の能動性・積極性を維持し、欲求不充足の辛苦をうちに耐え忍ぶことをもって成り立つ。苦痛となった尿意を抑えて七転八倒するときのように、欲求の激しさ、不充足の辛苦が一方にあり、これを抑圧して歯を食いしばっても譲らない猛烈さが他方にあるの忍耐である。

#### 2-4-3. 忍耐では、抑制とちがいで、その根本の対象は自分になる

抑制は、心の中のことのみでなく、そとの物を動かないようにと抑制もする。だが、忍耐では、自分のうちに生じた不快・苦痛が直接の対象となる。欲求不充足の忍耐がすべて心のうちでの展開になることはいまでもなく、その苦痛の原因がそとにある場合も、忍耐は、うちに生じた苦痛の甘受を第一とする。

苦痛の生じるそとの原因が明確であれば、その原因の対象自体を忍耐するということで「熱い風呂を我慢」「重い荷物を辛抱」等、そとのものに忍耐するという。痛み・辛苦をとめるには、その外的な原因となるものを除去すればいいことだから、外的原因に注目する。そして、痛みを甘受し忍耐することをもって、その原因を甘受して忍耐してもいる。しかし、そこで忍耐が直面しているのは、痛みや辛さなどの不快で、この不快に耐えているのである。その不快がどんどん大きくなってついに忍耐できなくなる。はじめは風呂とか荷物に注意がいくとしても、忍耐がしがたいようになるとともに、その意識は、風呂には

なく自身の皮膚の痛みに、荷物ではなく腕の辛さという苦痛に向かうのではないか。忍耐できなくなるとは、痛みに耐ええなくなったということである。どんなに荷物の重量が大きくなっても、風呂の湯が熱湯になっても、苦痛でなければ、平気の平左であろう。

そとに傷害や妨害がいくら発生していようとも、それが苦痛でないなら、我慢することはない。かりに、そこに生じている苦痛を麻酔で無化したら、当然、我慢・忍耐する必要はなくなる。歯痛も、痛いから我慢がいるのであって、歯茎が炎症を起していても痛みがなければ、なにも忍耐はいらない。忍耐は、炎症にではなく、痛みにするのである。さらには痛みの原因がわからないとか、ないときでも、とにかく痛めば、我慢がいる。忍耐は、自分のうちの苦痛・辛苦の現存することに対してする。同じ仕事や勉強をしていても、一人は嬉々として楽しみ、もう一人は忍耐しているということがある。ちがいは、当人たちの心のうちにあり、忍耐する者は、心に苦痛を抱いているということである。こころに不満・苦痛がなくなったら忍耐は無用となる。

#### 2-4-4. 抑制のうちにも忍耐があり、忍耐にも抑制がある

忍耐と抑制は、別であるが、相互に他方を含むものでもある。忍耐は、辛苦を甘受することで、辛苦を抑制するのではない。もし、辛苦を抑制するのなら、苦痛を小さくしようと欲するのなら、それは、苦痛をそのままには忍耐しないということである。忍耐は、その点では、抑制を発動させない（よりよく忍耐を持続させるために、忍耐しなくてもよい苦痛の部分は排除・抑制するだろうが）。つらいものをそのままに、抑制せずに受け入れる。だが、それを実現するには、自然的に生じる苦痛回避の自身の衝動（逃げたいというだけでなく、攻撃し抵抗したいというものも含む）を働かないようにしておく必要がある。その苦痛回避の衝動の抑制が必須となる。忍耐は、抑制を含み持つ。欲求の忍耐の場合は、はじめから欲求を抑制していることで、抑制するから不快・苦痛となるのである。

他方、抑制の方は、そこに苦痛がなければ忍耐など必要としないが、そとの強力な動きを抑制したり、自分のうちの欲求を抑圧していると、これがつらくなっていくことがある。その辛苦の回避は、抑制を放棄することになっていくから、辛苦の甘受の忍耐が登場しなくてはならなくなる。欲求が大きくなるほどに、これを抑制することは難しくなる。欲求不満が高まるほどに、これを押しとどめることは苦痛になってくる。この苦痛から逃げることは、欲求抑制を断念することである。抑制を貫徹するには、苦痛を甘受して忍耐することがなくてはならない。外の強力なものの動きを抑制するときも、抑制が難しくなればなるほど、忍耐が求められるようになる。抑制は、それがつらい大きな抑制になると、忍耐がなくては貫徹できないこととなる。

#### 2-4-5. 節制における抑制（自制）と忍耐の有り様

節制は、本来、快樂享受を抑制することである。その大原則からいうと、忍耐は、不快の忍耐であるから、節制では中心にはならない。食において、不味いもの（不快）を甘受することを節制は求めない。快樂抑制に限定している。性欲の場合も、同様である。不快・苦痛の性行為に節制は関与しない。

節制は、抑制の営みであるが、自分のそとにあるものを抑制するのではなく、自己のうちにある欲求の抑制であり、自制ということになる。自身の快樂享受を自制するのである。忍耐は、あまり出てくることはないが、強く抑制するときには、不快・苦痛となるから、そこでは、自分のうちの苦痛・不快を甘受するものとして忍耐の出番がある。

節制（＝食と性の欲求の抑制）の対象・有り様は、そこから見える。過食や肥満は、自分では自覚しないことがあるが、そこからは誰が見てもよく分かる。性的逸脱も、単なる自己内の淫らな妄想をいうのではなく実在の異性にかかわることであれば、露見する。節制という自制・抑制は、これをしている・していないがそこから見える。だが、忍耐は、自身においては苦痛と忍耐の自覚はしっかりと持っていて、自分のうちのことで、そこからは分かりにくい。節制、快楽享受の抑制においても、不快に我慢しているかどうかの忍耐は見えづらい。かりに節食がスムーズで苦痛でないのなら、清清しく感じているのなら、忍耐などの出番はない。辛いことになってはじめて忍耐は登場する。それは、そこからは分かりにくい。節食を苦痛と感ずる感覚は、こころのうちのことである。かつ、忍耐は、しばしば、それに苦痛を感じていることを隠す。苦痛になるということは、そのことでの弱虫ということでもある。弱虫は知られたいことではないから、うちに忍び隠す。よけいに辛苦と忍耐は分かりにくくなる。

### 3. 忍耐は、徳目とはなりにくい

「忍耐」に関する言葉や文章は、しばしば、格言となり、座右の銘となる。それは、節制などの比ではなく、たくさんある。ひとを戒め励ます、高い価値の見出されている「忍耐」（あるいは「我慢」「辛抱」）であるが、忍耐は、かならずしも、倫理的な善行とか善になる心構えとは見なされない。徳目のちかくに置かれるとしても、徳目とするには躊躇するところがある。なぜであろうか。

忍耐は、苦痛を甘受して忍び耐える。苦痛・不快は、自然的には回避したいものだが、より価値あるものごとを得るために、忍耐はこれを甘受する。自然に追従する営みとは違い、これを拒否し超越した反自然・超自然の営みである。このこと自体は、優れた人間的営みとして高く評価される。辛いこと、不安や恐怖させられることから逃げずに我慢・辛抱できることは、ひととしてありがたいことで、卓越した営みである。

だが、その高い能力をつかって、ときに犯罪の行われることがある。忍耐は、悪の強力な道具となりうる。万引きや強盗などの犯罪をと思うものは、つかまったらどうしよう、反撃されるかも知れない等と不安になろう。この自然的反応に耐えられないものは、犯罪を断念するが、これに耐えることが出来る者は、実行に踏み切ることであろう。不安に忍耐できること自体は当人にとって価値あることであるが、悪においてもそれは活用される。悪用されるものとしての忍耐は、優れた人間的な能力だとしても、善と見なすことはできないであろう。

#### 3-1. 忍耐は、正義とちがひ、悪に使われると悪になる

卓越したものと評価される人間的営みであっても、それが目的とするものによって、その営みの価値は異なってくる。ひとを騙して儲けようという詐欺は、そうとうの知恵と忍耐がなくてはできないことである。おそらく詐欺師は、騙しやすい者を狙って、諸種の情報を得るために努力し、ほとんどは無駄になる電話をかけつづけ、あるいは疑い深い老人を相手に穏やかに我慢強く接触しつづける。知恵と忍耐なくしてはその犯行は成功しないであろう。

徳目というと正義や節制があがるが、正義は、「正しい」ものごとを求めるものとして、悪人が実行してもその正義は、不正ではなく正しいことを求めるもので善になる。詐欺師

は、「不正はいけない」という正義の心をもった場合、詐欺という不法・悪を中止することであろう。節制の場合も、その目的は生の健やかさであり、そのための営為としてその手段として、手段の神聖化になる。性的節制では、とくに、不倫などへの逸脱の禁止が求められることで、悪になりようがない。好色な悪人が節制しても善となり、悪にならない。

だが、正義や節制と異なり、忍耐は、それ自身において悪を排除することはない。忍耐は、不快・苦痛を忍び耐える卓越した心構えではあるが、その苦痛甘受のうちには悪を排除する契機は含まれない。忍耐、苦痛甘受は、これを手段としてめざすもの・目的を多様にもつ。ときには悪も目指される。詐欺師は、忍耐をもって詐欺（悪）を成就する。邪悪な目的のための手段となる忍耐は、邪悪なものを生み出す元凶となり邪悪なものともみなされることとなる。

節制や正義は、人間界のかなたに輝いている道徳的理念で、個々の人間（個我）のうちに降りきたっても悪に染まらず善の輝きを保っている。だが、忍耐は、脳の知的能力と同じように元々から個我にあって育て上げるべき心的能力で、善に磨けば善に輝くが、悪に交われれば悪に染まる。

### 3-2. 節制は徳目だが、忍耐はちがう

節制もときには、邪悪な目的・動機にかかわることがある。スリムになって盗みに入りやすくしたいということがありうる。だが、その場合でも節制は、盗み自体を直接の目的にはしない。節制自体の目的はそこでも身体のスリム化という健康なものであろう。節制は、そこでも悪には直結しない。あるいは、節制する精神、健やかな生を求める高尚な姿勢は、盗みという不健全・低劣なものに無批判ではないであろう。すくなくとも盗みに対してこれに迎合するような、高尚な姿勢を損なう不健全な態度まではとらないであろう。

それに対して忍耐は、その直接の目的自体を悪とすることがある。大邸宅に盗みにはいるために、節制と同じように予め筋力アップをと辛抱してトレーニングするとともに、その盗み自体の実行において諸種の忍耐をもつ。まず辛抱して高い塀をよじ登り、さらに草むらで蚊にさされて痒いのを我慢、忍耐してすきをねらう。そして暗い部屋に入って金銭・宝石を探して、蒸し暑いのを我慢し、誰かに見つかるかもという不安を抑え辛抱しつづける。忍耐力がなくては、その盗みは成功しない。その盗み（悪）の貫徹を忍耐は目指し、これを大いに支えるが、この悪を疑問に思うことはない。その悪人の忍耐力が大きくて、「根性がある」ことになれば、その悪は尋常ではなくなり、執念深いものとして周囲から唾棄されることになる。

忍耐が、日常的にはより好ましい事柄を結果する頼もしい心構え・行為であっても、ときに悪用され大きな悪をもたらす手段となるのであれば、単純にこれを首肯して済ますことはできない。ひたすらな善行となる正義や節制のような徳目と同じ扱いはできないのである。

#### 3-2-1. 節制・養生・忍耐

節制は、快楽の抑制であり、健康にとって必要な不味い不快な食べ物の甘受には無関与である。したがって、この不快の甘受（忍耐）を含む「養生」の方がより優れた健康への営為となる。であるにもかかわらず、養生よりも節制の方が、高尚な善と感じられる。どうしてであろうか。

性的な健康、健全という点で、節制は、家族の安寧とか社会的な秩序をふまえて背徳的

な逸脱を取り上げ、この背徳を排除・禁止する。だが、養生は、おそらく、社会的利他的なことは考えない。自分の健康のための性生活をはかり、精力を無駄に使わないようにと養生するだけであろう。性的養生は利己にとどまる。健康のために性的営みの抑制をというだけで、家族・社会のためという視座はない。だが、節制は、養生とちがひ、家族や社会の安寧を守るといふ崇高な善を求めている。

そういう性的節制の社会的善と同じように、食の節制では、贅沢・浪費といった、現代社会の病弊を乗り越えるための健全さをいう。養生には、食の場合でも、こういう心構えはない。あくまでも自分の健康のみである。「養生食」という言葉があるが、養生では、おいしいもので栄養をつけてという。節制は、それを否定はしないが、根本の姿勢は反対で、美味しいものを節制すること、贅沢・浪費を抑制することをいう。養生は、美味を求め、節制は美味を節制する。自然（美味の快楽への欲求）を超越した自由を節制はもつ。他者にも欲求となろう美味のものを、節制は、自制して謙虚であり、利他的ともなる。だが、養生は、「養生」の大義名分をもって美味の栄養あるものを自分のために優先することがありうる。養生は、自分しか眼中になく、狭量な利己にとどまる。

養生はもっぱら自分のケアに終始する。悪いことではないが、自分のためにのみというのは、利己にすぎる。ひとのためにケアするのは、なまやさしいことではなく、利他の気持ちがいかにしっかりしていなくてはならない。だが、自分のためのケアは、それに苦痛のともなうことがあるとしても、その忍耐は自分のより大きな安楽のためにするにすぎない。養生は、利己的節制であり、利己的忍耐である。養生は、利己のことしか頭にないのであれば、利己の悪にも資する忍耐と同様に、これを徳目とすることには躊躇せざるをえない。

### 3-2-2. 自分の首をしめるだけの愚かな自虐的忍耐もある

忍耐は、辛いことだから、好んで不利益になる愚かしいことはしないはずであるが、結構、愚かしく自分を苦しめるだけのものがある。自分が我慢すれば、ことはまずはおさまるといった目先のことしか考えないとか、苦痛にとらわれて合理性・客観性を踏まえる余裕をもてなくなることがある。「骨折り損のくたびれもうけ」は、愚かな忍耐のために作られた言葉である。

同級生のいじめ・脅しに我慢し、わが子や夫の暴力に、「自分のどこかに非があるのだろう、自分さえ我慢すれば」と忍耐する。だが、それらの忍耐は一層大きな暴力をさそうことになり、ときには殺人や家庭崩壊の破局を迎えてしまう。振り返って、「愚かしい忍耐であった」と思うが、あとの祭りである。恥を忍び、躊躇する自分を抑えて警察に相談するなど賢明なところに忍耐は使うべきであったと悔やむことになる。

過労死も、忍耐がもたらす悲劇である。この忍耐は、貪欲で邪悪な経営者を喜ばせるだけで、悲しい犠牲を結果する愚行である。辛いことも、忍耐していると慣れて無感覚となり、過労に過労を重ねて、忍耐は死をまねくことがある。忍耐は、自分の首をしめるだけのこともあるから、よくよく考えてしなくてはならない。忍耐は、すればいいというものではない。無駄な忍耐、無意味な忍耐がある。強盗や詐欺師の忍耐もある。愚かで情けない恥ずべき有害な忍耐のあることを知らねばならない。

### 3-2-3. 忍耐は、する前にすべきことがたくさんある

（忍耐の価値の算定）忍耐は、苦痛を甘受する。自らの引き受ける忍耐は、それに見合う価値あるものの獲得を見定めていなくては、骨折り損となるだけである。せつかくの犠牲

である。目的を高く掲げて、悪を避け、天に恥じないものでありたい。いやな「させられる」忍耐も自分のためになるものがある。

(**忍耐なしの代替の道**) 忍耐は、辛いことで、楽な道があるのなら、それを選ぶべきである。視野を広げれば、別の道が見えることも多い。したければ忍耐はいくらでもある。いじめ(犯罪)に忍耐することはない。忍耐するのなら、羞恥や鬱憤の暴発を我慢して、ことを公にし、いじめの排撃(心身の鍛錬とか警察等への相談)のために使うべきである。

(**効果的な忍耐の仕方の探求**) 忍耐も効果的なやり方がある。がむしゃらなトレーニングは、効果があがりにくいのみか、心身を傷めることになりかねない。合理的で省力的な方法をさがすことがある。自分をつぶす忍耐ではなく、自分を鍛え自制心を育てるなど自己形成に資するような忍耐を選びたい。

(**忍耐の限度を知ること**) 自らがはじめる忍耐の場合、苦痛と傷害の程をよく見て忍耐の限度・忍耐中止を決断できねばならない。忍耐していると苦痛にも慣れるから、限度を超えて無理が平気になることがある。命をすり減らすほどのものなのかどうか、撤退すべき限度とその方法を考えておかねばならない。

耐えられなくなり自暴自棄になって元も子もなくする前に、限度になる手前で、冷静に成果を確保してしばらく休憩するような自身への配慮もいる。辛い懸垂は五回が限度だったとしても、休憩を入れれば二十回はおろか五十回でもできる。

(**忍耐貫徹のための工夫**) 忍耐をはじめることは誰にでもできる。禁煙の忍耐など、たばこを吸う者ならみんなできる。何回でもできる。だが、これを貫徹して成功に導くには、苦痛甘受を無理やりに持続させるのだから、創意工夫をし、頭をつかわなくてはならない。

忍耐に際しては、苦痛から逃げない超自然存在としての自分に誇りをもち、目的とそれへの歩みを具体化して一步一步前進を確かめる等、継続のための知恵がいる。苦痛甘受の忍耐は、肉を切らせて、骨を切る。さきを見通す深慮遠謀がなくては、肉を切られて終わる。

(**違ったやり方、工夫、中断等を常々意識**) 苦痛にとらわれると外が見えなくなる。重ねた苦労を無駄にしてはと無理もする。疲労困憊して理性が麻痺することもある。無駄・有害な忍耐と分かったら、わが身を痛めつけている忍耐のこと、(やめる自由があるものなら)直ちにこれを中止しなくてはならない。自分の忍耐のそとに立って、醒めた目でこれを時々は見直していく余裕を残しておきたい。

### 3-3. 勇気も忍耐も悪事に加担するが、勇気は徳目に挙がる

徳目となる節制や正義は、善目的をもってするものとして善的手段となり、悪も目的としうる忍耐とは区別される。だが、勇気は、徳目にあがるが、忍耐と同じく、悪を目的とすることが結構ある。では、なぜ、勇気は徳目にあがり、忍耐はそうではないのであろうか。

忍耐は、苦痛・不快を対象にして、毎日いたるところに出くわすもので、できて普通のものが多い。凡人にもできねばならないことである。だが、勇気は、凡人がしり込みするところで発揮されるのである。危険への恐怖を耐えてするもので、忍耐をうちに含むが、それは大きな忍耐であり、凡人には、死の恐怖に対する忍耐など、至難のこととなる。その大きな忍耐を含む勇気は、たとえ悪の行為であっても、類い希な卓越した振る舞いとして、畏敬の念をもって見られ徳目にあがるのではないか。

勇氣は、凡人がしり込みし恐怖に負けて逃走するところで、これを抑制して耐え、おのれを危険にさらして、怯むことなく大胆に果敢に危険なものの排撃に挑戦する。いのちを賭けて英雄的振る舞いをする。その英雄的で類をぬきんでていることにおいて、畏怖され特筆に価する当為となり、徳目となるのであろう。だが、ふつうの忍耐は、多くの場合、凡人・万人にできることで、悪事においては、その忍耐も悪として醜い下衆のものと唾棄されるのである。

### 3-3-1. 身近な忍耐とちがひ、勇氣は、非常時の大業になる

勇氣は、悪人もしばしばもつ。海賊・山賊の首領は、類い希な勇氣なくしてはつとまらない。善行とちがひ悪行は、しばしば排撃され攻撃されるから危険に遭遇することが多く、危険に平然と対処できる勇氣が必須である。忍耐も善のみでなく悪の営みにも見られる。同じように悪行にも發揮される勇氣と忍耐であるが、勇氣は、徳目にあがるけれども、忍耐は、挙げられないのが一般である。

勇氣は、まれなもので卓越していることがはっきりしている。みんなが恐怖し逃げるところを、逃げず恐怖を耐え忍んだ、群を抜いたものである。山賊・海賊の勇氣も、直接に目的にし意志することは、危険とその恐怖に対してひるまず平然と忍耐しつづけることである。それがもたらす悪行自体とは一応、切り離して捉えることができる。その勇氣が、類い希で卓越したものとしては、悪行とは区別されつつ高く評価されるのであろう。極悪の盗賊であっても勇氣ある振る舞いに出れば「極悪人ながら、天晴れなやつ！」といたくなくなろう。悪人の勇氣は悪をもたらすものとしては唾棄されるが、その勇氣自体は、凡人にはまねのできないことで、卓越した英雄的な振る舞いとみなされて徳目となるのであろう。

だが、忍耐は、恐怖への忍耐のように大きな類い希なものも含むが、多くがだれにでもできる凡庸なものである。悪人の一般的な忍耐でも、忍耐自体は、辛苦を甘受することとして、悪行とは区別され得る。が、その忍耐は、誰にでもできることで、そのことはかならずしも高く評価されるものにはならず、悪行の一環として悪に染めて見られるのであろう。泥棒するために高い塀を辛抱してのぼるとしても、アイガー北壁を登るとちがって、それぐらいのことは、その気になれば誰にでもできることなのである。

勇氣は、命を賭ける等の危険・恐怖に立ち向かわねばならず、勇氣をもてなくても非難されることは少ない。だが、忍耐の場合は、通常の場合は、じっとして苦痛を甘受するだけであれば、大なり小なりできるのが当たり前で、忍耐できないものは、軽蔑される。忍耐は、出来て当たり前（ゼロ）で、出来ないで軽蔑される（マイナス）。勇氣は、出せなくて普通で（ゼロ）、出せたら尊敬される（プラス）。

### 3-3-2. 英雄の勇氣、奴隸の忍耐という見方もある

弱肉強食を是とするひとのなかには、勇氣は勇士が勝利するためにいづく高貴な道徳で、忍耐は、劣等の弱者が敗北に抱くものとみなすことがある。忍耐は、戦う勇氣をもてず泣き寝入りしたり屈辱に我慢をつづけること等として、なさないものだと蔑視される。強力な相手から脅され攻撃されたとき、勇氣ある者は、これに怯まず挑戦する。が、それが無いものは、戦わず黙って引き下がり辛抱する。忍耐は、勇氣のない軟弱な者の振る舞いとなる。戦う勇氣をもてず、「死ぬのはこわい」と強者に這いつくばり、敗者・奴隸になって忍耐することにと逃げるのである。



勇氣あるものは、危険に平然として、これの排撃のために勇猛果敢に戦う。優秀な強者が勇氣をもつのであり、劣等で攻撃されてじっとしているのが、忍耐する者になる。勇氣は、卓越した勇士・英雄のもので、忍耐は、弱虫・奴隷のものということになる（もっとも、弱者の忍耐は、忍耐せず無謀に自暴自棄的に抵抗して殲滅されて終わるよりは、命あつての物だねと捲土重来を期して奴隷となり臥薪嘗胆するのであれば、賢明な対処法である。その惨めな恥辱を耐えうるほどの者は、いずれ雪辱を果たすことが可能ともなる）。

それは、節制と忍耐のちがいとも重なる。節制は、富を過剰に有した裕福な者がその快樂享受に過度になるのを少し制限しようというもので、忍耐の方は、貧者が飢えを我慢するものになる。こういう優勝劣敗・弱肉強食のなかの勝者・強者の価値基準からすると、忍耐は、敗者・弱者の規範（勇氣を高貴な徳の中心におき獐猛さを賛美する者からいうと、「奴隷道徳」）にとどまり、優秀な者が勇氣や節制の徳をもつということになる。

### 3-3-3. 勇氣も大勇は、ことに忍耐力に優れている

忍耐は、苦痛から逃げず快樂にのめり込まず、快不快に生きる自然・動物のおのれを脱して、自然超越の自由を実現する。忍耐は、自然感性を抑圧・支配して人間の尊嚴の証をする。これに対して、獐猛なだけの勇氣は、動物本能の支配下にあり自然に埋没している。そういう勇氣よりは、忍耐の方が、自然支配・自己支配の人間の尊嚴にふさわしい心構えになるといえよう。

忍耐を知らない、獐猛さを単純に発揮するだけの猛勇では、犬死を招きかねない。獐猛なだけの野獣は、か弱い腕をもった者の猟銃で必殺となる。忍耐できねば簡単に挑発のるであろうから確実に急所を狙えるところまでおびき寄せて、それまでは急かず引き金を引かないという忍耐をもって、簡単に撃ち殺すことができる。獐猛なだけで忍耐力に欠けた猛勇の敵を打ち負かすには、理性をもった初年兵に、よい武器を与えるだけで十分である。なお、獐猛の勇は、自分の恐怖に忍耐できない弱虫の可能性もある。攻撃に出れば、恐怖は、その反対の姿勢だから、無化されるのである。

勇氣が稀有の振る舞いで、凡庸な忍耐にまさり、したがって勇氣が徳目になるというのは、もっともなことである。勇氣は、身の危険が迫って抱かれるもので、多くの者は危険と恐怖からは逃走する。命のかかわることであれば、勇氣は、誰でもがもてるものではない。もてなくて普通である。だが、忍耐は、万人に可能で、日々、些事の忍耐はみんながしていることである。忍耐は、いたるところにある小石で、勇氣は、まれに見いだされる宝石である。しかし、忍耐との優劣は、獐猛の勇との比較では決まらない。冷静な理性意志を堅持し類いまれな忍耐をもった大勇であつてこそ、難局を乗り越えて大きな危険を排撃できるのであり、この大勇こそが、徳としての勇氣にふさわしいものであろう。

### 3-3-4. 最後の勝利は、忍耐に優れている者の手にはいる

弱者は、忍耐させられるが、その忍耐を通して、己の辛苦に挑戦することで強くなる。強者が忍耐すれば、鬼に金棒となる。だが、単に強だけで忍耐力がなければ、長い戦いとか、自分より強い者には、勝てない。互角の者の間なら、さきに諦めたものが、つまり忍耐力に劣るものが敗退する。猛勇だけで、自分を抑え忍耐することのできない者は、猪突猛進して、猛獣がわなにかかるように、知恵を持った者の戦法の餌食となって笑いものになる。

強い卓越した者にこそ忍耐が必要なのもある。こどもの教育では、忍耐がいる。思い

通りにならない軟弱な子供をまえにして、いらいらしながらも、教える者は、耐える。教育者にもっとも必要なことは、忍耐だといわれる。猛勇を賞賛し奴隷的忍耐をさげすむ弱肉強食の社会でも、支配するトップにおいては、忍耐が尊ばれた。被支配者たちの愚かしさ・狡猾さに寛大にかまえるのは、辛いことである。忍耐なくしては、優れた尊厳をもった支配はできない。

単なる強者は、弱い者には強い。が、忍耐力がなければ自分に負け、より強い敵には必ず負ける。忍耐力をやしなつた強者は、自分に勝ち、最強の敵にも（勝てないとしても、猛攻の辛苦に耐え）弱音を吐くことはない。弱者も、忍耐力を身につければ、自分に勝ち、単細胞の強者にはやがて勝てるようになる。忍耐は、常に自分（の辛苦）という最適の敵を相手にする。忍耐するなかでより優れた能力が培われる。より強くなった自分がする忍耐は、一層大きな自分の辛苦に挑戦して、さらに強い力を身につけることになる。この忍耐の反復は、やがて、外の最強の敵を相手にできるまでの能力を開発する。忍耐することをいとわない者は、最後の勝利者となることが可能である。

力を尽くしての戦いは、知力・腕力・忍耐力等の能力を総動員しての戦いである。それらの総合力をもって人間になったのもある。腕力のみなら、ゴリラやチンパンジーの方が人間より格段に上である。「飛道具とは卑怯なり」と負け惜しみをいいながら敗走する単細胞の強者・勇者は、ゴリラ以下の存在である。

### 3-4. 忍耐は、節制や勇気などの徳目全般に含まれている

節制など徳目には、いずれも忍耐がその契機に含まれる。勇気では、恐怖という不快・苦痛への忍耐が必須である。この恐怖を我慢できないとしたら、勇気は成り立たない。節制では、快樂享受を抑制する。この抑制は、不快であり苦痛になる。この欲求抑制の辛苦に忍耐することが節制をささえる。正義にも忍耐がいる。正義は、不正があつてのことで、私利のために不正に誘惑されないようにと自制する忍耐がいる。もちろん、自分の外にある不正を排除・抑制する厳しく辛い姿勢を維持することも必要であり、忍耐のいることである。

徳目は、いずれも人の価値ある理想的な行為を、あるべき振る舞いを求める。特定の事柄（勇気なら危険・恐怖）へのあるべき特定の振る舞い方（勇気なら平然・大胆・果敢）を規範として描き出し、その理想・規範を目指しこれの実現へと向かう。それらは、「あるべき」振る舞いであり、「なすべき」こととして、当為となる。すべきだといわれるのは、自然的には、気がすすまず尻込みしたくなるからである。その実行は、感性・個我には、「したくない」不快で嫌々なことになりがちである。徳目には、こういう苦痛・不快が不可避的にともない、これを甘受し耐え忍ぶことが、忍耐が必要となる。徳目全般に忍耐が含まれる所以である。

#### 3-4-1. 忍耐は、不快・苦痛とともに、いたるところに存在しうる

不快を対象とする忍耐だが、この不快と忍耐は、反対の快樂を対象とする節制にも、さらには徳目全般にも（いずれも個我に不快の我慢を強いる面があつて）含まれている。それどころか、周囲を見渡せば、不快は、日々、いたる場面に存在し、したがって忍耐もいたるところに求められている。減量としての節制は、太れない体質のひとには、無用である。勇気や正義も、日常生活では、めったに出会うものではない。だが、万人、不快・苦痛に出会わない日はないし、それへの忍耐のいらぬ日もまれなことであろう。不快に出

会わないようにと布団をかぶって一日寝ていても、わが身から空腹・尿意・便意等の苦痛が生じて、忍耐が問題となってくる。

苦痛は、傷害発生を知らせるものだから、動物にもひとにも必須の感覚であり感情である。苦痛・不快を前にすると、生は、これを回避するという自然的対処をもって傷害から身を守る。苦痛とそれへの（回避や排撃の）自然衝動に従うことは、自然の大原則である。かりに（傷害への）苦痛の感覚がなくなったら、次々と傷害に見舞われることになり、無事ではおれないであろう。当然、ひとにも自然にしたがひ、苦痛を感じこれを回避することで傷害を回避している。

しかし、よりよく生きるには、苦痛回避ではなく、これを受け入れることが時に必要になる。価値あるものを獲得するには、苦痛を受け入れてこれを手段・踏み台にしていくことが必要となる。皮膚の痛みも、それが注射ということなら、動物とちがひ、ひとは、これに忍耐をもって対応し、その苦痛を甘受する。そのことで、よりよい生を維持・確保できるのである。日々の生活に不快・苦痛は頻出するが、これを、自然にしたがって回避しているのみでは、人間的に高度な生は維持できない。忍耐が求められる。朝は、寝ていたいのを無理して我慢して起きる。空腹でも昼食までは、待つという辛抱をしなくてはならない。ひととしてのよりよい生を保つには、苦痛・不快から逃げずこれを忍耐するということが日々必要となる。

### 3-5. 苦痛を甘受する超自然的な能力としてのひとの忍耐

忍耐は、自分の辛苦を甘受する。自然的には、自己内に生じた不快・苦痛を前にした場合、これから逃げ、あるいは、これを排撃して、苦痛の回避にと動く。それが動物的自然の一般的な反応である。だが、ひとは、必要なら、自分に生じた苦痛をあえて排除せずこれに反自然的に対応して、この苦痛をそのままに甘受して、忍耐する。苦痛甘受を手段として、より価値あるものを獲得しようというのである。

基本的には苦痛からは動物は逃げる。苦痛は回避するのが自然的反応である。もちろん動物も大きな快楽に引かれて小さな苦痛を（無視・放置し、結果的に）忍耐するようなことはある。が、複数の快不快の何れかを選ぶという自然的反応としての（大きな快の選択のため、大きな不快の回避のためという、あくまでも快不快のうちにとどまった）忍耐にとどまる。ひとにも当然こういう自然的対応としての忍耐をするが、この自然的動物的な忍耐を超えた独自の忍耐をする。ひとは、眼前の最大の不快・苦痛であろうとも、価値ある目的の手段として必要なら、これを甘受する。快不快の自然的反応を超越しているのである。

ひとは、おのれの尊厳を守るために、どんな精神的肉体的な苦痛にも耐えようとの意志をもつことができる。快不快に自然的に反応する動物なら逃げることになる苦痛を前に、逃げずこれを甘受する自然超越の自由の能力をもつ。ちょうど、腕力が物を動かす直立した人間のもつ特殊の優れた能力であるように、ひとの卓越した忍耐は、（快不快の）自然から自由になり、苦痛とそれへの自然的反応を超越して、これを忍び耐える。腕力という身体的能力をもってひとは、石や槍を投げつけて獲物が獲得できるようになった。忍耐の能力を使って、つらい苦痛を甘受し忍び耐えて、ひとにのみ可能な高度で豊かな生を実現できることになった。

#### 4. 忍耐は、善悪の手前にある

忍耐は、徳目となる節制や正義とちがい、ときに悪しきものになる。忍耐は、善にも悪にも色づけできる。ということは、忍耐は、善悪に対しては本来白紙状態で、それらの手前にあるということであろう。

善悪の手前にあるという場合、動物的レベルの話になることがある。動物のみならず、子供のすることでも、善悪の判断はないか未熟であり、善悪の手前にあって、善悪の責任は問えない。だが、ひとの忍耐は、このレベルの営みではない。動物的本能・自然にしたがっているのではない。むしろ、快不快の自然に反逆したものである。自然的には苦痛からは逃げたりこれを排撃するところを、そうせず、苦痛を甘受するのが忍耐である。善悪の手前にある忍耐であるが、それは、動物的自然的なものを越えた、自然超越の自由のレベルに定位するものになる。

ひとの忍耐は、動物的自然の快不快の感性を抑制し反自然的に振る舞うもので、動物的自然を超越した精神的生の営為に属するものになる。文明の利器と同じで、高度に人間的なものとしてあるが、それは、善にも悪にも利用される。自然の石ころや木切れとちがい、ナイフやヤリは、ひとがつくる有益な高度の利器である。だが、それはときに強盗のつかう凶器になり、悪用されることとなる。忍耐は、善用されることが多いが、悪を貫徹するためにも不可欠なものである。忍耐力のない悪人は悪を貫徹することができない。忍耐力は、悪にも頼もしいものになる。ひとの忍耐は、辛苦を甘受することをもって、より大きな価値を得るという目的を目指す。その目的内容は善に限定されるものではない。忍耐は、善悪の手前にあって、あらゆる方面の営為をささえる自然超越の人間的能力である。

##### 4-1. 忍耐は、精神生活の辛苦にも対処する

ひとの精神的な生は、単に国家などの全体・普遍とか、抽象的な美や善の観念・理念にとどまったものではなく、個別実在の個我に担われることで、生きた具体的なものとなる。その精神的な高度の生の活動を担う個我は、身体をもった個体としてあって、動物的生と同様に感情をもって営まれている。動物的感性と同じように、個我は、快不快の感情（精神化した快・不快としての、喜・悲、希望・絶望、幸福・不幸など）をもってその精神的レベルの個体的生も維持している。国家が崩壊すれば悲しくなるが、それはあくまでもその個我の所属する国家についてであって、他国がそうであっても悲しくはならない。財の獲得は喜びだが、他人がそうであっても自分という個我の喜びとはならない。精神的生も個我としては、自分にとっての良否・損得をもとにした快不快の感情でうごく。この精神生活の個我の快不快の感情を超越することが、時に必要となる。忍耐の出番となる。

ただし、精神的生では、快は、些事になる。ひとを魅了するようなことは遊び以外では少なくなる。経済的な財の獲得の営為では、これの獲得が専らの目的で、食欲・性欲とちがって、それにとまなう快（喜びや幸福の感情）はなくてもかまわない。だが、反対の不快の方は、大きな力をもってひとをつき動かす。価値あるものを失った悲嘆・絶望は、ときには耐えがたく、命を絶ってこの苦痛から逃れようとすることもある。

精神生活のうちでも、忍耐の対象となる不快・苦痛は、快とちがい大きな（否定的な）力をもつが、この不快、例えば、絶望とか不安について、そこでの個我の自然本性的な反応は、これの回避へと動くことである。人生の肝要事を放擲してでもその苦痛を回避しよ

うとし、酒などの麻薬でこの苦痛を麻痺させようともする。が、忍耐は、この不快回避の営みを拒絶し、これに逆らい挑戦して、これを甘受し耐えていくのである。「待てば海路の日和あり」と忍び続ける。

全体にとって、より価値があると思うものの実現に向けて、個我は、自己を犠牲にし辛苦を甘受し忍耐することもある。個我に大きな欲求である希望とか幸福も、より大きな目的（家族全体の安寧、所属の国家の繁栄等）のために断念し、その辛苦（進学を断念する絶望・悲嘆など）を甘受するようなこともある。

#### 4-2. 自由としてのひとの忍耐—快抑制の自由（節制）と不快甘受の自由（忍耐）—

快不快の感情は、自然的な生の制御機能の根本を担っている。この自然（感情的生）を超越するものとしての人間は、一方では、快楽にのめりこむことなく、これに距離をおいて、これを制御・抑制する自由を有している。節制とか禁欲である。逆に不快とか苦痛は、これから逃げたりこれを排撃して自然的にはうまく生を維持できているが、この自然を超越してひとは、これから自由になることもできる。それが忍耐である。

快楽は生に好都合な状態が生じていることを知らせるもので、おおむね、ひとも動物同様、快楽に引かれることで生をよりよく維持できている。快楽を拒否して生きる禁欲主義は、清浄な純粹精神に生きるために、極端な場合、動物的な快楽の自然から離脱し絶対的な自由を達成しようとするが、その徹底は自然的生の否定となる。ひとの場合、動物的な生を失った場合、これを支えにしてそのうえに成り立っている個体の精神も存続できなくなる。節制のような、ほどほどの快楽抑制という自律・自由が一般的なひとの生き方になる。

他方の苦痛・不快は、生に傷害などの不都合のあることを知らせるもので、自然的には、これから逃れることがその反応となる。生に不都合なことへ不注意であってはその生存が危うくなる。だが、ひとは、これを拒否し超越することを忍耐においてする。より高度な、より価値あるものを獲得しそれに生きるために、苦痛から逃げず、あえてこれを甘受して、苦痛に耐える。自然的反応を超越し自由になって、苦痛甘受の忍耐を手段・犠牲にして、大きな目的を達成するのである。

禁欲主義は、単に快楽を禁じるのみでなく、苦痛を積極的に受け入れることもある（苦痛回避の自然欲求を禁じる禁欲）。忍耐を好んで受け入れる。逆に快楽主義は、単に快楽享受にのめりこむのみでなく、苦痛・苦勞とか忍耐とかを回避する傾向がつよい。過激な禁欲主義は、自然的な快不快を強引に脱して、自然から完璧に自由になった精神的生に飛躍しようともする。逆に過度の快楽主義は、人の生き方をはずれ、快楽享受と不快排除の自然、動物的衝動への埋没をはかる。快楽主義は、人間以下の生にドロップしようとするのに対して、極端な禁欲主義は、人間以上になろうと無謀な試みをする。

##### 4-2-1. 快楽主義の自由は、自然（肉欲）の奴隷になる身勝手の自由である

不快・苦痛甘受の自由（忍耐）、快楽抑制の自由（節制や禁欲）と並んで、逆に、快楽にふける自由、苦痛を回避する自由をいうことがある。この自由は、動物的衝動のほしいままをする身勝手の自由であり、社会秩序・公序良俗から逸脱する自由で、個我の自然本能の奴隷になる自由である（これも自由ではある。自らに由ってするもので、ことは自分に起因するから、結果には責任を負わねばならない）。

ひとは、おのれを気ままに放置しておけば、自然に埋没して、感性・衝動の奴隷になり

がちである。動物として、ひとは自然に従い、いうなら、自然に隷属し奴隷となっている。意志して自由になるのは、この自然から脱することである。ひとの本来的な自由は、本能的衝動などの自然（脳の部位でいうと大脳辺縁系）に埋没することを拒否する自由、理性的な精神世界（理性は大脳新皮質に属する機能）に生きる自由である。自分で自分（特にその動物的自然）を律して、理性的制御のもとに合理的な生を営むという自律自由の世界である。快樂主義は、この根本の姿勢を放棄する。この放棄（精神的生から逸脱する自由、大脳新皮質の理性的機能をないがしろにし、これを快樂享受のための小間使いにする自由）のために尊い自由の切り札を使うのである。

せつかくの高度の心身の能力も、動物的感情的自然に隷従しこれに埋没するために使われるのではもったいないことである。ひとの忍耐は、感性・衝動の自然から脱して自律的に生きる人間的自由のもとにあり、この自由を実現する営為である。ひとは、よりよい生を求めて、ほしいままの自然・衝動を抑制しこれらから脱して自由になった。だが、快樂主義は、この秩序ある自由の人間世界において、食や性の快樂にのめりこみ（快樂主義が求めるのは、ほぼ動物的快樂になる。精神世界では快樂は、遊び以外では些事にとどまるからである）、これの虜・奴隷になって人間的・精神・秩序をないがしろにする。理性精神の自由は、ふしだらな感性的欲求を抑圧支配する自由を求めているが、快樂主義は、ひとの自由を、自由喪失（自然衝動への奴隷化）のために使うのである。

#### 4-2-1-1. 快樂主義が感性の奴隷なら、禁欲や忍耐は、理性の奴隷か

感性の奴隷になっていると快樂主義を批判すると、禁欲主義など精神の自律の自由の方には、理性への盲従、知性の奴隷といった言葉が返ってきそうである。知性的な方面での奴隷というと、独断とか盲信といわれるようなものは、確かに、特定の信念・教義への盲従、奴隷化であろう。だが、盲信とちがひ、理性は、本来的に懐疑・批判の精神にささえられている。実証・検証を重ね真実を踏まえようという真摯な姿勢をもつ。

忍耐する理性は、感性に従わないのではない。基本的にはこれに従う。ただ、それにしたがうことが生に有害であるような場合には、これに距離をとる、盲従しない自由を確保する。かつ知性的理性的な事柄についても、理性は、その抽象的観念に盲従するものではない。しばしば、抽象的観念は虚偽に陥る。客観的実在世界を忘れて空論となる。理性は、これを回避しようと客観性・普遍性・合理性等に留意し、盲従せず批判的精神を堅持している。

ただし、抽象的観念をもってする知性・理性の世界には、没批判・独断の盲信があつて、信の主導する営為、あるいは自己批判を欠く禁欲・忍耐等の営為は、ときに奴隷的なものとなりうる。知は全能ではない。知りえない己の限界をもつ。それを信の世界がおぎなう。神は信じる対象だが、それは、神が知りえず疑わしいものにとどまるからである。疑いを晴らし真実を解明できれば、これを知ることになり、信じる必要はない。信には、常に独断・盲信がつきまとう。理性は、そういう疑わしいものについては、知りえていないことと承知して、未知のものを想像して仮に（懐疑を中断し信じて）受け入れていくが、ときには、盲信に陥ることもある。合理的であれば、現実的に実証できなくても受け入れる（信じる）ことに傾く。中世の理性人は、天が動いているという感覚的事実を前に、天動説の緻密な整合性を踏まえて、これを受け入れていた。だが、地動（太陽中心）説が一層合理的と解明されるとともに、地球の方が動いていると認めることになっていった。理性

は、信仰とちがひ、盲信を避け、謙虚で柔軟である。

宗教は、この世を超越した神や天国を、(知りえないがゆえに) 信じる。信は、知りえぬ未来に光を、希望と安らぎを与えてくれるが、盲信はときに人間界に大きな害悪をもたらす。敬虔な信仰者は、知という懐疑・批判の武器を放棄して神へと投降し、その忠実な下僕となる。沈黙の神の代理人を詐称する邪な宗教指導者に盲従することになれば、この邪悪な愉快犯のお先棒を担がされ、信仰者のひたすらな禁欲と忍耐は、非人間的悪業に墮すこととなる。快樂主義が、禁欲主義なども奴隷だというのは、批判に耳を傾けようとしない盲信・狂信の類いにおいては、あてはまる。

#### 4-2-2. 動物的自然から完璧に自由になろうという禁欲主義

禁欲の忍耐は、欲求を禁じて、その苦痛を忍ぶ。食でいえば、旺盛な食欲を自らが抑圧してその苦痛を忍ぶ。ひとは、うちなる自然としての欲求・衝動を自らに抑制してその辛苦を忍耐することができる。怒りや悲しみの感情も必要ならこれをそとに出さないようにと我慢できる。おのれの自然からひとは自由になって振る舞えるのである。忍耐はその自由に必須の営為となる。

禁欲主義の極端は、欲求を絶対的に抑圧して禁じることになる。欲が下賤ゆえにこれを忌諱するというだけでなく、欲を克服したうえに聳える崇高な精神世界を大目的とする。下賤な欲を断って精神の高みに飛翔しようというのであり、そういう欲のすべてを完璧に断つことを理想とする。それは、意志すれば出来ることであるが、食の場合は、死をもたらす。死ねば下賤な欲はなくなるが、個体の崇高な精神も死ぬ。性欲の場合は、個体の生に必須のものでもないから、一生不犯で過ごすことができる。刑務所では、食欲と違い、挑発するものがなければ、性欲は、おのずと消失する。性欲を断った聖人は珍しくはなく、小さな子供など皆そうである。だが、食の場合は、個体の生維持に根源的であり、死を覚悟するのでなければ、ほどほどの禁欲にとどめねばならないこととなる。

むやみに自然に逆らっていたのでは、大きなしっぺ返しをうける。ひとの自然としての食や性の欲求を踏まえ、これを充足しつつ、この自然を人間的秩序のもとにと制御し自由にするべきなのであろう。快樂のみ、禁欲のみでは生には無理がくる。生の欲求・生理は保ちつつ、その行き過ぎを抑制し、これを辛抱するという、中庸の姿勢が健全なものとなる。快樂を享受しつつ、過度・逸脱を戒め節制・禁欲し、不快・苦痛を必要に応じて甘受するという忍耐がとられるべきなのであろう。

#### 4-2-3. 動物の忍耐は、快不快の自然的反応のもとでの成り行きであろう

不快・苦痛を動物も受け入れて忍耐することがある。快の欲求があるのを抑制し忍耐することもある。ただし、これは、快不快の自然のうちでの自然的反応にとどまる。複数の快不快があってその選択が求められるようなとき、二者択一的なら、より大きな快樂をとって、小さな快樂は断念して我慢し、より大きな苦痛を回避して、小さな苦痛の忍耐を選ぶ。猫は、餌が出れば、こたつで気持ち良くしていた(小快)のをやめ、寒さを我慢して(小苦の忍耐)、食の快樂の享受(大快)に向かう。いのししは、水飲み場(大快)に行くとき、近道の激痛の電気柵(大苦)を回避して、茨や倒木のあるでこぼこのまわり道(小苦の忍耐)に足を向ける。差し引きして、より快が大きく、より苦痛が小さい方を選ぶということである。快樂をもとめ苦痛から逃げるといふ自然のうちでの、苦痛甘受の忍耐である。あるいは別の大きな自然衝動があってこれがより大きければ、これにしたがひ、苦

痛は放置し受け入れるということもある。いずれにしても、動物は、快不快や自然衝動（生保護のための攻撃や逃走の衝動など）にしばられたままである。不快を受け入れて忍耐するとしても、それは、より大きな快楽や大きな苦痛、あるいは、攻撃衝動などが大きく働いて、小さな快不快を無視・放置する結果そうなるだけで、積極的に苦痛を忍耐するものではなかろう（衝動のもとで、苦痛の放置・受け入れをするのは、忍耐とはいえないかもしれない。攻撃や逃走の衝動、あるいは母性本能などにとらえられると心身の苦痛は、苦痛に過敏な人類であってすらも意識から遠ざかり無化しがちであろう。苦痛がなければ、当然、そこには忍耐など無用である）。

ひとは、この自然から脱して自由になり、快などなく最大の苦痛でもこれを忍耐する。ひとは、快不快自体から超越した反自然・超自然の振る舞いができるのである。食欲の抑制の辛苦の忍耐は、動物では、それを凌駕する恐怖とか苦痛を回避するためにならする。だが、ひとは、こういう自然反応としての忍耐をするにとどまらない。現在の苦痛を甘受すれば、未来に大きな価値物の獲得が可能なら、感覚感性を超越した想像力・推理力、未来への意志力をもつ人間は、苦痛のみの現在でも受け入れる。だが、そういう超感性的な高度の能力に未熟な動物は、感覚的現在に終始するのみである。幼児でもまだ、苦い薬は飲まない。薬を（未来の）病氣平癒に結びつけることができず、動物的に現在の快不快の感性世界にとどまるからである。

#### 4-2-4. 植物は、苦痛なく忍耐無用で、ときに理想的に見えることもある

植物には、苦痛はないから忍耐もない。動物（動く物）とちがって、自身を動かすために司令部に情報を集めることも、一貫した統一的な動きを司令する必要もない。感覚をもって情報を得、感情などで反応することは、植物には無用で、感覚も感情も存在しない。したがって、その一部分としての苦痛は存在せず、（苦痛への）忍耐も成立しようがない。竹が重い雪に曲がっても折れないで耐えているのを、忍耐とはいわない。動物やひとなら、折れ曲がること以上に、じっと立っていることが苦痛で忍耐を要するが、どんな植物も動かず立ったままで一生を送る。

植物人間は、植物様となり、典型的には感覚も感情も喪失して、痛みもなく我慢する必要もない無の状態ということになる。あるいは、動けない状態が固定されて植物的になった場合は、鈍感になる。痛みがあっても、どうにもならない状態が続くと、ひとも植物化して無感覚状態になることがある。破産などして極貧化してしばらくは絶望・悲嘆に苦悶するが、慣れると、ぜいたく品への触手などなくなり無感覚になりうる。

植物は同化異化を、動くことなく受動的直接的に行うが、動物は、動いてこれを積極的に実現していこうとする。動物でも、呼吸は、植物に近く、求めるものが直近に満ちていて半ば自動的に行われる。感覚などはあまり必要がなく、普通には苦痛・快不快もなく欲求にもならない。したがって、忍耐も無用である。食や性の営為も、植物は、やはり直近のもので間に合わせる。食の器官の根っこは、そこにあるものを吸収するだけで若干怠惰に見える。が、その生殖器は、動物の醜怪なそれとは逆に、この世の美の代表、花となり、自家受粉可能でありつつ、甘い香りも高く鮮やかに輝いて百花繚乱、虫や鳥を魅了してやまない。

忍耐において人は植物的である。苦痛がない植物であるかのように、苦痛から自由である。ただし、うちに苦痛を感受しつつのことで、表向き、植物的になって、苦痛でないか



のようにしているのみである。坐禅では、手足を折り感覚・感情を無化し無念無想になろうとする。あたかも、植物のようにである。呼吸に集中するのも、植物化ともいえる。さらに、非食をいうこともある。植物のように大地や空気から必要なものを直接摂取できるようになれば（植物食のベジタリアンも生ぬるいと、霞を食べる仙人のように空気のみを食とする人（ブレサリアン）が理想像として描かれることがある）、植物化した形での悟りの境地が得られるのかもしれない。同じ生あるものでも、植物は、苦からも忍耐からも解放されている。苦痛にさいなまれ忍耐に消耗しきって生を放棄したいと思うような者には、草原の草花や深山の木々の生は、清々しい別世界に見えてくることもある。

#### 4-2-5. ひとは、動物と同じ自然的忍耐をしても、自由でありうる

ひとも、鞭うたれてする奴隷労働では、牛馬（動物）のように、鞭の激痛を避けるために労苦の忍耐をとる。快不快の自然的反応としての忍耐である。だが、この動物的自然的忍耐においても、ひとは、これを自由の営為にと転じることが可能である。

同じく快不快の自然にしたがっての忍耐であるとしても、これに埋没しているのと、これを死よりはましだと考えて意志して受け入れるのとでは異なる。奴隷的苦痛を忍耐するとき、それで生の損傷は少なくすむのだと自身が理解している場合、自然状態から一步距離をとれているのである。快不快に自然的に（本能・衝動の場の大脳辺縁系で）反応するに留まるのではなく、この自然反応でよしと（理性の場である大脳新皮質のもとで）受け入れているのである。そういう意識のもとでは、場合によると、苦痛甘受をやめて死を選択することも可能となる。動物も苦痛を忍耐するが、それは快不快の自然的反応にしたがっての選択である。だが、ひとは、現にあるのは苦痛のみとか、快不快の選択で最大の苦痛でも、未来の目的のためにこれを選ぶことがありうる。苦痛を麻痺させて、なくする道も場合によっては選ぶ。快不快の感性自然にとどまることなく、これを超越した理性・知性の世界に立っておのれの感性を制御・支配し自由にできるのである。

苦痛甘受の忍耐を手段・踏み台と位置付け、先に目的を描いている場合、その苦痛に一層の距離をおくのである。手段は捨てるべきもので、目的が自身の魂であり守るべき価値である。その奴隷化の苦痛に耐えるなら、命は奪われず、従順にしていることでやがては解放の日も来るであろうと未来を描けば、現在の忍耐は、自由になるという目的のための歩みとなってくることである。自然状態での苦痛と忍耐のあり方に埋没することを脱して、これを優れた目的に到るための踏み台と位置付けた、より人間的な忍耐となる。

動物は、死を迎える以外ない激痛であってもこれに苦しみ続ける。ひとは、その動物の苦が無意味と分かれば、苦しみ続ける動物を銃殺・薬殺して楽にしてやる。その銃殺の役をひとでは、自分の理性が担い、もし、激痛の後には死があるのみと分かれば、忍耐はそれまでとして、死を選ぶ自由を自身もてる。逆に、七転八倒の長い激痛のあとにかならず健康の復活がなるとわかれば、確かな希望があれば、ひとは、どんな地獄の責め苦にも耐え抜くことができる。そういう自然離脱・自律的な心構えをもってするなら、同じように自然的忍耐をしているとしても、その忍耐は、動物のとはちがった、自由な人間的なものになると言えるであろう。

#### 4-2-6. ひとの自然超越の忍耐は、隷従して支配する自由

忍耐は、苦痛に抵抗せずこれを従順に受け入れるが、苦痛と有害なものを自身に受け入れるのだから、その限りでは愚かしい対応になる。だが、忍耐する精神は、有害な苦痛を

受け入れ、これを手段・犠牲にと踏み台にすることをもって、それを凌駕する価値あるものを獲得しようというのである。ひとの忍耐は、そういう見通しをもって、手段・犠牲として苦痛を受け入れる。よく言われるように、自然は、これに従うことをもって、支配可能となる。苦痛の自然にまずは隷従してこれに耐え、その忍耐を通してのち、これを支配し自由にする。ひとは、奴となることを通して、主となるのである。

苦痛甘受を踏み台にして精神的人間的な世界へと飛翔し、自然から自由になるのであるが、ひとの忍耐は、その自然状態を破壊して捨て去って自由になるのではなく、これを生かして続ける。苦痛を、麻痺させることなく苦痛として受け入れる。欲求なら、必要な抑制が終わったらこれが働くことのできる状態に維持している。忍耐は、欲求と苦痛をそのままに逆らわず受け止め、従順でありつつ、これを制御し支配するのである。

忍耐での自然への従属と支配（自由）の一番の特色は、苦痛についてである。苦痛を前にすると、通常は逃げたり排撃したりする。だが、忍耐するひとは、苦痛刺激とそれのもたらす抑うつ・不安等に少しも逆らわず隷従し、奴隷的な苦痛から逃げないで耐えていく。そのことで苦痛の事態を手元において、これを自分の大きな目的の手段に組み込みこれを踏み台に利用していく。苦痛を支配して自由にするのである。忍耐するひとは、苦痛から逃げずこれの奴隷となることをもって、この苦痛の自然をわがものにするに到る。あえて、つらい奴となり忍耐することで、やがて主にと成り変わっていくのである。

#### 4-3. 反自由としての忍耐—強制・強要の「させられる」忍耐—

忍耐は、苦痛を甘受し自由にできる。だが、苦痛は、自然的には回避し排除したいものであり、これを甘受するという場合も、当然、内心においては、そういう排除欲求をもっている。好き好んで苦痛甘受の忍耐をしているのではない。少なくとも、自身の感性・欲求には受け入れがたいものを、(自発的であっても)無理やりに自分に強制しているのである。忍耐が自由(反強制)だと規定されることには、納得しにくいものがある。快不快の自分の感性は、その自由を束縛され抑制された不自由状態にあるのである。

さらには、奴隷、強制労働での忍耐のように、自身の理性自体にも、その苦痛と忍耐は、受け入れがたい強制されたものであって、自由などとんでもないという場合もある。理不尽なことを我慢させられることは、しばしばある。理性的に納得のいかない強いられた忍耐がある。忍耐は、自発的にするというより、「忍耐させられる」ことが多い。奴隷や農奴は、その支配者によって無理難題の忍耐を強いられてきた。自由ではなく、理不尽な強制・強要になる忍耐がいくらでもある。

暴力団に脅されてお金を出すことを強要されるとか学校でいじめに耐える場合、自由な忍耐などとんでもないと言いたくなる。だが、ここにも、自由というか自発性は存在している。暴力をふるう側は、犬や猫をいじめるのとちがいで、忍耐している者について、自分自身で意志して忍耐を選択しているとみるはずである。耐えているが忍耐をやめて、「窮鼠、猫をかむ」で、反撃されるかもとか、「耐えるのをやめて、自殺などされてはかなわない」と内心では躊躇するようなことがありうる。苦痛を「忍耐させられている」としても、「現時点では反撃は無理だ、やむをえない」「いずれ倍返しをしてやる！」と、その苦痛に一步距離をおいて、それへの忍従を自発性をもって受け入れて「忍耐する」のである。

##### 4-3-1. しても、させられても、忍耐は忍耐

ボランティア(≒志願兵)は、させられる強要・強制のばあいは、単なる強制労働・奴

隷労働にと変質する。ボランティアの言葉自体が志願・自発の意味でなりたっているから、志願しない志願という矛盾したものになるというか、志願・自発の意味を失い、反志願の強制に全体が塗り替えられる。自発的であれば、楽しい奉仕のボランティアであるが、同一の労働であっても、強制で奉仕させられる場合は、苦痛の奴隷労働になる。

だが、忍耐は、強制され「忍耐させられる」ものであっても、忍耐である。強制・強要は忍耐という質を変えない。もともと、どんな忍耐も自分（その感性・欲求）への強制をもつ。その強制の質や量が異なっても忍耐自体にはあまり影響がない。忍耐であるか否かは、自分のうちで苦痛を甘受することになっているかどうかである。これが忍耐の肝心要め・要件である。こどもが、嫌いなニンジンを食べるようにと親から強制されることがある。涙を出しながらこどもは「忍耐する」が、当然、忍耐したいわけではなく「忍耐させられる」のである。忍耐は、させられても、しても忍耐である。

忍耐は、自身で苦痛を甘受するという自発的な決意をして、苦痛に抵抗せずこれを受け止める姿勢である。自分のうちの苦痛（感情）が相手であり、これを自身が受け入れる意志を貫徹するのである。その「忍耐する」ことをそこから強制されるのが「忍耐させられる」である。この強制があっても、自身が自発的に自分のうちの苦痛について受け入れる決意をしないと忍耐は成立しない。忍耐することを拒絶して抵抗し自暴自棄になって暴発して自滅する道も可能である。それをしないで、忍耐がなるのである。最後のところは、自分の受け入れの自発性があるの忍耐である。強制される者も、最後の一步は自分の自発性がある、やむをえない、しかたないと、「忍耐する」のである。忍耐させられる場合も、忍耐するのである。幼児は苦い薬を忍耐しない。口にもっていても受けいれず吐き出す。忍耐は、忍耐する気でないと、忍耐させられない。

#### 4-3-1-1. 忍耐しても、させられても、忍耐しなくても、痛むものは痛む

忍耐は、苦痛に従うことをもって、これを支配し自由にする。だが、忍耐するからといっても、その苦痛自体は、痛むことには、なんら変りはない。忍耐は、苦痛をあるがままに甘受するのである。もちろん、「忍耐させられ」ても、痛みは同様に、かつ「忍耐しない」場合も、自然に放置したままでは、その痛みは、同様に痛みつづける（もちろん、忍耐しないということで苦痛を回避できる場合は、忍耐する、させるとちがい、痛みはなくなる）。

麻酔をする場合は、苦痛は変わり消失するが、忍耐は、この痛みを消失させることはない。もちろん、痛みを求めているのではなく、これを踏み台・犠牲にして、そのうえに目的を実現することを求めるのである。したがって、痛みは目的実現とともになくなる。自然になくならない場合は、目的達成の時点で、痛みを回避する動きにでる。だが、忍耐する限りの状態では、痛みを甘受するのであり、痛みを回避せず、これに面と向かいあい、痛むがままを無抵抗に従順に受け入れ続ける。

痛みを忍耐「する」、「しない」、「させられる」について、痛みは主観のうちにあるものであれば、その主観の在り方によっては、若干は痛み方が変わることはありうる。忍耐しないで騒げば、騒ぎに意識をもっていくから、痛みは少しは気にならず痛み方は小さくなるだろうか。騒がず忍耐する場合は、ありのままの苦痛がそこには続くであろう。忍耐させられる、強要される場合は、強要という嫌なことを加算するから痛みはその強要しだいで大きく感じるようになる。その強要が自分の力をためすためにあるという場合は、「なんのこれしきの痛み」とやせ我慢することになりそうで、小さめに痛みを感じようとするかも

知れない。

精神的な絶望とか悲嘆の場合は、これを忍耐する気になっているのと、そう強要されるのと、忍耐しないのでは、その痛み・苦しみは、かなり異なってくることもありそうである。すべてがひとつの精神のうちでの成り行きであり、思い方ひとつで、絶望や悲嘆のつらさは、(愛しい者の死も、天国に召されたのだと忍ぶことができれば) 消失可能ともなる。

#### 4-3-2. 「忍耐する」と「させられる」の区別は、当人次第のところがある

ひとの忍耐は、自分の理性意志が「忍耐する」自発的なものである。かつ、最後まで感性・個我は、嫌で強制されて「忍耐させられる」のである。苦痛なのだから、気が乗らず、外から強要され懇願されて、「忍耐させられる」ことも多くなる。させられるとしても、自分で自分の苦痛を「忍耐する」のである。受動・能動(強制・自発)の両面をつねにもつての忍耐である。そのときは進んで自分から忍耐していても、あとになって、これを否定的にとらえることが生じたときには、「あのときは忍耐させられた」ということになる。

忍耐の結果が大きな価値をうみ、価値ある忍耐であった場合は、専らに外的強制によっていたのだとしても、自分が辛苦に耐えたことにはまちがいないから、自分がしたということになる。「忍耐する」自分を前面にだして振り返ることであろう。だが、結果がさんざんだったとすると、ひとのせいにしたくなり、「忍耐させられた」となる。

ときには、奴隷として、支配者の利益のために自分が命をすり減らし犠牲になり「忍耐させられる」こともある。しかし、ここでも、一面では「忍耐する」のである。忍耐せず暴発して終わってもいいのだが、自分の生命を大切にするために、奴隷として苦痛を「忍耐する」のである。その後、味方が来て解放してくれたりすると、忍耐させられたのだが「忍耐して」よかったという。

忍耐は、する・させるは、常に両面があることなので、一概にどちらかでは決めにくいものになろう。しても、させられても忍耐は忍耐である。自分がするにしてもひとから強制されるにしても、苦痛は苦痛で変わらず、忍耐は忍耐で変わらず、つらいのである。

##### 4-3-2-1. 忍耐は、学ぶ・育つなどと同じく当人の自発性が中心になろう

「打つ」という場合は、「打たれる」方は、「打つ」面はなく、もっぱら「打たれる」だけであろう。だが、「学ぶ」「育つ」とか「忍耐(我慢・辛抱)する」は、自分のことを自分でするのである。対象も自分になるから(忍耐も、要は、自身の苦痛を忍耐するのである)、自身は能動でありかつ受動ともなる。

哺乳類の場合、子は、親がしっかりと補助するから、自らに育つのだが育てられることになる。学ぶとか忍耐するのもそういうことになる。忍耐するのが根本だが、忍耐させる、させられることになる。さらに、忍耐の場合は、忍耐させることが利害に直結することもあり(辛苦の労働は、雇い主の富の源泉である)、むりやりの強制が、育つ・学ぶよりは多くなる。被支配者・弱者は、辛苦を忍耐させられることとなる。自発性が根本ではあるが、他者による強制・強要が忍耐する場面にはしばしば見られることになる。

他者による強制の「忍耐させる」「させられる」が多いとしても、自分のうちの苦痛を自分が受け入れるのが忍耐の要であり、自分がする気にならないと忍耐は成立しない。学ぶのと同じである。いくら親が強制して机につかせパソコンの学習用の画面を見るようにと学ぶことを強制しても、すきがあれば動画を見ているようでは、学ぶことは成立しない。

最後のところは、本人がその気で自発的に学ぶのでなくてはならない。忍耐も同様で、最後は、自分が苦痛を耐えようとするのがなくてはならない。きれいなエンジンを無理やり口にに入れて我慢させようとしても、忍耐する気がなければ、吐き出す。わめきちらし口を堅く閉じてしまう。する気になっていなくては、忍耐は、させられない。「打つ」場合は、これが拒否されようと、それは無視して、打つ方が一方的にこれを実現できる。だが、忍耐させることは、学ぶのと同様、当人が受け入れる気になっていないと、自発性がないと、成立しない。

#### 4-3-3. 「忍耐させられる」から「忍耐する」への展開

苦痛は、いやなもので、自然的には、進んでこれを甘受して忍耐するようなことはない。その点からいうと、まずは、勉強や忍耐といったひとの営為になるには、それにと点火するものがある。おのずからに、自主・自発になるとしても、はじめは、こどもがそうであるように、外的に強制される「させられる」忍耐となるのがふつうである。それ以前に、「させられても、しない」状態がある。いくら外的に強制しても、忍耐する意志をもたない限り、ひとの忍耐は成立しない。苦い良薬を我慢しない幼児は、口に押し込んでも吐き出そうとする。忍耐以前の状態である。

外的に強制して、「忍耐させる」「させられる」ことが成立するのは、当人が、いやいやながらも「忍耐する」気になる段階である。仕方がないと自らが自発的に苦痛を甘受する状態である。いやなエンジンを食べるのは、外的に強制されてであり、「忍耐させられる」のである。外的強制といえども、最後のところでは、当人が自発的に意志して受け入れている。「させられて、する」のである。「しつけ」は、この忍耐させるものの代表になるか。

その外的強制を内化できれば、納得して「忍耐する」自主的なものとなる。強制とか懇願を想像で自身が先取りして、あるいは、それをもっともと了解して、自らがおのれを鞭打って、いやな苦痛を甘受するのである。未来に目的を描き出して、その手段として（苦痛甘受の）忍耐が必須と自覚するようにもなろう。忍耐しない自由もある、やめる自由ももった任意とする自主的な忍耐である。エンジンはいやだが、健康にいいのだからと、自身から我慢して食べるのである。

「忍耐する」と「させられる」の違いは、その場の風向き・気分の問題となることもしばしばである。する気になれば、させられていても、する忍耐となる。自主的にしていても辛くなると考えが変わって、させられていると思ひ直すこともある。宿題をする子供は、嫌々にはじめても、興に乗れば、自分から、「もうちょっとだ」とすすんで忍耐する。だが、難しい問題で立ち止まるようになると、「毎日毎日、辛抱させられて」と、嘆くことになる。

#### 4-3-4. 「させられる」忍耐より、「する」忍耐の方がいいとは限らない

愚かしい忍耐がある。悪行のための自発的忍耐がある。忍耐は、すればいいというものではない。「させられる」ものより、「する」ものの方がいいともいえない。むしろ、善行はいやいやにさせられることが多いかもしれない。悪行は、だが、悪意の内面を隠し忍び続け、被害者の抵抗に耐えて、おそらく、かなり自ら「忍耐する」ことが必要となろう。

自分が率先してする忍耐の多くは、エゴのもので、場合によると、周囲には迷惑なことかもしれない。する忍耐は、させられる忍耐よりも、よからぬこととなる可能性もありそうである。物事の判断が十分にできない者、こどもなどについては、自発的な忍耐ではで

きることが限られるから、外からこれを善導して「忍耐させる」ことが必要になることもある。自発的な自由な忍耐と強制的な不自由の忍耐と、どちらがいいかは、一概には決められない。

しかし、その忍耐がひととして好ましいことである場合は、他人に言われる前に自分で率先してする方がよいことはいまでもない。周囲から強制・強要されてしぶしぶする、「させられる忍耐」よりは、自分から進んで「忍耐する」方が好ましい。子供の場合、すべき忍耐は、しだいに自分からすすんで「忍耐する」ことへと成長するものであろう。自発的にする方が忍耐の中身自体がよくなるであろうし、自分にも周囲にも、忍耐にかかわっての手間暇がすくなくて済む。効率的である。

だが、効率ということでは、強制される方がよいことも多い。自分でする場合、苦痛の受け入れはつらいから、ついつい、甘くなり、忍耐の限界を低くして成果はあがりにくい。それに対して、そこから強制され求められ「忍耐させられる」場合は、自分の限界を高くに置かされるし、自分でも高く置くことになる。とくに、励まされるような場合は、大きな成果を出しうる。苦痛も甘受も主観的で、忍耐の限度はかなり融通がきくからである。

#### 4-3-5. 「忍耐させる」しごきは、教育・訓練の場には必須である

教育・訓練は、ひとの能力を高めるためにする。勉強にしてもスポーツにしても、忍耐させることが必須となる。能力を高めるには、能力の限界になり傷害が発生しそうなぐらいのところを訓練していく。筋力アップでは、筋繊維を一部壊し（筋肉痛となる）、その修復時により大きな筋肉にするというから、筋肉に若干の傷害を引き起こすような過激な訓練が必要となる。苦痛が生じ、これに耐えることがある。苦痛の甘受、忍耐がひとの諸能力を伸ばす。

苦痛をもたらす訓練は、苦痛一般がそうであるが、自然的には避けたいもの、逃げたいものである。訓練・練習は、いやいやになりがちであり、ぐずぐずすることになる。そこからこれを駆り立てることが必要である。教育・監督するものがこれを後ろから追い立て練習の場へと追いこむ。さらに練習中も苦痛はできれば回避したいのが自然であるから、これをさぼらせないようにと鞭うつことになる。ひとりだと苦痛・忍耐の限界を低くおこうともするので、そこから合理的に計って高めぎりぎりの限界を設定して、そこまでの苦痛を忍耐させ能力を開発していく。苦痛の忍耐は、どんな訓練にも必要なことである。「猛訓練」は、ぎりぎりまでを「しごき」「しぼる」ことである。

ただし、しごきでは、苦痛に忍耐させ若干のダメージを心身に与えることになるのだから、指導する者は、厳格に合理的科学的になり、忍耐させるその限度をしっかりと見定めていなくてはならない。思い通りにならないからといって焦ってはならない。教育・訓練の場で一番忍耐が必要なのは、もたもたするしごかれる者ではなく、イライラするしごく指導者・教育者である。

##### 4-3-5-1. しごきは、合理的科学的なものでなくてはならない

教育とか訓練には、忍耐させることが、いわゆる「しごき」が必要となるが、しごきは、科学的合理的でなくてはならない。苦痛を忍耐させるのだから、行き過ぎるとダメージを与えて、能力を伸ばすよりは、逆にこれをつぶすことになる。無駄・無意味な忍耐、有害な忍耐のあることを承知していなくてはならない。限度を超えたしごきは、暴行・傷害罪になる。能力向上に反するしごきは、堅く戒める必要がある。

ひたすら走ればよいように見えるマラソンでも、自転車で竹刀をもって追いかけるのではなく、合理的科学的に特訓する必要がある。広島県の山奥の世羅高校を日本一のマラソン校に育て上げた（のちに広大の教授になった）新畑茂充先生は、その鑑ともなるひとで、指導は、頭を使うこと、科学的合理的なものに徹底したとのことである。私は（定年後、スポーツ関係の学部三年ほど席をおき）新畑先生の近くに研究室を置いていたことがあるが、先生の部屋には血液検査をする高価な機器が置かれて、生理学の研究室といった感じであった。なにより、新畑先生は、声はちいさく、根性だ何だと激して叱る熱血漢などとはかりそめにも言えない感じで、指導は、理性に徹する以外ないと思われるような先生であった。最近、大学マラソンでは、青山学院が優秀な成績を出しているが、この指導者も、やはり、科学的な指導に力をいれているようで、走って筋肉が傷んでいるのを早急に適切に回復させるために、アイスや冷水をつかって冷やすというようなことをしているとか、である。

しごき・忍耐の限度を見定めて、科学的合理的に指導することが肝要で、あとは、多くの場合、見ているだけでことは進んでいく。もちろん、「科学的に」ですべてが片づくわけではない。指導が科学的になったところで、より優れた者になるには、能力はべつとすれば、本人のやる気、どれだけ練習に励むかにかかってくる。根性・闘争心をたたきこむ根性論に戻る面が出てくる。

#### 4-3-5-2. 「しごき」は、SM(サド・マゾ)なども真面目に考察すべきかも

しごきは、SM(サディズム・マゾヒズム)の奇怪な世界に戯画化されることがある。指導者が鞭を持ったサディスト(加虐性愛者)で、しごかれる者は苦痛に恍惚と魅されているマゾヒスト(被虐性愛者)という図柄である。SMは、性的快楽を得るために苦痛刺激を媒介にしているだけであろうが(Sの方は、攻撃・支配の快が、愛撫すべき性的場面に(弱い者いじめのように)歪んで出ているのであろう)、特訓での忍耐・苦痛を考えるに際しては、戯画にとどめず、これを真面目に分析すべきかも知れない。指導者の愛の鞭の与え方は、適切に効くようにとしっかり工夫すべきだし、特訓を受ける者において苦痛を楽しむということがありうるなら、それを見つけないものである。苦痛を、快にまではいかなくても、求めたくなるようなものにする方法が見つけられるのなら、倒錯のMであっても、検討に値することであろう。

脳内の快楽物質(ドーパミンあたり)は、単に価値物獲得とか快楽につながる神経刺激で生じるだけではなく、特殊な苦痛刺激などでも、これが脳内に分泌されることがあるという。ジェットコースターとかバンジージャンプでは、恐怖という強烈な感情の刺激で、どうもそういう快楽物質が出て病みつきになるものようである。M趣味のひとは、特殊な苦痛刺激を介して、おそらく脳内に快楽物質をだし、性的快楽を高めているのであろう。

苦しいはずのマラソンで、ランナーズハイといわれる恍惚とした快の状態になることがあるという。宗教の世界では古くから、過激な苦行があった。苦行は、途中からは、苦痛であるよりも、苦痛刺激を介して脳内に麻薬様物質が出て、快体験となることがあったのではないか。これらは、Mと同じように、苦痛を快にと転換しているのだから、苦痛をよりよく忍ぶために、忍耐の参考にできるものがありそうである。

能力を高めるために「しごく」指導者は、特訓が快適なものになるように不快・苦痛対策に種々知恵を傾けることがあってしかるべきであろう。かつ、仮に快にできるからと

いっても（スポーツや音楽の場合は、本来、娯楽・楽しいもので、しごきも工夫すれば簡単に快適なものにできるであろう）、行き過ぎには、もともと心身を損傷しがちの特訓のこと、注意がいる。これらも科学的な指導（しごき）の一環ということになるだろう。

#### 4-4. 目的活動としてのひとの忍耐

ひとの忍耐は、（自然を超越した）自由の特性をもつが、同様に、自然の因果的展開を利用しこれを超越した、目的論的展開をする営為であることも大きな特性となろう。自然の因果の展開は、原因から結果へと一方向に因果連鎖をもってなる。だが、ひとは、これをふまえつつ、これを超えた目的論的展開をする。この展開は、目的を未来のうちにまず立てて、その目的を作り出す因果を逆方向に観念的に遡源し、目的のための手段となる手元の原因を見つける。自然は原因から結果へとすすむが、目的論は、まず、結果＝目的からはじめてその原因へと時間的に遡源するから、因果を観念において逆方向に、果から因へと進む。そして、この手元の原因を確保し発動させ、これを踏み台・手段とすることで実在的に因果連鎖をたどって目的を実現していくのである。

ひとは、忍耐において意識して苦痛を甘受する。これは、自然的には起こらないことである。自然的には苦痛は回避し排撃する。それをしないで受け入れるのは、目的があつて、これを実現するには、（自然的には生じない）苦痛甘受があれば可能と、これを手段としてたて、手段＝目的の展開を描き得ているからである。自分の田に水をいれるという目的を描き、自然的には他へと流れている水を、我田への引水（目的）がかなうようにと、その手段となる措置を講じる。苦勞して、水を堰き止める堰をつくり水路を掘り、水の流れを変えて自分の田の方向へと導くのである。自然因果に背くのではない。自然因果をふまえつつ、目的のために、ひとの忍耐等の人為（的原因）をさしこんで自然因果の展開の方向を変えるのである。

##### 4-4-1. 目的活動以前の忍耐も多い

ひとは、日々、目的論的に動いている。快や不快に自然因果的に動かされることもあるが、多くの行動は、目的をもってのものである。ビールを飲もうという目的をもって冷蔵庫を開け、ひげを剃ろうとの目的をもって洗面台の前にたつ。そこに立って、「はてなんのために？」と目的を忘れると、人生の終りの近いことを思うようになる。忍耐も、ひとの営為の一環として、目的論的に展開する。

だが、忍耐は、そとから強制されることも多く、そういうときは、未来に目的を描きこれの実現をめざしてということにはならない。まずあるのは、苦痛であり、これを甘受せざるを得ないという一方的に受け身の現実である。未来がどうなるかは考える余裕もない。苦痛に対処し、さしあたり被害の拡大を回避し苦痛を少なめに無難に穏やかにと忍耐するのである。蜂に刺されて激痛がはじまる。痛みを耐えることから、ことは始まる。未来の目的のために蜂に刺されて忍耐し始めるのではない。苦痛の耳鳴りがはじまる。せみが庭で一斉に大音声を上げ始める。目的を描いて、せみに、耳鳴りに忍耐するのではない。ことは無目的に始まる。まず、苦痛があり、さしあたり被害を小さめに穏やかにと忍耐するのである。

しかし、ひとの忍耐は、そとからの強制であっても、自発的である。自然の圧倒的な威力を前にしては、苦痛を甘受する以外手がないと諦念することで、自ずから忍耐するのである。ひとは、未来に生きる。その未来にとって苦痛甘受が一番好ましい結果を生むと



というようなことで現在の忍耐を自発的にすすめることでもある。せみが庭で朝から騒がしいといっても、追い払う無駄を繰り返すより、あきらめる方が穏やかな一日にできるであろうと、先の（目的の）賢明な計算ができる。そういう消極的な後付けの目的を描くことをもっての現在の忍耐ともなってくる。

#### 4-4-2. 忍耐は、苦痛を介して未来・目的を目指す

ひとは、何をするにつけても、まずその目的を意識し、目的達成のために、それを可能とする手段を選んで行動をはじめていく。出かけるときはもちろん、家のなかでも動くときには、目的をもって動く。苦痛に忍耐するときも、同様に目的論的になることが多い。

ひとの忍耐の、ほかの目的活動と異なった特徴は、手段としての苦痛の甘受にある。日々描く目的のその手段は、かならずしも苦痛ではない。体をきれいにするという目的のために、手段として風呂に入るが、この入浴という手段は、不快ではなく快樂の方に入るであろう。手段が快で、目的も快である。栄養を摂取するという目的には、食べることが必要である。食を手段として栄養摂取が可能となる。この食事という手段は、ときには、きれいなものを食べなくてはならないといういやな手段となることもあるが、多くは楽しみなのである。こどもをつくるという目的の手段としての性的交わりなど快樂の代表になるぐらいで、手段はかならずしも苦痛になるわけではない。だが、忍耐は、常に苦痛を媒介にしている。

自然的には苦痛からは逃げたりこれを排撃したりするから、苦痛から逃げずこれを甘受するという忍耐は、優れて人間的なものとなる。ほかの動物では、もっぱら苦痛のみがあるというところでのその甘受はしないであろう。幼児でも、まだ、快不快にとらわれたままで、苦い良薬は、飲まない。それを手段とした病氣治癒の未来の目的を描けないからである。苦痛（甘受）を手段とする忍耐の目的論的行動は、人間に固有の営為である。

##### 4-4-2-1. 損害・損傷のみとの覚悟ももっての忍耐

忍耐では「骨折り損のくたびれもうけ」をいう。忍耐するところには、かならず苦痛甘受の骨折りがある。生は、この甘受においてつらい思いをする。忍耐だけだとすると、苦痛・損害のみになるということである。したがって、安易に忍耐ははじめられない。損傷の苦痛は、未来に価値ある目的の実現を確信して甘受できるのである。

かりに、目的活動の手段が、忍耐とちがって快なら、その目的が実現できなくても、快を享受できたのであり、その手段の実行を悔やむことはなかろう。食も性も手段のみが実現されて、目的の栄養摂取や子供づくりがかなわなかったとしても、その手段の快自体に文句をいうひとはない。だが、忍耐の場合は、目的が実現できなかったとすると、手段の苦痛だけが、マイナスのみがしっかり残るのである。

目的が、どうでもいいようなものなら、忍耐はしないであろう。忍耐する苦痛は、できるならこれを避けたい辛いものである。そのつらい苦痛を受け入れても実現したい目的が忍耐では立てられている。自発的に忍耐するのは、そういう価値獲得にみあう苦痛だからである。他方、させられ強制される忍耐は、自身ではしたくないつらい苦痛だから強制されるのである。いずれにしても、忍耐では、目的の手段となる苦痛とその甘受は、覚悟してのみ受け入れられるような大きな苦痛であり、つらい甘受になる。

忍耐は、「肉を切らせて、骨を切る」営みである。苦痛甘受の忍耐という手段は、まちがいなく、つらく生否定的なマイナスの事態である。「肉を切られる」のである。その非常の

捨身の手段で、「骨を切る」目的が実現しないとすれば、切られて傷害を負って終わる。快適な食事という手段なら、栄養摂取の目的がなくても、問題はない。だが、忍耐は、目的実現できなかったときは、無駄骨で散々な目にあうのである。

#### 4-4-2-2. 忍耐の目的は、「苦痛には限りがあり、報われる」と励ます

かりに、苦痛の現在のみがあって、この苦痛が有限であることが分からないのだとすると、耐えがたさはどんどん大きくなろう。「あと二日我慢すれば済む」というのとちがって同じ苦痛の持続であったとしても、「際限のないこと」と感じられた状態では、その忍耐はよほど辛くなる。癌の末期状態で激痛の続くようなことがある。生きている限りは、もう安楽な状態にはなれないのだと諦念する。あとは、激痛を短くするために安楽死を選ぶというようなことになる。食の場合なら、快であるから、これを一生続けていく必要があるということは少しも苦ではない。日々の楽しみであり、この食の営為をやめたいと思うようなことにはならない。だが、苦痛の場合は、これが永遠に一生続くのかと思えば、暗澹とした気持ちになる。

忍耐は、苦痛を甘んじて受け入れ続ける。それだけだと、長い苦痛の持続においては、耐えがたさが増すばかりである。だが、ひとの忍耐は、目的を設定することにおいて、この苦痛甘受を慰め励ます。まず、目的達成までの有限の間の限られた苦痛であると、苦痛の限度を示してくれる。さらに、目的は価値ある物事で、しばしば大いに快・愉快となることでもある。したがって、忍耐は、その快を実現するための苦痛・不快であると、苦痛甘受を、快に、未来の楽しみにと置き換えることを可能とする。

目的・ゴールを知っているカメは、のろまでも、辛い道程の先には大きな褒美があると、首をあげて千年の先までを見定め、危険には首を引っ込め忍び耐えて、甲羅のうちで夢を育みながら、最後まで忍耐の歩みをやめない。だが、ゴールのことを考えないウサギの場合は、辛くなって立ち止まり、四圍の危険に耳を敬ても先は見ず、果てしのない苦痛だと感じると、忍耐をやめ、先に進むことを断念する。

#### 4-4-2-3. どこまでも手段・踏み台にとどまる忍耐

忍耐は、目的の手段である。手段のなかには、その目的に向かうことをせず、それ自体が目的になるようなものもある。食や性の営為は、目的は栄養摂取、子供づくりであろうが、昨今は、それは、背後に引き下がり、ときには、そういう目的をもたず、逆に本来の目的を排除・拒否することも多い。食は、手段であるよりそれ自体が目的となる楽しみで、大目的の栄養摂取にならないように、肥満しないようにとすることもある。性的営みも、本来は子供をつくるための手段である。それは、パンダや牛馬の種付けのように年に一二次で済む。あとは専らに楽しみでするのである。ときには、自然的目的の子供づくりを拒否し、妊娠しないようにとまでして、これを楽しむことになる。手段でなく、目的になってしまうのである。

食や性の営みでは、それが手段であること、目的論的であることは、しばしば崩れる。だが、忍耐は、どこまでも手段であることにとどまり続ける。それ自体が目的になることはない。目的は忍耐の苦痛甘受のそとにある（猛訓練での忍耐は、その労苦の生産物という目的のないものになるが、ここでも、心身の能力開発という目的をそとに持つ）。忍耐は、そのそとの目的のために役立つ手段・犠牲であり、踏み台にとどまる。手段と目的が忍耐のもとでは、はっきりしている。忍耐の苦痛甘受は、専らに手段であって、目的を実現す

るための媒介に徹する。食や性では、現在をむさぼりがちだが、ひとの忍耐は、つねに未来を生きる。

#### 4-4-2-4. ひとの忍耐は、確かな未来（目的）が導く

忍耐において、現にあるのは辛苦・苦痛のみである。なによりも避けたい逃げたい苦痛である。その苦痛から逃げず、これを受け入れて耐えていく。未来の大きな目的があるからである。現在の辛苦の歩みが、その未来の夢を現実化していく手段であることを確信して耐えていく。その目的をなくし、それを描く想像力や理性をなくした場合、ひとは、いまある苦痛のみには耐ええなくなることであろう。

未来は、まだないものとして不確定・不確実である。宝くじで二千万円当たるのは、不確定で、まず不可能に近いから、これに一千万円つぎこんだり、10枚の抽選券を激流に落としたからといってこれを回収しようと命がけになるようなことは、おぼれている子供を助けるときと違って、しない。だが、忍耐の未来は、確実な未来である。二千万円のために、一千万円をつぎ込む。かりに、二千万円が入らないと分かったら、即刻一千万円の出費は中止する。価値ある確実な未来を見定めて忍耐するのである。未来の目的から現在の苦痛甘受の手段までの赤い糸を見ることができるのは、人間のみである。その赤い糸をたどって、ひとの忍耐は、現在を犠牲にして、未来の大きな目的・夢を確実に現実化する。阿弥陀くじでいえば、当たり＝目的から始めて手元までのジグザグをたどっていくのが赤い糸になる。それを手元からたどれば100%当たりを確保できる。忍耐は、確実な未来（目的）をもつのである。

動物は、目の前にある美味しいものを食べて終わるが、ひとは、これを今は食わず、育てる方にまわしていく。その我慢と辛抱は、確実に、大きな収穫をもたらす（もちろん、未来は未定で想定外の偶然も絡むから、忍耐もときに「骨折り損」になることはある）。自然は、因果必然のもと動物を快不快の感情にしたがわせる。だが、ひとは、これを超越して自由になり夢を描く。その夢の中から、忍耐は、確実に未来の目的を実現できるようにと、目的と手段を精査・精選して苦痛を引き受ける。忍耐するひとは、おのれの現在を犠牲にして、その犠牲のつくりだす確実な明日（目的）に向かって生きる。

#### 4-4-3. 忍耐での目的は単一ではない

忍耐を手段としたその目的は、ひとつになるとは限らない。芋の天ぷらを（手間がかかって煩わしいのを辛抱して）料理するという手段は、目的に、栄養摂取をまずあげうるが、料理する者自身でなく、これを子供にも食べさせるという目的をもったり、夜食に残して利用しようという目的も描ける。さらに、食物繊維を摂る目的を描いたり、自家菜園からのものなら、安全な食という目的もえがける。

それ以前に、忍耐は、目的ゼロ、無目的のもののあることでもある。動物の忍耐はそうだし、ひとでも、自然のもたらす苦難とか、奴隷化が強制されるものでは、自分から目的など立てて始めるわけがないのである。忍耐は、苦痛とその甘受だけがあれば成り立つ。それでも、動物とちがいひとの忍耐となると、仮に強制されたものでも、目的をいくらかでも後付けできるから（家族のためにとか、チャンスを待つために等々）、どんな奴隷的な忍耐でも目的をもちうる。ひとの忍耐は、無目的にはじまるものでも、一応、目的論的に見ていくことが可能となる。

忍耐は、苦痛を受け入れ、マイナスの事態を引き受けるのだから、その「骨折り」に見

合うだけの目的がならないと「くたびれもうけ」となってしまう、忍耐する意欲をそがれる。逆にいえば、大きな価値獲得がなり、多くの目的が魅するものであれば、手段としての忍耐は、大いに踏ん張る価値があるということになる。「賢い子は、よりよく忍耐できる」というが、ひとつには、この諸目的をしっかり描けることで自分の忍耐の価値を大きく評価でき、頑張れることがあろう。忍耐中、途中経過を種々確認し苦痛と忍耐を小分けにし緩急を交え最後まで気力を持続させうることが大きい、魅する目的を大きく多く描けることも忍耐力を強化する。

あるいは、目的の周辺についても、気を配れる者は、忍耐の価値をさらに高くできる。その忍耐が間接的にもたらすものがあるから、これも苦痛甘受のときの支えとしていける。動機も目的の周辺にある。芋を食べるという目的が出てくるきっかけ、これへと誘う動機がしっかりしておれば、目的をより堅持できることであり、手段の忍耐を断念しない支えともなる。芋は腸を掃除するとか、肌の美容にいいと知れば、食べようとの動機を強くし、これへの目的を増やし一層頑張れることになる。

#### 4-4-3-1. 忍耐させる者の目的と、する者の目的・無目的

強制としての忍耐では、当然、強要する者の描く忍耐の目的があり、忍耐する者にこれを強制する。それが教育的なものであれば、忍耐させられる者も、させる者の目的に参加することである。だが、させる者のみの利益のための忍耐だと、奴隷労働がそうであるが、忍耐する者は、させる者の利益・目的のそとにおかれ、その目的とは疎遠な状態になる。自分のつらい苦痛甘受の忍耐において、自己疎外を感じる事となる。それでも、辛抱しようというのは、「拒否して殺害されるよりは、生きる方がまし」等と、強制労働への、消極的な後づけの目的が描けるからであろう。

嫌いなニンジンをこどもが我慢して食べるのは、親が強制するからである。それが滋養になり、強い体を作るからだ、親は、目的を描くとしても、子供の多くは、目的を描いて食べるのではない。親が強制することに抵抗せず諦念して、(食べないで、怒られたり遊びに出ることを禁止されたりするよりは) より不快の小さい方をと忍耐するのである。それでも、賢い子は、親の描く目的に納得してこれを自分の目的としていくことである。

苦痛・苦労が現にあっても、それを耐えることで何かがなるという目処(目的)がたたないでする忍耐もある。食べるものがないので食べないで我慢しているというようなとき、未来になにかを描いてではなく、無為に、やむを得ず我慢しているだけのことがあろう。昨今であれば、若干の恥を忍べば、あるいは汗水を流せば、食べ物にありつけそうだが、「面倒くさい、空腹の方が苦痛は小さい」という、快不快の自然感性のもとにあつてのことかもしれない。ときには、「武士は食わねど高楊枝」と、尊厳ある生の堅持を描き(そう目的を後づけし)、空腹の我慢を目的意識下の忍耐とすることもあろう。

#### 4-4-3-2. 「シシュフォスの岩」的な忍耐

無意味(無目的)なことを反復して忍耐させられる話として、ギリシャ神話の「シシュフォスの岩」というのがある。シシュフォスは、神をだました罰として、大きな石を麓から山頂まで運ぶ辛苦を背負わされるが、頂上まで運び上げるとその石は転げ落ち、また最初からこれを山頂まで運び直すという無意味な辛苦を、これを甘受する忍耐を反復させられるのであった。苦労して仕上げたものに対して、「これではダメ、全部やり直し」と言われることがときにある。一回いわれても、苦労が水のあわになるのだから、どっと疲れが

でる。シシュフォスの場合、目的を剥奪された忍耐を際限なく繰り返させられた。創造したものを無に帰してしまう無意味な忍耐の反復である。

目的を奪われた忍耐は、現代では、かなり一般的に行われている忍耐である。いわゆる練習・訓練の反復がそれである。かつ、これは、無意味とは感じない。その忍耐は、その労苦による創造ということでは、その創造物を無視する。魚を獲るための投げ網の練習は、魚がいない陸上で何回も同じことを反復し、魚の捕れない無意味なことを繰り返す。だが、練習での忍耐の主目的は、その営為でなる創造物にあるのではない（形式的には仮想目的に向かって行為をなすが）。その目的は、特定の心身の能力を身につけることである。シシュフォスも、反復して重い石を運ぶ忍耐を強いられて、強靱な肉体へと自身を鍛え上げることになったにちがいないのである。

シシュフォス的忍耐の卑近な例として訓練をあげたが、単純な賃金労働こそが、これの代表例となるべきかも知れない。賃金以外には無益な苦役と感じての、日々同じ単純作業を反復するだけの難行苦行である。かつての時代には、丁稚奉公、弟子入り、修行・遍歴といった青少年に課された汗と涙の労苦があった。これは、その苦労の営為が実際に創造するもの（目的）は主人・親方のもので、自分は無報酬に近く、賃労働以上に「シシュフォスの岩」的であった。が、これは、他面では、現代の訓練と同じで、自身の能力開発を目的にする忍耐でもあった。

#### 4-4-3-3. 自然的無目的の忍耐も後づけで目的化する

ひとが忍耐する場合、典型的には目的を描きその不可避的な手段として苦痛の甘受をする。だが、そとから強制される場合とか、降ってわいたものなど、目的を描くことはなく、突然の苦痛の出現とこれの甘受という、未来の目的などなしの無目的の忍耐になることも多い。蜂に刺されて激痛に忍耐するとか、朝からけたたましいセミの声など、そうである。自然的な災害への忍耐は、苦痛・辛苦にはじまる。突如襲来した辛苦に、避難の方法も見つからず、下手に動くともマイナスになりそうで、さしあたり、じっとその受難を耐えるのである。

だが、そういう自然的な災害への苦痛の忍耐も、目的を後づけはできる。おそらく、長く続く辛苦と忍耐には、目的を描き出していく。未来の目的が引きつけることで、現前の辛苦と忍耐をよりよく耐えていけることになるのである。その未来の目的は、積極的な目的であることもあろう。被災してこれの片づけをするなかで、復興のプランを描きだして、これの実現へと現前の辛苦を忍耐する。その一步一步を復興プランの実現と位置付けて、辛苦甘受を支えていく。

消極的な目的定立もする。蜂に刺されての激痛の忍耐では、毒液をポイズンリムーバーで抜き出したらむやみにつかず「我慢、我慢」で、やがて痛みのない安寧の状態になるのだと未来を描いてこれへと時間に耐えていく。現在の激痛が永劫つづくかもというような事態では耐えがたいが、時間とともにだんだん治るのだ、穏やかな状態が復活できるのだと前向きであれば、忍耐はしやすくなる。暴風雨に「ここでじっと我慢しておれば、やがて天気は回復する」と、むやみに騒がず事故を起こさないことに限るといような場合もある。無目的にはじまることへの後づけの目的設定である。

#### 4-4-3-4. 忍耐には、不定の未来への漠然とした目的も多かろう

少々の苦痛ならばこれが続いていても、へこたれることなく忍耐できる。だが、激痛が

持続するとか、つらい状態が果てしなく続く捕虜・奴隷の生活になると、その眼前のつらさに耐ええなくなってくる。忍耐をやめて暴発し反抗して殺されたり、あきらめて消極積極の自殺もすることになる。そういうとき、未来に希望を描ければ、解放の可能性などの漠然としたものであっても目的を描ければ、耐えることに意味・価値を見出して、よりよく忍耐できることである。

日頃の些細な苦痛とこれへの忍耐では、ことさら未来（目的）に注目することはなさそうだが、意外に多くの場合、なんらかの目的を描いているのではないか。苦痛では自暴自棄になるより、忍耐する方がましな結果をもたらす、ということが反復されると、なにか苦痛になることがあると、まずは、忍耐するのが一番とだんだんと刷り込みがなされてくる。無駄に抵抗したり暴発して散々な目にあうことを繰り返せば、「ちょっと我慢すればすんだのだが・・・」と後悔して、忍耐放棄の自暴自棄だけは、やめよう、今回こそは、まずは我慢してみようとなる。それで未来に安寧な状態、よりましな状態が可能になるのだと楽観的に、漠然と目的を描くわけである。その忍耐が無用となれば、そのときになって、暴発でもすればいいのである。騒ぎ立て抵抗する方がいいとか、逃げる方がましと思えてくれば、忍耐をやめることにもなろう。耳鳴りに即効的な治療があるとか薬が売りに出されたと知れば、無駄に忍耐することはやめる。だが、そうでないのなら、さしあたり、我慢しておくのが無難（穏やかな明日という目的）となるのである。

#### 4-4-4. 忍耐は、未来の目的より、過去の因果（原因）にとらわれることも

忍耐は、瞬時に終わるものには言わない。時間的持続をもって忍耐は展開される。未来方向に持続する苦痛を甘受し続けていく。したがって、未来に描ける目的があつてのことが多くなる。だが、自然の災害などの苦痛は、さしあたり現在のそれを受け入れる以外手がないと諦念して忍耐するのである。漸次未来に復興を描いて目的を後づけできるとしても、未来や目的を意識することなしの忍耐である。そういう忍耐のなかには、意識は、過去に主として向かっているものもある。

事故や災害による辛苦の場合、あるのは辛苦と忍耐のみで、未来の目的はなしで始まるが、ひとは、自身にそういう害悪がもたらされたとき、反省をする。どうしてこんな忍耐をさせられることになったのかと。反省は、よい結果が出たときにするのではなく、ほとんどが、思わしくない現在について、さかのぼってその原因を、過去を明らかにしていくのである。

自分の借金返済に苦勞するのも、過去に忍耐するという意識であろう。マイナスを踏まえて、これをゼロにと回復するなかでの苦痛であり忍耐である。苦痛の甘受はそこでも時間の経過のもとでなされるのだから、未来への意識をもっている。おそらく、月末になれば、給料で過去の借金のうち5万円を返せる、マイナスをそれだけ減らせて肩の荷がおりて軽くなると、その月末を描いて目的意識的に耐えていくのであろう。過去への意識は、忍耐を駆り立て、未来の返済の目途が忍耐を励ますといった忍耐になろうか。

##### 4-4-4-1. 本質的に過去向きの忍耐も言われるべきであろうか

忍耐は、未来に成果をだすために苦痛の甘受を手段とし踏み台にしていく。過去の清算も未来向きになって、その忍耐の成果をもって少し負債を減らせるという、未来への意識を抱きつつの忍耐である。だが、かりに明日がないという場合を考えるとどうであろう。普通の未来向けの目的意識のもとでの忍耐はやめるであろう。犠牲のみがあつて、成果の

ないことが確定しているのであれば、無駄になる犠牲は払わない方が賢明なことである。

負債の返済は、どうなるであろうか。おそらく、明日がなくても、今日の忍耐・犠牲は払うことであろう。過去の負債を少しでも減らして終わりたいと思うのではないか。ということは、過去の清算のような場合の忍耐は、未来向きではなく、根本的には過去向きになった忍耐になるのであろう。マイナスのままでは終われない、少しでも負債を、負い目を小さくして最期を迎えたいということである。もちろん、これも目的論的な営為である。過去の負債返済という目的（過去のことだが、返済は直近ではあれ未来に実現されるはずのもの）をもって現在の苦勞・辛苦を手段としていくのである。

自分の明日はないとしても、過去の自分が現在の自分と同一であるという、自己同一、自分がなにもものであったのかの、尊厳ある理性存在としての自同性がある。それが、その負債の返済ということにおいて、ひととしての責任を背負い続けて最期を迎えるという姿勢において、保てるのである。周囲も自同性を求める。「借りたときの俺と、今の俺と何の関係があらう」とうそぶいて借金返済を拒否したら、かれは、みんなから袋叩きにされるだろう。そして、抗議すると、「なぐったときの俺たちに言ってくれ。第一、殴られたお前と今のお前と何の関係がある」と嘲笑されることになる。

#### 4-4-5. 現在を過去や未来と結んで忍耐できるのは、人なればこそ

ひとは、未来のために現在の苦痛をあえて甘受して忍耐する。過去方向にも、その負債には責任をとり現在の辛苦の忍耐をもって返済をしていくことであろう。ひとは、高度の精神世界を構築して過去への記憶と未来への想像の能力をもって、持続する自己同一の個我として生きる。未来の己のために現在を手段とする自己の忍耐をもって生きるし、過去の自分の行為には、今の自分と同一であることを踏まえて責任をとっていく。

いま犠牲を払って苦痛甘受の忍耐をする「骨折り」は、現実にある事態だが、未来の目的価値は、なお存在しない想像上のことで、かならずしも実現しない。「くたびれもうけ」に終わる可能性もある。そうならないようにと、苦痛に見合う価値の実現になるようにと計算しつつ忍耐の犠牲を払う。巨大な目的（価値）の現実化が保障されているのなら、苦痛甘受はこれを目指して、普段とは全く異なる大きな苦痛をひきうけることともなる。

過去の負債・負い目の場合は、その負債に見合うだけの返済へと苦痛甘受をする。通常、その負債が確定しているから、それに見合うものを償う（という目的をもっての）忍耐になる。過去を向いた忍耐だが、時間のなかに展開する忍耐は、未来向きに過去のことも片づけることになり、過去の重石をだんだんと未来において軽くしていくことになる。

未来のために忍耐するにせよ、過去のマイナスに責任を負って忍耐していくにせよ、自己同一の自分があることである。もし、不変の自己の持続ということがなければ、そういう自己意識がなければ、いまはない過去や未来のために現在を犠牲にするという忍耐はできないであろう。いまの自分の犠牲で未来の自分が輝くという自己実現への思いが、命がけの忍耐を引き受けさせる。過去の自分との同一性があればこそ、負債を返済しなくてはと苦勞もするのである。

#### 4-4-6. 後づけの目的、言い訳、理屈付け

忍耐は、苦痛という自然的には回避したい嫌なことを甘受する。あえてこれを受けけるには、それなりに納得のできるこがある。いやなことを押し進められるだけの、主体の自発性をさそえるだけの、「何のために」「何で」「どうして」という目的設定、根拠づけ、

理屈付けがいる。

動物的な快不快のもとでの苦痛甘受の消極的な忍耐もある。ひとの場合、ここでも、納得できるようにして受け止める。駅に行く途中大雨にあって、しかたないと雨宿りの我慢をする場合、まずは、濡れるのは大きな不快で、雨宿りの不快の方がましと、快不快の自然感性に従って行動する。じっとして手持無沙汰で、雨を見ながら、あれこれと思いつく。この本は濡らすわけにはいかないとか、雨に濡れて風邪をひくことがないようにと健康維持の目的を後づけすることも思いつく。雨宿りして駅到着が遅れ、目的の会議に間に合わないとしても、濡れず、風邪もひかずに済むのだと合理化する。快不快の自然のもとで忍耐をはじめたとしても、その持続のなかでは、理性に生きるひとは、理屈を付け加え合理化し、言い訳をすることである。

言い訳もたたないような場合は、運命と居直り、神や先祖のせいにするとも思いつく。それもできなければ、「どうして」と聞かれたら、「どうしても」と無根拠をもって根拠とする（外的無根拠の、自己原因の絶対的根拠をたてるのだが、本当は、隠しておきたいエゴの感性的なところに根拠のあることが多い）。

#### 4-4-7. 忍耐は、目的のみでなく、動機や諸条件をもって具体化する

忍耐は、これを根本的に規定する目的のあることもあろうが、そうでないものも多い。ほかの欲求にそそのかされる面が大きい忍耐もあろう。自然的営為のもとで、快不快の総計で小さい不快を我慢することがある。熊が蜂蜜を食べたいがためにハチに刺されるのを我慢するようである。あるいは、普段は我慢してないのに、ひとが見ているから、好きな人が勧めるからというようなこともある。大嫌いのへびがいても、ひとりなら跳んで逃げるのを、こどもの見ているのが分かっていると、我慢して平気な顔をする。未来方向に設定した目的が忍耐持続の力になるが、ときには、過去の強いる忍耐もある。過去の記憶が、負い目の意識が、ひとを忍耐にと駆り立てることである。

ひとが忍耐をするに際しては、目的を立てる以前に、目的設定をささえる切っ掛け・動機が種々存在する。その目的を描くに至る諸欲求がある。減量を目的にしてする節食の忍耐は、種々の切っ掛けをもつ。美しくなりたい、精悍な身体になりたいという動機をもつてのこともあれば、周囲の人が始めたので、ひきずられて自分も始めるという些細な切っ掛けにはじまることもある。水を飲んでも太るんだから、酒にも気をつけなくては等、前提諸条件を反省することでもある。甘いもの好きでお菓子類を絶ち切れなかったことは大きいと、過去の原因に注目した因果論もここでは重みをもつ。忍耐の理解は、単純にひとつの目的を見ているだけでは不十分になる。

#### 4-5. 忍耐は、悪用もされる

忍耐は、善悪の手前にある。「自由」な忍耐は、悪への自由にもなる。「目的」を目指す忍耐は、悪・犯罪をも目的としうる。銀行の金庫に辛抱して穴をあけるといような悪に使われるし、愚行としかいえないような「骨折り損」を結果することもある。貪欲な経営者に過労死するまで利用される愚かしく悲惨な忍耐もある。

忍耐の努力は、辛苦の甘受をもってより大きな価値を得ようとするもので、それは、善を目的にするとは限らない。詐欺とか窃盗をする場合、捕まって刑務所に入ることになるかもという不安をいだきつつすることであろう。その不安に負ければ、犯罪行為はやめる。だが、不安に忍耐できる者は、これを実行する。詐欺をするには、電話などで相当の無駄



足を踏む覚悟もいることであろう。しかも、話にのせるために相手の暴言にもじっと我慢しなくてはならない。忍耐なくしては詐欺は成功しない。忍耐は、悪にとっても不可欠である。

軟弱な者の忍耐もある。勇気を出して戦うべきところで、勇気をもてないものが、逃避の手段として忍耐を選ぶ。脅されて泣き寝入りしたり、相手の理不尽な対応を、文句も言えずに我慢する。なさけない忍耐である。忍耐は、すればいいというものではない。そのもたらすものが善であろうと悪であろうと、自分の首を絞めるだけのことであろうとも、苦痛に耐えるなら忍耐である。つらい忍耐のこと、それに踏み切る前に、ことの善悪・是非をしっかりと考えなくてはならない。

#### 4-5-1. 忍耐は、身体的能力・知的能力と同じく、悪にも加担する

忍耐は、腕力に似たひとの能力である。腕力をふくむ体力は、強いほどに、自分の思いをしっかりと現実化する。それは、単に善の営為を促進するのみではなく、ときには、悪をも大きなものにする。腕力のある強盗は、その犯罪を大きく確実なものにし被害者の恐怖を大きくする。忍耐も、同様にひとの営為の貫徹に貢献する。忍耐力のない強盗は、被害者の抵抗があれば犯罪をあきらめるかも知れない。だが、忍耐力が大きければ被害者の抵抗などを辛抱強く排除して強盗を成功させる。

忍耐は、知恵・知性にも似ている。いずれも、善悪を問わずひとの営為を貫徹するに大きな力をもつ。忍耐は、知性以上に善悪を等しく支える。知性・知恵の場合、悪の営為がもたらす自他への悪影響を自覚し、悪は長続きしないと悟り、人間の尊厳を損なうみっともないこととの自覚をもてる。社会規範などを考えるような知性は、悪行には躊躇することになる。だが、忍耐は、苦痛を受け入れるだけのことであり、善とか悪を考慮しない。忍耐は、知性より腕力の方に一層似ているということになる。

もともと、知性のなかにも、社会とか人間、その規範などを考慮しない領域がある。自然科学一般はそうであろう。ここで働く知性やその産物は、善悪を考えるわけではないので、悪にも善にも同じように力となる。自然科学は、ダイナマイトをもたらし、原子力エネルギーの利用を可能にした。それは、ひとの力を巨大なものにしたが、悪にも善にも利用できる。忍耐も善悪両方に同じように力となる点では、知性のうちでは、自然科学的方面により近いことになろうか。

#### 4-5-2. 原動機としての忍耐は、具体的に働く作業機の善悪を考えない

ひとの営みを機械にたとえれば、忍耐は、原動機の働きに相当する。作業機は、善悪にわたる行為を実行する。正義を貫くために汗を流し、詐欺をするために悪知恵をしぼる。道路を直す作業をし、銀行の地下金庫へ穴を掘って悪事を働く。忍耐は、具体的な作業の手前であって、そういう善悪の作業のための動力源をなす。なにであれ作業を最後まで貫徹するためにと、我慢・辛抱をする意志の働きである。不快・苦痛という自然的には回避したい自身の心身の状態に鞭打ち、欲求の不充足に耐え、苦痛を甘受して、作業を遂行するためにエネルギーを注ぎ続けるのが忍耐である。

忍耐は、作業のための原動力として、善悪の作業以前であって、作業をするためのエネルギーをもたらす。不快・苦痛を抑え快不快を越えての超自然の人間的な営為として、快不快に従うのみの動物を越えている。さらに、個我（のエゴイズム）を抑えて忍耐する意志は、全体的普遍的な見地にたち、軟弱なひとや身勝手な者を越えて卓越した振る舞いを

なす。苦痛を甘受するという忍耐は、おのれを燃やし尽くして手段・犠牲にと身を捧げ、苦痛という最大の難関を乗り越え突破して、目的となる作業へとことをすすめていく。徳目ではないとしても、人間的な高度の営為を可能にするものとして、忍耐力のあるひとは、一目置かれる存在となる。それが悪を目的としていたとしても、その忍耐自体は、動物を越え、軟弱な人間を越え、感性と個我の自然を超越しこれから自由になった、人間固有の卓越した営みではある。

#### 4-5-3. 忍耐は、機械につける潤滑油程度の場合もあろう

忍耐は、善悪を問わずこれの作業を支えるものとして機械でいえば原動機に相当するが、作業機を動かすために常時利用するような、心身の一般的な力・エネルギーの供給とは区別される。苦痛・傷害で作業が中断することにならないように、あるいは、わき道にそらす欲求が活動しないようにと、苦痛や欲求の処理をしようというものである。苦痛を回避せず、あるいは、自身のうちに生じる諸欲求も抑圧して動かないようにし、目的実現を妨害するものを排除し乗越えて作業の展開を堅持する。作業機が中断することを阻止してスムーズな前進を計るものとしては、原動機というより、作業を保全し潤滑にするもの、潤滑油という方がいいのかも知れない。

だが、それを突破しないと目的に達しえない難関の妨害物（苦痛・辛苦）を撃破し蹴散らかして進撃するのである。それは、作業を進めるための最大の爆発的エネルギーとなる。これは、潤滑油の役にはとどまらないであろう。あるいは、日々の辛い労働は、できればやめてしまいたいことであるが、それをやめず我慢・辛抱し、気力を奮い起こして忍耐して作業を継続する。ここでは作業（の持続）へのエネルギーは忍耐に負う。こういう場合は、潤滑油というよりは、やはり、原動機になるという方が良いように思われる。

#### 4-6. 忍耐は、受動的、内向きで、視野狭窄になる

忍耐の働きは、苦痛の甘受、欲求抑圧として、自身のうちに生じている苦痛や欲求を対象とするから、内向きである。しかも、生じた苦痛に逆らわず排撃姿勢をとらずに甘受するものとして、受身、受動的である。忍耐は、そとの対象にむかうのではなく、内向きになり受動的であるから、そとの諸事情に気を回せず他事への配慮に欠けがちとなろう。お寺でありがたい説教を聞いているとき、敬意と周囲への同調ということで正座するが、この正座は、時間とともに苦痛になってくる。だんだん足の痛みが耐えがたくなり、その痛みで気がとられ、足を組み直したり尻を浮かせるなどの試みに気がもっていられ、説教も敬意も二の次になる。最後は、足の痛みで悶え疲労困憊し、ありがたいお話は耳に入らず、敬意など払う心も吹き飛んでしまう。

自然的には苦痛は回避されるが、忍耐はこれを甘受する。自然に対決した営為だが、そとの自然に向くのではなく、苦痛という自身のうちの自然を直接の対象とする。意識は、それに集中するから、そとのものを見る目はお留守になりがちである。苦痛が強くなって忍耐が困難になるほどに、苦痛にとらわれて他のことは見えにくくなる。視野狭窄となる。ときには、疲労困憊の極み、生はダメージを大きくして苦痛感覚すら麻痺ぎみとなり、正常な判断もできなくなって、視野が狭くなるどころか視界ゼロ、過労死にいたるような自己破壊の忍耐ともなる。

##### 4-6-1. 犠牲をはらう本人は、自分の忍耐が価値あることと思込むが・・

忍耐は、苦痛（犠牲）を手段として、価値ある結果を得ようとする。苦勞という犠牲が

現にあれば、それに見合う価値の獲得が等価交換のように成り立つと思いたくなる。等価交換・因果応報をひとは、自然のエネルギー保存則のように、この世の根本法則かのようにみなしていることがある。苦勞すれば、それに見合う価値ある未来が実現できると、子育て・子供の教育に懸命になる。自分の楽しみもカットしてこどものために辛抱を重ねる。こどもに自身のすべてをささげて、自分のような惨めな人生を送らせたくない、辛苦を耐え続ける。だが、しばしば、その期待は裏切られる。こどもは親の子である以上に時代の子である。郭公の卵を托卵させられたようなものである。親の願いもむなしく、パソコンゲームにふけるニートの若者になる。二度とこどもは育てたくないと思うが、後の祭りである。

苦勞に苦勞を、忍耐に忍耐を重ねても、それが報われないこともある。がむしゃらに忍耐しても、実りは、かならずしもない。よく事実をみつめ、成果の得られる展開になるように忍耐する方向を変えるなどの工夫をしないと、苦勞も忍耐も実らず、無駄骨になると知らねばならない。

#### 4-6-2. 忍耐させられる場合は、おおむね、価値あるものを産む

ひとに強制される忍耐がある。強制する者がそういう無理をさせるのは、成果が得られるからである。強制的な忍耐は、その強制者が（自身または忍耐する者に）利益がある、大きな価値を生み出せると見ているから無理強いするのである。見通しをもち、この手段・目的の展開の全体を見定めて、嫌がる者を強制してそうさせる。

強制労働は、労働する者には無益でも、強制する方には大きな利益のもたらされるのが普通であろう。ニンジンを食べることをこどもに無理やりに我慢させるのは、いやがられ嫌われても親はそうするだけの価値があると思うからである。栄養の点で必要なことだから、これに我慢して慣れて平気になり、ニンジンを好んでたべるようにと成長を求めているのである。

だが、自分だけですすめる忍耐は、そこまでの見通しがなくても、希望的観測のもとにすることがある。結果・成果は、まだ見えておらず、確かなのは、いまある苦痛であり犠牲だけである。犠牲だけは忍耐では確実にある。しばしば「骨折り損のくたびれ儲け」となる。忍耐を引き受けるには、苦痛甘受という犠牲について、それ相当の成果が当人において明らかでなくてはならないであろう。自分でする忍耐は、自分が見通さねばならない。その見通しがしっかりしていないと、無駄な忍耐、犠牲のみとなりかねない。

#### 4-6-3. 忍耐は、苦痛に耐えて頼もしいが、賢明さを持つわけではない

忍耐は、苦痛をあえて受け入れる超自然の人的尊厳をもった営為だが、苦痛以外のことに目を向ける余裕のない場合が多い。忍耐の基本姿勢は、苦痛に無抵抗になってひたすらこれを受け入れるだけのもので、受動的消極的である。忍耐を引き受けるに至るには深慮遠謀がありうるとしても、忍耐自体は、能動的積極的に働くものではなく、あまり周囲のことを配慮するような姿勢にもない。我慢することに集中してくると、苦痛以外の事柄への配慮は手薄になりかねない。

忍耐は、苦痛甘受では頼もしく自然を超越しているのだが、賢明さには欠けるところがある。悪事に関わる忍耐、無駄な愚かしい忍耐もあり、犠牲のみが顕著なものもある。苦痛にとらわれてしまい結果をしっかりと見渡していないことがある。うちに生じた苦痛を耐えようと懸命になるのが忍耐であり、その懸命さをそとの方にむけて深慮遠謀のような賢

明さにまわすものではない。

忍耐力の大きい者は、忍耐に関しては巧みで苦痛を小分けして耐えやすくしたり、忍耐の前進の一步一步を目的への確かな高まりと捉えて、結果・目的も多様多彩に大きく描きこれを励みとしていく。だが、苦痛が耐えがたくなるほどに、苦痛自体に集中し、広い大きな展望は視野のそとに消えてしまう。そとのことは見えなくなり、臨機応変に対応するような余裕も失い、賢明さに欠けがちとなる。

#### 4-7. 我慢するよりは、楽に生きる方が賢明かも

忍耐は、苦痛の甘受で、苦痛に無抵抗になり、なんでもないかのようにして耐える。周囲からは、忍耐は見えにくいことになる。平気ならと、周囲は、ますます我慢を強いるようなことにもなりかねない。

苦痛を受け入れるのは、目的実現にそれ以外の手段がないとか、その苦痛を受け入れる方が大きな苦痛や犠牲を避けられるとか、稀有の価値が獲得できるとかの、犠牲に見合う価値があるときに限るべきであろう。忍耐には、「無駄骨」「骨折り損のくたびれもうけ」ということがしばしば結果する。愚かしい忍耐、有害な忍耐、犯罪のための邪悪な忍耐もある。自身の忍耐がどういう価値をもっているのか、よく考えてしないと、自身を犠牲にするだけではなく、周囲にも迷惑をかける。

せつかくの苦痛、自身の損傷の犠牲を払っての辛抱である。限りのある生のことであり、大きな目的のためにとっておかないと、いざというところでは、もう消耗してしまっただけに忍耐を断念するようなことになりかねない。忍耐、苦痛の甘受は、どこまでも手段である。目的は、価値あるものの獲得である。楽に目的を実現できる道があるのなら、それを選択し、犠牲・苦痛甘受の忍耐は、その先のより大切な不可避のこのためにとっておくべきであろう。

### 5. どこにも満ち溢れている苦痛と忍耐

忍耐（我慢・辛抱）に類する格言は多い。それだけ多方面に忍耐は必要になっているということであろう。あるべきひとの姿勢・心構えとしては、正義・節制・勇気などの徳目がある。だが、正義を自身の行為において意識する人は、日本ではあまりいない。節制は、肥満の人では日々必要となる心構えであるが、瘦身のひとにはダイエットとしては用がない。出された食事を享受するのみのこどもなど、はじめから必要量しか美味のものは出されないのだから、節制する必要がない。が、不味いものは、いやでも食べる必要があり、「ニンジンを残さないで、我慢して食べなさい」と、忍耐は、親から求められる。勇気は、最近では、危険が予め排除された生活であれば（川があってもプールでしか泳がず、身近に自然があっても公園でしか遊ばず、危険のない空間に過ごしている）、これもあまり登場することがない。危険や勇気を意識しなくてもよい学校や職場であるが、勉強や仕事では、いやなことでも我慢し辛抱する必要があり、忍耐は不可避である。

忍耐は、おそらく、毎日、だれもが何らかの形でしている。子どもも大人も男も女も老人も、周囲のことに我慢し、自分自身のことに辛抱することである。生きている限り、生を妨害したり傷害を与えるものに遭遇するが、ひとは、しばしばその不快・苦痛を回避せず受け入れて、苦痛の犠牲を手段にして、より高い生の営みを実現していく。苦痛・不快に逆らわず甘受しようという忍耐は、人間的生には必須の日々の営みである。

## 5-1. 些事・小事の忍耐、肝心要めの重大事の忍耐

不快・苦痛もその忍耐もいたるところにある。毎日、どこかで忍耐している。起床とともに忍耐ははじまる。もう少し寝ていたいのを、我慢して起きる。朝食は食欲がなくていやでも我慢して食べる。尿意・便意はすぐ用足しできるとは限らず、しばしば我慢することが必要となる。些事・小事の忍耐は、日々、とりあげれば、きりが無い。どうでもいような忍耐に満ち満ちている。

忍耐の多くは些事であり、してもしなくてもどうということのない小事である。だが、他方では、ここというところで忍耐するかしないかが人生に決定的というようなこともある。上司から暴言を吐かれて、我慢せず、これに暴行を加えたり、辞職するということになったら、人生に大きな影響が出るであろう。教師が、生徒の非行に対して寛容であるべきを我慢せず退学を命じるとしたら、その生徒の長い人生をゆがめることになる可能性が大きい。じっと我慢することが、自他の人生のために決定的となる。「あの時ちょっと我慢していたなら・・・」と、あとの長い人生において繰り返して悔やむことになる。

小事・大事を問わず、忍耐する心がけをもっているか否かでは、長い人生において、おそらく、まるで異なったものを結果する。小事・些事の忍耐は、どうでもよいことであるが、忍耐するという姿勢自体はそういう些事において作られる。小事の忍耐のできないものが大事の忍耐のできるはずがない。人生に肝心要めのところで忍耐ができるには、日頃からの些事の忍耐でトレーニングしていることは、大きいであろう。

## 5-2. 忍耐の比でなく、不快・苦痛は、いたるところにある

快は、生の保護・促進のかなった状態であり、不快・苦痛は、その生に不都合で損傷が生じていることを示す。快は、放置しておいてよいが、不快は、放置しておく危険が大きくなり損傷を拡大する。生は、快をもとめ、不快・苦痛を回避して動くが、快に出会うためには、相当の努力がいる。が、苦痛なら、すぐにでも出会える。多くの苦痛は、損傷を避けるために回避する。ほんの一部の苦痛にのみ、回避せず忍耐する。その忍耐に出会わない日はない。忍耐の何倍もの苦痛がひとの周囲には満ち満ちている。

生の生理的な層の苦痛は、身体の損傷を知らせるもので、これを回避するのが自然である。だが、よりよく生きるには、この苦痛を甘受することがしばしば必要となる。注射の痛みは我慢しなくてはならない。不味くても栄養ある食べ物は辛抱して食べなくてはならない。生の高次層の快不快では、快感情は生理的レベルのそれとちがいで些事として気にすることは少ない。喜びの快感がなくても、価値物が確保できればよい。だが、人生において喪失・失敗等で感じる不快・苦痛（悲しみとか絶望）は、無視しがたく大きな気がかりをつくりつづける。かつ、この苦痛から逃げていたのでは、精神的社会的によりよい生を営んでいくことはむずかしく、忍耐が必須となる。

快には出会い難く、かつ瞬時に消えていく。だが、不快・苦は、生のいたるところに満ち溢れていて、かつ、これにつかまるとその苦痛はしつこくまわり続け、しばしば忍耐が求められる。仏教は、こんな世の中を「苦界」と言う。

### 5-2-1. 一つの営為にも、苦痛と忍耐は多数含まれる

「今年は食事では不満をいわず忍耐することに心がけよう」と思ったとしても、その忍耐は、一回で済むわけではない。まず、日に三度の食事なら、日々三回の忍耐となり、日を重ねて延々と続く忍耐となる。一度の食の忍耐自体、食卓に食べ物を用意する苦勞と忍

耐から、食べるときの不味いものへの忍耐もあれば、食べ終わっての片付けの苦労・忍耐もある。食の作法にしたがうことは、苦痛であったとしても、相互のきずなを確かめ合う会食などには、不可避である。ひとの一つの営為のうちには、多重の辛苦があり、多重の忍耐があることになる。もちろん、これらの多くの忍耐は、慣れるまでのもので慣れてくるとそれが普通のことになり、苦痛ではなくなって忍耐無用ともなる。

ひとつの営為の苦痛は、慣れて無くなるのとは逆に、持続の時間とともに増大することもある。会社や学校をやめるのは、だんだん我慢・辛抱できなくなるからである。忍耐では時間的な持続が必須で、その疲労は蓄積する。それ以上に苦痛が多方面に拡大していくことがある。「今日はこの分厚い本、読みきるまで動かないぞ、集中しよう」と読書三昧の一日をと机につく。はじめは、なんでもないが、時間とともに種々の苦痛が生じてくる。尿意の苦痛は我慢しないにしても、腰や坐骨あたりが痛くなり、肩もこってきて我慢・辛抱となる。目も当然疲れてくる。本の内容にも不快になり、つまらない本を出す出版社が不快になり、そういう本を買った自分にも腹が立ってくる。専門書など古本屋にもっていける時代ではなく、昔なら高価に売れたのにと、「つん読」済みの本の山を見ながら残念がる。しかたないから焚書にしようとして庭で燃やすにも消防署がこれにはうるさい。そう思うと、これらも不愉快さをもたらしてくる。さらには、働き盛りの自分に非常勤の仕事しかないことの絶望感、近々はじまりそうな親の介護への不安も顔を出す。諸々の苦痛に疲労困憊となって、ついには、平静さを保ちうる限界になり忍耐を放棄し読書をやめて散歩に出る。

### 5-3. だれにでも忍耐はできる

節制とか勇氣は、出合う機会は必ずしも多くないし、だれでもが持てるものでもない。勇氣をもてず臆病な対応しかできなくても、節制できず肥満になっても、多くの場合許容される。それらが徳目・美德になっているのは、容易には実行しがたいものになるからである。その心構えは万人がもてるが、実行には、ハードルの高いことが多い。

しかし、忍耐は、だれもが何らかの形でこれを実行していることである。あらゆる事柄にかかわって忍耐する機会はある。万人のしていることである。その点では、正義に似ている。遵法の正義は、万人が実行していることで、例外の者だけが不正義・犯罪に走るのである（その不正の人も、特定の不正をしているのみで、そのこと以外では正義順守であろうから、万人が正義のひととも言える）。その正義を守っているという自覚は反省でもないかぎり、持たない。忍耐も、ごく当たり前のことが多い。正義は（というより、不正をしないことは）、ほとんどは無自覚に実現しているが、忍耐は、自覚しないものは、忍耐ではなかろう。苦痛に忍耐するのであり、苦痛は、小さなものでも、気づく。

正義（法）は、これを守らないと犯罪になるという最低レベルの規範であり、殺人を犯さない、ひとのものを盗まないという正義（遵法）を実現しているからといって、これを正義と意識したり誇らしく思うような人はいない。だが、忍耐は、異なる。忍耐は、犠牲をなんらかの形ではらうという意識をもってし、どんな忍耐であっても、苦痛回避の衝動（自然）からの超越としては、ひとの自由、尊厳を証する営為となる。

#### 5-3-1. 忍耐の仕方は、ごく単純で、やさしいこと

忍耐は、苦痛に逆らわず甘受することに徹するから、創造的能動的なものとのちがいが、じっとしておればいいのである。何もせず、じっとしているだけなら、だれでも一応できる

ことであろう。欲求の場合、欲求充足できるよう種々に工夫し画策する必要があるが、忍耐は、単にその欲求が動かないように抑えるだけだから、そういう知恵はいらない。自分を抑えるだけの強い決意・意志があれば、間に合う。砂漠で水への欲求を充たすためには必死でかつ巧みな工夫がある。だが、そこで水への欲求を抑制・忍耐することは、じっとしているだけでいいのであり、辛いけど、やり方は、ごくやさしく単純なことである。もっとも、動物は、動く物で、植物のようにじっとしていることは、その動く本性に逆らうこととして、ことは単純だが、「言うは易く行うは難し」となる場合もある。

忍耐は、損傷・苦痛に対して能動的な働きかけはせず、抵抗も、排撃もしないから、なにもその点ではしないのである。自分の痛み・辛さに耐え、無為にとどまるだけでよい。尿意を抑えて我慢する場合は、尿道の痛みへの忍耐は、なにもしないことである。受け入れるだけのことである。とはいえ、放尿への衝動というか欲求を抑えるのは、骨盤底筋類を緊張させて力んでのことで、まるで何もしないのではなかろう。それでも、何か小難しいことをしてというのではなく、その欲求・衝動が発動しないように、動かないように、なにもしないように抑えるだけである。

### 5-3-2. 忍耐は、常に自分との戦いとなる

忍耐での戦いは、特殊で、どんなひ弱な者でも強大な相手と互角に戦える。強い相手のその腕力と戦うのであれば、弱い者は即、降参・敗北となる。忍耐は、戦うのだが、相手の強い腕力と戦うのではない。その腕力の打撃によって生じた、自分のうちの苦痛、これと戦うのである。苦痛によって生じる自分の逃走衝動に負けないようにと戦う。欲求抑制の忍耐も自分の欲求と戦うのである。忍耐の敵は、直接的には常に自分のうちにある。自分のうちに生じる苦痛回避の自然的衝動を抑えることである。その点からいうと、自分の苦痛に挑戦して敗けない覚悟さえあれば、どんな強い敵（のもたらず苦痛）にも敗けることはない。たとえ身は滅ぶとも、その魂は、いかなる苦難にも耐えて負けないでおれる。

常勝の者は、叩かれて苦痛・辛苦に我慢する臥薪嘗胆のような経験がないから、意外に負けになると弱い。自分の苦痛に慣れておらず、自分という強敵と戦った経験が少ないので、そのことでの忍耐には長けていない。敗北的状况（自分のうちに生じる苦痛）では簡単に折れてしまう。忍耐の戦いに長けたものは、根性・ガッツがあるということになる。叩かれても叩かれてもへこたれない。自身の辛苦の体験を繰返して、これへの忍耐の仕方に長けている。その反対に、挫折経験のないままの成功者は、些細な敗北に、もろく崩れて自殺するようなことがある。（敗北での）自分の苦痛に耐え切れなかった、自分に敗けたということであろう。

### 5-3-3. 腕力の限界を超えても、忍耐は持続できる

戦いで敵の腕力が勝っている場合は、その力には敗北する。だが、その場合でも、内的には、自身の苦痛には負けないで忍耐を貫徹できる。苦痛からの逃走衝動を抑えてじっとしておればいいのである。体を切り刻まれ肉体は滅びようとも、魂は、苦痛に耐え続けて負けないでおれる。

自身の苦痛には忍耐を最後まで貫徹できたとしても、苦痛の外のものに勝てないことはしばしば生じる。懸垂をしていて、腕が動きにくく辛くなっても、その辛苦に耐える意志を放棄しないで忍耐の持続はできる。ついには腕が動かなくなり体を持ち上げることができなくなっても、そのことで生じている苦痛には、耐えることができる。苦痛への忍耐の

意志はなおあっても筋肉の方がいうことをきかなくなる。これは、忍耐できなくなったのではなく、筋肉・腕が意志の命ずるように収縮してくれなくなっているだけである。そこに生じている苦痛への忍耐は（腕がいうことをきかないのだから無意味な忍耐になるが）なお持続させうることである。

忍耐は、つねに自分の苦痛を相手としている。この闘いでは、万人が同じ条件にあって、各々が自分にふさわしい相手、つまり自分自身を対象としている。ひと同士の戦いは、多くがどんぐりの背比べで、外的な戦いではなかなか決着はつかない（どんぐりの背比べだからこそ、いたるところで競争・闘争となる。かりに、象とねずみの差だったら、はじめから戦いはしない）。決着のつかないまま、最後は自分の苦痛との闘い（忍耐）になり、したがって克己、自分に勝つことができるかどうかの差となる。先にあきらめた者が敗者となり、最後まで忍耐できた者が勝者になる。

#### 5-3-4. 忍耐は、苦痛を受容し忍ぶが、自分を譲ることはない

忍耐は、受身・受動である。が、無力に打ちひしがれているのではない。我慢し辛抱する忍耐では、攻撃に対して反撃はしないが、決して自己を譲ることはない。表面は、従順に苦痛を受け入れ忍んでいるが、内面ではその苦痛を嫌悪し譲らず面従腹背に徹していて、腹・内面においては、苦痛を拒絶し排撃し、受け入れてはいない。ニンジン我慢する者は、どこまでもニンジン嫌いを貫徹している。その苦痛が苦痛であり嫌悪すべきもの、排撃すべきものとの捉え方は維持しつづけ、そういう自分の本心を変えることはない。

忍耐は、表向きは、面従で、逆らうことなしであるが、内面は、逆、腹背である。忍耐の必要なしとなったら、ただちに面従をやめ苦痛を排撃し回避する。もし心底から許容し変節し肯定することになるのなら、それは苦痛ではなくなり忍耐無用となるが（ニンジンが好きになったら忍耐は無用となる）、忍耐は、そういう全面的な、心底からの降伏・追従はしていない。

忍耐する者は、自分のうちにある苦痛には負けないという強い意志をもっている。克己の闘いである。戦争でいえば、防衛の闘いが、忍耐である。外敵の侵略の最前線に発生する苦痛について、これに譲らず、陣地を堅持し、ただし、自分の方からは外の敵に向かっては一切攻撃せず、専守防衛に徹する戦いである。この闘いでは、苦痛（という攻撃）に耐え切れれば、忍耐が持続できるなら、勝ったことになる。

#### 5-4. 忍耐には、各人の得手・不得手があり、経験がものをいう

みんな同じように自分の苦痛に耐えるのだが、その苦痛の感じ方は各人で異なり、耐え様も耐えうる限度も異なっている。忍耐では、なにより過去の経験がものをいう。経験して鍛えられた事柄では、より大きな忍耐力を獲得している。

腕力にめぐまれたものは、少々の重い荷物も平気で、それをはこぶことにはほとんど忍耐無用だろうが、そうでない者では、同じ荷物が重荷で、運ぶには忍耐が求められる。が、忍耐では習い・経験のものをいう面が大きく、重い荷物運びを繰り返していると、それが平気になってくる。慣れない始めは忍耐だが、適応して体力をつけ、苦痛にも慣れてなんでもないことになる。より困難な仕事になってやっとなり辛苦になり忍耐になる。

はやくその方面での忍耐を身につけているものは、より大きな忍耐がそれのできるようになるから、これを得意な分野にすることができる。経験した苦痛・忍耐が貧困という逆境の場合は、質素な生活ということでは忍耐強いが、それ以外の分野での忍耐ではひ弱と



なりうる。例えば作法とか礼儀というようなことについては、経験することが少なく慣れていないとしたら、しつけのいい良家に育った者とちがって、すぐ苦痛になり忍耐できないことになりうる。

戦争では勇敢であることが大切な資質になる。恐怖（という苦痛）への忍耐、勇気の大きい者がすぐれた兵士となる（ただし、こういう能力は、日ごろの危険や恐怖への勇気とは一致しないようで、その場に直面してみないとその能力にすぐれているかどうかは判らないようである）。しかし、資質以上に経験がものをいう。平和時の勇気をもった者でも、殺人が相互に許容されるという非情の戦闘体験がなくては、はじめは驚怖するばかりで、古参兵の後ろでふるえることになる。古参兵がなんといっても勇敢・沈着である。経験によってそういう忍耐力は身につくということであろう。

#### 5-5. 忍耐力は、意志の強さであろうが、まずは鈍感力か

忍耐は、苦痛の甘受であり、苦痛を小さく感じるなら、より耐えやすいこととなる。苦痛に過敏では、少しのことにも忍耐が必要となる。おそらく、早々に忍耐の限度ともなる。苦痛に鈍感なら、忍耐力を大きくもてることとなろう。乱暴な口利きの集団に生活することになると、はじめは、びくびくだが、すぐに慣れてくる。鈍感になるようにと経験が感度を修正していく。

ただし、単なる鈍感だけでは長期の辛抱などでは間に合わないこともある。長期にわたる忍耐は、長期の見通しをもって辛苦を小分けして耐えやすいようにし、目的も多彩に価値の大きなものとして描けるのでないと、辛抱の限界がすぐにやってくる。苦痛や不安には鈍感（気にしない、どうにでもなれといった些事扱い）で、忍耐する先の目的なりそれへの具体的展開の方法には聡明・敏感であることが忍耐力を高めることになろうか。

痛みを感じるのは、精神的なものでは、そこでの否定的情報があつてのことになる。そういう場合、鈍感であるには、ひとつには、その情報自体に疎いとか、無知であろうとすることがあり、ひとつには、その否定的情報を些事と受け取り、気にしないことがある。聡明な権力者は、自分を否定する情報をわざと避けるようなことがあつた。知ったら、放置はできないが、知らなければ、知らないことにしておけば、些細なことなら、その方が万事がうまくおさまるからである。かつ、知ったとしても、その解釈はどうにでもできる。配下の不始末であってもそれが彼の最高に近い努力なのだと解すれば、いらつくことなく、「（愚鈍な彼にしては）よく頑張ったもんだ」と褒めてやれよう。否定的なことへの感度を低くし、解釈を楽天的なものにすることが習慣化すれば、苦痛は小さくなり、より大きく忍耐できることとなる。

#### 5-6. 許容力・包容力の大きさ

忍耐は、苦痛を好んで受け入れるのではないが、逆らわず受け入れる。そこでは積極的な行動はしない。外にむかって攻撃的になるものでもない。あくまでも、うちの苦痛を忍び耐えるのである。その受け入れたくないものを受け入れるという点で、不快で自身にとって否定的なものを許容・包容する度量が問題となる。苦痛をどれだけ受け入れられるかという懐の深さとともいうようなものが、問われる。鈍感であれば、比較的に大きな苦痛に耐えて忍耐力が大きくなるが、同じ苦痛を感じている場合には、どれほどたくさんの苦痛を甘受できるのかという、包容力・許容力がいわれることとなろう。突き放したい辛苦を抱きしめる辛抱の力である。

苦痛の許容量は、元気なものだと大きい。若い活発な生なら、苦痛のもとの損傷からの回復力も大きいから、老体とちがって苦痛を多く許容することができる。レジリエンス（復元力）が大きいということになる。そのひとの生き方において自己犠牲に富むひとは、当然、苦痛を、より多く許容できる。エゴを小さくした利他に富む人は、不快なもの・痛みを自身に受け入れることを利他の証とするであろうから、許容力は大きくなる。精神的なものでも、自分の生にとり些事と解せるなら放置して受け入れやすい。怒りの忍耐では、「堪忍袋」をいう。エゴを小さくして気障りなものを受け入れる大きい袋をもてれば、少々ふくらんでも、破裂しての忍耐放棄の愚は避けることができるであろう。

その痛みとそれの発生源をどう価値付けるかという価値観、ひいては世界観は、苦痛を許容するに大きく影響する。蚊にかまれることを自然のもとではやむを得ないと思うひとは、あるいは自然・生命の尊厳を意識するひとは、少々の蚊には我慢できる。だが、反自然に徹する文明の温室に生きる者は、部屋にいる一匹の蚊も許せず、忍耐できず、見つけ出してたたき殺すようなことになるだろう。

#### 5-6-1. 好きになれば苦痛は消え、忍耐も無用になる

いやな仕事には忍耐が必要となるが、好きな仕事だと身体的には疲れても、心地よく、忍耐はいらない。嫌いなニンジンや納豆を食べるには我慢がいることであるが、これをやがて好きになったら苦痛ではなくなるから、当然忍耐は無用となる。

いまの時代、嫌いな仕事でなく、好きになれる仕事を選べる機会が結構ある。労働は苦痛で忍耐のいるものとの相場だったが、好きな仕事を選べれば、快適に日々をすごせ、忍耐無用となる。好きな芸術とか研究の仕事の場合、相当に無理をして朝から晩まで心身を過剰に使う。ときには徹夜もする。これがいやな仕事なら過労死するぐらいであるが、充実した生きがいのある苦勞としては、あまり忍耐を必要としない。徹夜のマージャンとかパソコンゲームと同じである。

苦痛は、嫌悪し排除したいもので、これをあえて受け入れるには忍耐が必要となる。苦痛でなくできるなら、さらには快適なものにとできるなら、忍耐など無用となり、むしろ積極的に関与し享受したいものにすらなる。苦痛は、主観のうちでいただくものであり、そのひとの有り方ひとつで変わりうる。納豆は、見かけがよくないから、はじめは、嫌で嘔吐しそうになりながら、我慢して食べることがある（ぬるぬるの気持ち悪さとともに、悪臭度も、高名な熟鮭（なれずし）・くさや等といい勝負なのだとか）。だが、これに慣れてくると、だんだんにその微妙な味わいが分かり出し、健康によいことではあるし、これを好きになっていける。好きになったら、これを食べることへの忍耐などいらなくなる。納豆とごはんの「納豆茶漬け」（食道楽の魯山人おすすめの品）など、好物になってくる。苦痛・辛苦は、主観のうちでの反応であるから、その主観の在り方しだいで、受け取り方はまるで異なったものとなりうる。同一の交通整理の仕事でも、これが強制労働の場合は、奴隷的な辛苦で忍耐なくしては続けられない。だが、ボランティアで自らの買って出ているものならば、これをやりがいのある快適な活動とし、その身体的疲労も充実感の一部にとりこみ心地よいものとなり、苦痛でも忍耐のいることでもなくなる。

#### 5-7. 忍耐力は、個人差が大きい

遺伝子の同じクローン人間同士は遺伝的な能力では同一であろうが、忍耐力はちがってくる。忍耐は苦痛の甘受であり、苦痛は、うちよりは、そとからもたらされた損傷・障害

をもって生じるもので、外からのものは、交通事故のように偶然の出会いになることが多い。苦痛の忍耐は、個々人によって相当にちがった経験をもたらす。個人差が大きい。かつその苦痛・忍耐がそのひとの生をたくましく変えることもしばしばなので、それが当人の育ちのなかで培われた個性を作ることとなってもいく。

苦痛は、回避できるのなら、そうしたいと誰もが思う。いやな苦痛は、自分からこれを求めることはなく、恵まれた環境にあれば、よりよく回避でき、したがって忍耐の体験もせずに済む。逆に恵まれてなければ、そこから無理矢理に忍耐させられることであるが、しかし、それに見合う忍耐力を身につけることとなる。先天的には同じ能力をもっていても、忍耐は、経験するものと否とができてくる。個人差が大きくなっていく。

同じ家に育つこどもでも、その親からの待遇は、異なりがちである。甘えさせられた方は、苦勞が少ない分、忍耐力はあまり育たないことになる。「総領の甚六」ということになり、遊び人で自制心欠如の「若旦那」になる。粗末に扱われた方は、辛苦を忍ぶことが多くなるから、その分、苦痛に耐える体験が多くなりこれに慣れることともなって、その体験分だけ忍耐力も育つ。同じ親から似通った遺伝子をもって生まれた同じうちで生活する姉妹でも、妹の方は、たくましく美人になっていく。経験するものが異なるからである。古来、日本では乙姫（弟姫）が美人になった。大切にされる兄弟（あるいは、甘えの許される三男・三女）とちがい、次女は、生まれたときから、チャーミングでないとかまってもらえないから、顔つきまでを工夫・苦勞して美人化していた。

#### 5-7-1. 忍耐力は、「氏より、育ち」

頭のよさとか身体能力は、生来的なものが大きい。だが、忍耐は、経験的に、必要に迫られてだんだんと身につけていくものになる。かりにその忍耐が遺伝子に関わるものであっても、それが忍耐力としての根性とかになるには、ふつうの者では眠っている遺伝子のその部分が苦痛体験をもって覚醒する必要があるのではないか（たとえば、心身に元々備わっているやる気ホルモンの分泌が顕著になるなど）。

忍耐は、苦痛を甘受する。苦痛は、できれば避けたいもので、恵まれた環境であれば、より多く苦痛回避は可能となる。生来能力として同じように忍耐する力はあったとしても、恵まれているものは、それを回避することができれば、その力を発揮する機会がない。だが、苦痛回避のできない境遇のものは忍耐を経験することで、その能力は発揮されて身につくことになる。おなじ遺伝子の「氏」（生まれ）であっても、その育つ環境によって忍耐力は身につくものにつかないままのものが生じる。

一卵性双生児でも、別の環境に育てられ、一方は貧困家庭で新聞配達をすることが強いられるような場合、かれは、もうひとりの自分とちがい、眠いのを我慢し辛苦に耐える日々となり強い忍耐力を培うこととなろう（ただし、同じ高い音楽的才能をもっていても、かれは、その能力をのばすことは断念させられるだろう）。苦痛回避の衝動を抑制する意志の命令の神経回路が太くなり、アドレナリンなどのホルモンの分泌も忍耐力を高めるように適応して、欲求や衝動への意志の制御は熟達し強い自制心が形成されてくる。忍耐力に関しては、生来的に「氏（うじ）」のもっている能力も、辛苦に耐える経験を重ねなくては発現しない。忍耐力は、氏より育ちである。

#### 5-8. 忍耐を高評価するストア学派や宗教世界

忍耐の評価は、快樂や個我（の欲求）を高く位置づけるところでは低く、逆の場合に高

くなるだろうと推測される。禁欲主義のストア学派では、忍耐は、高く評価された。パトス（個我の快不快・欲求）を超越したアパテイアをモットーとするストア学派では、さきに（2-2-1.）アリストテレスに関わってあげたエンクラテイア（抑制）やカルテリア（忍耐）は、生き方の中軸をなす概念になっていったという。

宗教は、現世の快樂を否定的にみて、逆の辛苦・受難を積極的に価値づけることが多い。宗教的な呪力を得るのは、苦行を通してであり、当然、それへの忍耐が求められた。キリスト教では、この世での不幸は、あの世での至福につながると見る。受難は、神の与えた試練であり、使命であるから、これへの忍耐は尊いものとなった。キリスト教世界の泰斗アウグスティヌスもトマスも忍耐をしっかりと論じた。いずれも *patientia*（忍耐、我慢）と *perseverantia*（堅忍、辛抱）をあげて、後者（堅忍）は、信仰を堅持して人生をまっとうするよう人を支える崇高な、神からの賜物として特別視された（cf. Augustinus, A. ; *De Patientia.* , *De Dono Perseverantiae.* , Aquinas, Thomas ; *Summa Theologiae.* II-II. Qu.136,137）。この *patientia* と *perseverantia* は、宗教に特殊な忍耐ではなく、おそらく、現代日本の「我慢」と「辛抱」に相当するラテン世界での一般的な忍耐で、宗教色抜きでキケロはこの二つを列挙している（cf. Cicero, M. T. ; *De Inventione.* II 163.）。さらにキケロは、卓越した生き方は、苦痛や苦悩から逃げずどこまでもこれに立ち向かう忍耐（*patientia*）の堅持にあると、いわゆるスパルタ教育などをあげ、どんな苦痛もその気になればひとに忍耐できないものはないと読者を鼓舞している（cf. Cicero ; *Tusculanae Disputationes.*）。あるいは、キリスト教では、この世の受難に耐えての天国での至福をいうが、後期ストア学派のセネカは、ごく常識的に、この世の受苦受難に耐えることでこの世の強靱な存在へと鍛えられること、受難は当人が卓越した人物であることを実証するチャンスになる等と論じて、試練に挑戦する忍耐（*patientia*）を高く評価している（cf. Seneca, L. A. ; *De Providentia.*）。

ただし、弱肉強食の西洋では、正義、勇気、節制等を枢要な徳とする倫理の主流からは、忍耐は、従属的なものと位置づけられがちであった。勇気は、国を守り支配する者の徳であり、節制は、有り余る富を独り占めした支配階級が快樂享受で過度になるので、これを制限し節するものであった。だが、富の享受から疎外された庶民は、洋の東西を問わず、節するものもなかったことで、いわずもがな、飢餓など辛苦に忍耐することばかりが求められた。

#### 5-8-1. 日本人は忍耐強いといわれるが、いいことかどうか

日本では、個我の低評価があつて、個我を抑制し、周囲の全体（家族から国家まで）にあわせるといった忍耐が強く求められた。我田への引水が全体（村落共同体）の水配分に合わせることで成り立つようなところでは、個我を抑制して全体にあわせることは必須であった。あるいは、小さな島国で、かつ山々に囲まれて小さくまとまった各共同体的全体は、個を隅々までしばり、周囲にあわせてその都度「おれ」「先生」「お父さん」等々と位置付けて自分を意識させ、不変の個我をかたる唯一の第一人称（英語なら I）は出る幕がなく、独立不羈の精神は育ちにくかった。その全体に依存する精神は、いまも続いていることで、オリンピックでも、日本選手は、個人競技ではダメでも、団体競技では、しばしば入賞する。個は全体にうまく適合するようにと自身を抑制・忍耐できているのであろう。

その日本でも、最近では忍耐など無用、工夫で快適に、ということもしばしば言われる。

さきの一億玉砕の戦争体験は、未曾有の忍耐体験であった。竹やりで戦車に立ち向かうというような無謀・無意味な忍耐を強いられた過去は重い。そういう非合理的な忍耐は、確かに無用であり、有害な忍耐として拒否すべきことである。

苦難への挑戦に二つの道がある。ひとつは、苦難を受け入れてこれに忍耐することで、もうひとつは、苦痛解消の工夫をし飛躍できる道を探そうとするものである。後の道があるのに、前者、忍耐をとるのは、愚かしいことである。より良い快適な生へと向上する道をとれということになる。不合理・有害な忍耐はやめるべきである。無駄な忍耐ではないにしても、せっかく快適な向上の道があるのを、少し我慢すれば済むと、これに忍耐してということも多々ある。さらに悪い忍耐として目立つのが、辛苦を安易に受け入れることで創意工夫をないがしろにし、生の飛躍や向上を妨げることである。情報革命真ただ中の現在、快適に効率的に苦勞なくできるものがどんどんできている。それが出来るようになってきているものは、無駄に苦勞、忍耐を続けることなく、利用し享受するのが時宜にかなったことである。

だが、よりよい生のためにどうしても乗り越えていくべき苦難・障害もある。それを避けて忍耐しない状態では、さきに進めないことがある。そういう忍耐は、ひきうける必要がある。苦痛を受け入れなくては高い価値が得られず飛躍のできない方面にと忍耐は振り向けるべきであろう。さらに、ひとの能力開発には、能力を眠り込ませる快では心もとなく、新規の高度の能力を目覚めさせ開発するには、艱難辛苦をもってする必要がある。忍耐は、そういうところでは、やはり、大いに価値をもつ。

## 6. 忍耐は未熟者を変えていく

忍耐は、苦痛と覚めるものごとに対してする。苦痛と覚めないなら、忍耐することはない。軟弱な者には苦痛で忍耐がいるが、強者は、なおこれを苦痛とせず忍耐など無用となることがある。正座に慣れているものは、これを苦としないから、正座することに忍耐などいらぬ。だが、正座になれていないものは、すぐに足が痛くなるから、顔をしかめながら苦痛に我慢することとなる。忍耐・我慢するのは、優れているのではなく、逆で、軟弱だからだということになる。苦も忍耐も、そういう点から見れば未熟者の対応だといえる。かつ、多くの場合、未熟者の苦痛は、それに忍耐しておれば、正座の場合もそうであるが、やがて、それを苦としなくてもよくなり、強者にと生まれ変わりうるのでもある(成熟に資するものではない苦痛・忍耐も多い。歯痛に我慢したからといって、自分の歯の能力が向上することなどなからう)。

正座の場合なら、足がそれにおのずと慣れてきて、強いものに変身するから、何日か続けていると、忍耐無用となり、正座する方が楽にすらなっていく。だが、苦痛を感じる主体が頑固に自分を変えないような場合、引き続き忍耐がいることとなる。エンジン嫌いの自分を変えなければ、いつまでもエンジンには忍耐することになる。苦痛を感じるのは、その主体が自身を変えないからで、我を張らず譲れば、苦痛であることをやめて、忍耐無用になることがある。怒りの忍耐など、自分が相手についての考え方を換えれば、怒りはただちにおさまり、我慢・辛抱など無用となる。怒りでは、しばしば、自分勝手な考えをして、「自分をなめている！」などと相手を邪推して、気障りなものと判断を下して、この気障りなものを排撃・撲滅しなくてはならないと、いきり立ち攻撃的に身体を反応させる。

怒りに忍耐しているのは、そう邪推する自分を固持しているからである。自分の解釈を変えて相手のことを「鈍な奴だが、かなりの努力だ。苦勞したな」と思い直せば、気障りどころか、体力がないのによく頑張ったものだと呼びかけることができる。そう思えば、そう自分が変われば、怒りの発生源がなくなって、怒りを抑える不快も消失する。我慢・忍耐など無用となりかわる。

#### 6-1. 忍耐する者は、ときに、自分を変えない頑固者のことがある

忍耐している者は、実は、自分をゆずらず変えない強情者・頑固者という場合がある。それに不快をいただいている自己を変える気がない、いうなら、未熟な自分をそのままに固守しているのである。その自分を変えれば、そのことに不快・苦痛を感じることはなくなるものが結構ある。強情に自分を変えないでいることが苦痛を生じて、これに忍耐しているのだとしたら、そういう未熟な自分を変えて、忍耐無用とするべきではないか。「我慢している自分は犠牲に耐えているのであり、辛抱強い、できた人間なのだ」と思い勝ちだが、かならずしもそうではない。自分を変えず譲らない強情者・エゴイストだからこそ無駄に忍耐している場合が相当にある。

給食で、きれいなニンジンを食べる子は、我慢できない者とちがって、えらい。だが、もっとえらいのは、ニンジンのおいしいことを克服してこれを美味しく食べられるようにと忍耐無用にと成長することである。ニンジンを無理して我慢して食べるのは、感心だが、まだ、未熟者にとどまっているのである。その未熟を成熟へと成長させるのは、その忍耐である。忍耐を通して、欲求の在り方も変えてしまい、忍耐しなくてもいいようにと自分が成長するのである。

「忍耐させられる」という強制は、不愉快なことであるが、意外にこれが自身を高めるためのありがたい強制であることが多い。子供を強制して忍耐させるのは、成長を願うからである。その強制を受けることのなかった者は大人になって自制心成長不全のパラサイトの「若旦那」になって、他人はもちろん自分をも苦しめることになる。我慢な若旦那になってからでも遅くはない。強制される苦痛・辛苦から逃げず忍耐を重ねれば、やがて自制心もしっかりして、見違えるような好人物になりうる。

##### 6-1-1. 「誰よりも我慢している」人は、「我慢（我まま・ごう慢）」の人かも

利他的なひととエゴイストでは、前者の方が多く忍耐していると感ぜられるが、意外に、自分勝手なエゴイストもしばしば忍耐をしている。エゴをまるだしのものは、よく不満をいい、自身では、「だれよりも自分は苦を忍び、我慢している」と思っていることがある。ふつうの者では、譲るのが当たり前と思って不快でもなんでもないものでも、エゴイストには、許しがたい不快なこととなる。「周囲が気障りなことをし、怒らせるようなことばかりする。悪いのは周囲だ。自分は、毎日毎日、我慢させられている」と。「町にでても、夏なのに冬の帽子をかぶっていたりして、私の心をさかなでし怒らせる。どだい、皆の目は、腐っている。しかし寛大な自分は、これを我慢している」等という。だが、そういう忍耐は、おそらく、普通の者には滑稽であろう（心の病に由来している場合は、深刻で同情すべき事態であろうが）。忍耐しているエゴイストが悪いのである。想像の世界とちがいで、自分の思い通りにはならないのが現実である。エゴを小さくすれば、おそらく、かれは、多くのことについて忍耐無用となる。

忍耐するのは、それが苦痛だからであるが、苦痛を生じるのは、そのひとが未熟だとか、

レベルが低いということが結構ある。腕立てふせをして、五回ぐらいから忍耐する者は、レベルが低い未熟者だからである。慣れたものは、おそらく、何十回でも平気の平左である。偏食の強い者は、嫌いなものを食べるのは辛いことである。だが、美味しくもないものが栄養上、必須なのであれば、これは食べなくてはならない。やむをえず我慢をしながら食べる。我慢して食べていると、大体が慣れてきて、そのうち、美味しく食べられるようになる。未熟な愚かしい偏食に挑戦し、嫌いなものを我慢して食べるようにしておれば、適応し成熟して快適な食生活が可能になってくる。

#### 6-1-2. 我慢（忍耐）は、「我慢」（我まま・ごう慢）による

エゴイストは、自分では、我慢していることが多いと思っている。自分の思いに逆らうようなことばかりを周囲がして、頻繁に我慢させられると。周囲から客観的にみると、そうではなく、エゴイストが「我儘」で「高慢」だから、思いが通らず不快になり我慢しているのである。その「我まま」「ごう慢」の「我慢」ゆえに、我慢（忍耐）しなくてはならなくなっているのである。

我慢は、古くは、文字通りに、「我儘・傲慢」の意味だったようである。それがいつのまにかそれを耐えること、忍耐にと反転した意味でつかわれるようになった。相手の我まま・ごう慢に忍耐するから、忍耐することを相手に合わせて我慢といいだしたのであろうか。日本では、周囲に気を使い、これに合わせるが多いし、狭い空間に住むことで省略も多い。我慢も、我慢（我まま、ごう慢）を出している利己主義者を前にして、忍耐する自分の意識を、その相手の我ままに合わせるようにと配慮し、かつ忍耐は自明なので省略して、「(相手の) 我慢（への忍耐）」というようになったのかも知れない。

だが、忍耐は、自分のうちの苦痛にするものであり、克己であって、その対象もうちにあるから、うちにあるえげつない我まま・ごう慢の我慢をその苦痛を対象にして、これに忍耐するのでもある。自分が我慢を出しているから、苦になるのであり、忍耐するのである。忍耐しつつ、「また我慢（我がまま）を出している自分だ、この我を折らねば。我慢（を折ることだ）だ、我慢だ」と反省しつつ、忍耐を我慢というようになったのだとも考えられる。

あるいは、忍耐は、悪事に執念深いとき（我執＝我慢）にもいい、その方面で、悪い忍耐の場面で我慢が言われたことも想像しうる。悪いことをした子供が、「あやまりなさい」としかられるとき、その叱責と正座の苦痛に耐えきれず、「ごめんなさい」とあやまるはずを、我を張って強情に頑なに耐え続けることがあれば、「強情で、我が強い、我慢の強い子だ」となる。つまり、強情＝我（慢）の強い＝忍耐強いということで、強情な悪しき忍耐を「我慢（の）強い」といい、やがて、忍耐一般に使うようになったとも推測できる。己のエゴを頑なに譲らず堅持する「我まま・ごう慢」のその強情さを苦痛甘受の忍耐にも貫くということである。我慢（我まま・ごう慢）の者が、苦痛甘受で我慢（強情・頑固に）しているのが、我慢（頑な忍耐）になるのかも知れない。

#### 6-1-3. 我慢できなくなっても、自暴自棄だけは避けたい

我慢（忍耐）は、自分が我まままで高慢のためにそれが通らず苦痛になり、忍耐している場合がある。この忍耐は、貫くより、自分の我ままをなくするのが筋である。我慢（忍耐）の苦痛は、未熟な自分をなおしてくれる苦い良薬になる。

自分が変われば、我慢無用となるのだが、我儘・高慢な者は、自分が悪いのではなく、

相手が悪いという主観的で幼稚な対応に留まり続けることが多い。そうすると、遅かれ早かれ苦痛の限度・我慢の限界となつて、忍耐を放棄することになるが、そのとき、いっそう幼稚に退行して、とんでもない振る舞いにでることがある。単に忍耐を放棄するのではなく、自棄に、自暴自棄に出ることである。

我慢・忍耐は、我儘の場合、自分のエゴを小さ目に変えるなら、めでたく忍耐無用となるが、自棄（やけ）の場合は、自分を変えるのではなく、自分を棄て価値あるものを破壊して、しばしば壊滅的な状態を結果する（自棄にも諸レベルがある。プラモデルが組み立てられないで自棄になるときは、せいぜいその部品を破壊する程度におさめるのが普通である）。自分の思いが通らないというので、幼児がわめき散らすように、たまった鬱憤を晴らそうと、身近に存在しているものに見境なく当り散らす。知力・腕力は歳相応でも精神は幼児レベルに退行して規範意識なども投げ棄てて暴発するので、自身の人生に関する自棄の場合、自分の過去も未来も破壊し、身近にいるものへの損傷も甚大なものとなる。

忍耐できず自棄になって己の人生そのものをつぶした者は、奈落の底で呻きつつこういうだろう。「自棄（やけ）にだけはなるな。忍耐できなくなったら、犠牲を最小限にして穏やかに引き下がることだ。そうすれば、再度、挑戦できる。しかし、自棄になったら、すべてが台無しになる、取り返しがつかないことになる」と。忍耐を静かに放棄するだけなら、一休みした後、またそこからやり直せる。だが、自棄になった場合、しばしば、再起不能の、悔やんでも悔やみきれない結末をもたらす。

## 6-2. 忍耐は、飛躍のバネになる－「買ってでもすべき苦勞」

苦痛や欲求抑制の忍耐は、未熟な者を変えていく力となりうる。よく「若いときの苦勞は、買ってでもせよ」といい、苦勞・忍耐を成長・発展のバネにすることがある。安楽の状態では、外界への注意は散漫になり、快にひたってまどろみ、眠り込む。向上などそこには望めない。だが、辛苦なり忍耐は、その状態からなんとか抜け出したいとひとを駆り立てる。未熟状態を自覚させその辛苦をバネにした飛躍を可能にしていく。辛苦を忍ぶ忍耐は、向上のための諸能力を身につけさせ、強い人間にと培っていく。

精神的生のもとでの忍耐は、しばしば、そういう飛躍へと自己を駆り立てていくが、身体的な忍耐でもそれはある。過度の苦痛・損傷を引き起こすものは、身体に障害をもたらすが、適度のそれは、それに持続して忍耐しておれば、筋肉を増強させるし、抵抗力がついて、より強い身体を作り上げる。それらの忍耐は、途中で辛くなって投げ出したとしても、やけにならないで穏やかに忍耐放棄したのなら、そこまでの忍耐による心身の向上は身につけていることで、再度、そこから挑戦すれば、さらに向上が可能となる。耐える者は向上する。

苦痛は回避するのが自然であり、強制的に忍耐させられるのでないと、忍耐はしないことが多い。甘えられる家の中では、忍耐力は育たない。そとに出て艱難辛苦を引き受けざるをえないような状態をつくる必要がある。苦勞することでひとは自制心を育て、たくましくなる。

### 6-2-1. 苦痛の甘受でひとは向上し、快樂で停滞する

忍耐は、苦痛の犠牲を手段として価値ある目的を成就したり、苦痛に慣れて何でもよいことになるようにとその生を広げていく。あるいは、欲求抑圧の忍耐では、不充足に慣れてくれば、より小さな充足で満足できるようになる。糖分は、控え目でしっかり味わせる



ようになる。逆に快樂の場合、これに慣れると、快樂でなくなってきた、より大きな快樂でない間に合わなくなり、その快樂に鈍感になる。したがって、より贅沢なことになっていく。

苦痛や欲求不充足を引き受けるのは、その犠牲をもって、これを手段として、大きな価値が獲得できるからである。その獲得されるものは、その苦痛の営為が目的としている価値物のみではない。そういう辛苦に耐える心身の能力自体を高める。訓練とか鍛錬は、これを目的としたものである。苦痛に耐えていると、それを支えるだけの能力が身についてくる。苦痛になるような限界とぶつかることで、それに見合う力を出す必要性が生じ、新規の能力を目覚めさせることとなる。逆に、安楽に慣れると、心身は衰えて劣化していく。

苦痛は、単に慣れて平気になるにとどまらず、欲するもの・快に変容することもある。勉強とか仕事は、しばしば、苦痛にはじまる。だが、これを続けていると、それは快となっていく。はじめは苦痛で回避したい義務であったものが、やがて快適で求めたい権利へと変わっていく。その快適さを基礎にして、さらに困難なことに挑戦し忍耐することで、ひとは、一層向上していく。

### 6-2-2. 苦痛は、厳しい否定をもって強情なエゴを変える

忍耐では、本心において嫌なものは、変わらず嫌なものとしているが、もし、自分が変わって、嫌なもの、苦痛であることがなくなれば、忍耐は無用となる。苦痛であるものから逃げられないとき、ひとは、これを甘受しつつ、自己自身を強くすると鈍感になるという形で苦痛と感じないようにと変わっていくことができる。正座が不可避ならそれを苦痛としない自己にと変わっていく。エゴに執着することで苦痛が生じておれば、これをやめて全体・合理に従うようにと自己を変えて苦痛を無化しようとする。

内的な自己批判では、ひとはあまり変わらないが、外的な厳しい指摘・批判は、鋭いものがあって苦痛となり、自己変革が強いられることになる。苦痛という自己を否定するものについて、これに逆らわず受け入れ耐え続けるなかでは、自己否定（苦痛）は心底にまで染みとおっていく。ひとの能力は柔軟性に富んでいて、苦痛に鞭うたれて大いに自己変革をすることができる。

快の享受では、それにのめりこみ自己はそこに満足して停滞する。自己を変えることなど無用であり、エゴは、そのままにとどまり続ける。筋肉は使うことがなければ、弱体化していく。苦痛に耐える者は、その反対である。そこにとどまりたくなく、苦痛とその発生源が変わらないのであれば、自己を変えざるをえなくなる。脅され強制されてであれ、懇願・哀願されてであれ、自分のそとから求められる忍耐は、自身を変えるに大きな力となる。自分だけだと苦痛に耐えるにもすぐ限界を見つけてしまうが、そとからの強制をもってすれば、主観的で可変的な苦痛の限界は、はるか高くにと置き直すことが可能となる。耐え続けておれば、その苦痛には慣れ、心身はそれに見合う能力を身につけて、その苦痛を苦痛とすることがないような強靱なものにと変わっていく。

### 6-2-3. 嵐がすぎさるまで、じっと我慢

忍耐は、苦痛の続く間、逆らうことなくこれを甘受しつづける。苦痛の嵐をじっと息を潜めて耐え続ける。世間の無理解で非難され罵倒されることの苦痛も、これをじっと耐える。嵐の後は晴れてくるという希望をもって忍耐する。かりに世間は変わらないとしても、傷はその間に癒えてくる。そういう誹謗中傷に慣れて平気になれば、苦痛はなくなり、忍

耐は無用となる。それまで、忍耐は、苦痛を受け入れ続け、時間の過ぎるのをひたすら忍び続ける。

忍耐は、なにかを積極的にするものではない。なにもしないで時間の過ぎるのを待つのである。戦いでは、持久戦になると、しばしば辛抱できなくなって先に動いた方が撃たれて負けとなる。忍耐は、なにもしないで、逃げたい・攻撃したいといった衝動をじっと抑えて耐え続ける。「待てば海路の日和あり」と、状況の変わってくるのを待つ。それまでの忍耐である。

忍耐しつつ動き続けることもあるが、それでもその忍耐自体は、辛苦を変わず甘受し続けて、動かさずじっとしている営為になる。腕立てふせをする者は、動く。だが、そこで忍耐するのは、腕を曲げたり伸ばしたりする運動ではなかろう。腕立て伏せに慣れたものは、はじめは、苦でないから、忍耐なしでの運動となる。それが忍耐になるのは、苦痛になりだしてからである。忍耐は、その苦痛を耐える。忍耐せず動いて苦痛から逃げる者は、その時点で腕立て伏せの運動をやめる。が、忍耐する者は、苦痛甘受に不動の決意を保ちつつ、腕を動かして運動を続けていく。動かすのが忍耐ではない。苦痛に（動かさず）耐えるのが忍耐である。腕立て伏せができなくなる限界は忍耐の限界ではない。腕がうごかなくなっても、筋肉が痛めば、この痛みには忍耐することとなる。動かそうとすると一層痛くなる。もう腕は動かないが苦痛は続く。苦痛であれば、なお、忍耐は続く。忍耐は、苦痛から逃げず動かさず耐え続けることであり、腕を動かす努力とはちがう。

#### 6-2-4. 忍耐は無為で、変わらないことで変えていく

忍耐は、事柄としては実に簡単である。何もしないでじっとしているだけで良い。誰にでもできることである。無為に徹底する。しかし、ひとは、動物として、動きたいという衝動をうちに生じる。忍耐は、苦痛の前でじっとしているだけでいいのだが、動物的自然をうちにもつから、苦痛への強い回避衝動をもち、動こうとする。苦痛に負ければ逃げ出そうとするし、苦痛に勝とうと攻撃にはやりもする。だが、忍耐は、苦痛に勝つのも負けるのでもなく、攻撃も逃走もせず、動物的自然を超越して苦痛のあるがままを受け入れて逆らうことなく無為をつらぬく。忍耐は、じっとして何もせず、坐禅でのように手を折り足を折って、植物のように無為に徹する。ただし、外的な営為としては無であるが、内的には、忍耐は、逃走などの衝動を外に出ないようにと抑止するから、内的には「有為」で、内的にも無為になる坐禅とはその点では異なる（我儘・傲慢な者の忍耐は、表向き我慢して相手に無為にとどまるのみではなく、我慢を持続するなかで、内面も、傲慢でなく、やがて、坐禅のように無為で無想の者にと変わっていくことが望まれる）。

忍耐では、苦痛甘受への不動不変の姿勢を続けるから、苦痛から逃げる者とちがひ、その何倍もの苦痛・損傷に心身をさいなまれ続けるが、その中で、多くの場合、状況が変わっていく。しばしば、苦痛が苦痛でないものになる。その苦痛に慣れてこれがなんでもないものにと鈍感に成り変わっていく。自分の能力がその苦痛に適合できるようにと伸びていく。さらには、そういう苦痛にたじろがない忍耐を見ながら、ときに対象（相手）の方も変わって苦痛を与えるものでなくなっていく。

不動の忍耐は、持続してこそのものである。その持続は、苦痛甘受の無為を、すくなくとも表面的には変わらず、続けていくことである。それは、時間の持続の中で熟してくる。忍耐は時熟する。慣れてくれば、あるいは癒えてくれば、苦痛はやみ、忍耐は無用となる。

持続する忍耐はそこで成就する。目的のための犠牲・手段としての苦痛甘受、忍耐は、目的実現で終了する。手段として役立つ限りの、有限の持続を貫徹するのが忍耐である。

### 6-3. 忍耐は、犠牲のみに終わることもー「骨折り損のくたびれもうけ」

忍耐のうちには、その痛みが単に心身に損傷をもたらしているだけで、これに耐えること自体にはあまり意味のないものもある。歯痛は、放置していると何ヶ月でも痛むし忍耐もできる。が、忍耐しても無駄で、「骨折り損のくたびれもうけ」である。我慢せず、早めに治療した方がよい。

強制されて忍耐させられる場合は、それが自分のためになるものかどうかは分からない。脅迫されてする忍耐の多くは、脅迫する者の利益になるだけで、忍耐させられる者は、その犠牲にされるだけであろう。弱虫なのでいじめられ我慢させられるというような場合、暴行を受ける犠牲・苦痛のみがあつて、歯痛と同じでいくら忍耐しても、いいことは何もないのが普通であろう。忍耐すればいいというものではない。いじめへの忍耐などはほどほどにして、転校したり、武道を習い正当防衛の策を練るなどの苦勞に忍耐は振り向けるべきである。

忍耐する時点では楽観的な想定をして、忍耐する者に大きな価値が獲得されると見ても、苦痛の犠牲の果てに待っているものは、無価値なものであるのみか有害なものを結果することもある。無駄な忍耐・無意味な忍耐がある。DVに耐えることは、ときには、それに耐えておれば、やがて暴力はやんで、家族が安寧を得ることのできる場合もあろう。だが、多くは、そうではない。家族に暴力を振るうのは、昔は単に粗暴ゆえのことが多かったが、現代では、弱虫が、ためた鬱憤を身近な者に発散するだけの情けないものである。我慢するほどに、暴力はひどくなり、一層の苦痛をもたらすのが普通で、忍耐せず、離縁・離隔等のために勞をとり有益な形の忍耐をしていくべきであろう。

### 6-4. 忍耐は慣れて平気になるとしても、それがいいとは限らない

忍耐は、苦痛にするが、それに慣れると苦でなく平気になるものがある。忍耐無用となるが、かならずしもそれが生にプラスになるとは限らない。本来、苦痛は、生に損傷の生じていることを知らせるものである。苦痛に慣れるといっても、その損傷はそのままに続いている可能性もある。あるいは、悪には慣れれば平気となり、忍耐など無用となる。だが、悪は、悪として持続しているのである。悪に慣れるよりは、悪に対して嫌悪しこれを苦痛とする方がましであろう。塩からいものに慣れていない場合、はじめは我慢して食べることになろう。だが、すぐに慣れて平気になり、のちにはそれが快樂とすらなる。慣れれば、何事も、これが普通のことになる。慣れない方が好ましいこともある。悪いことには未熟にとどまる方がよい。

過勞死は、さんざんに酷使され忍耐させられ通しで、最後、死にいたる、いうなら忍耐死である。忍耐させられて慣れてくると、過勞にも鈍感になり、心身がくたくたになっても、これを続けて行ける。ついには、身体が追いつけなくなり、死に到る。忍耐する姿勢自体は尊いけれども、それが貪欲な経営者によって使い捨てる従業員として利用されているだけだとすると、惨めな死である。

もちろん、使命感を抱かせられるような充実した仕事もあり、その辛苦が社会の危機を救う尊いものであれば、その忍耐はいきる。この夏、タイ北部の洞窟に閉じ込められた13人を救出しようと駆けつけたダイバーの一人が、過酷な長時間の作業の途中で死亡した。

覚悟しての志願で尊い犠牲であった。だが、そうではない忍耐が多い。現代日本の過労死は、経営者に使い捨てされるだけの愚かしい忍耐である。忍耐は、自分を犠牲にする非常の手段である。無意味、愚かしい忍耐と分かったら、即刻その忍耐は中止しなくてはならない。

#### 6-4-1. 忍耐は、不屈でありたいが、卑屈なものもある

忍耐強い戦士は、危険への恐怖を忍耐しつづけ、戦う際には心身の疲労の辛さに耐えて果敢に戦い、あるいは、攻撃を自制する必要があるればこれも忍耐する。不屈の忍耐である。だが軟弱な者の場合、軽蔑され卑怯だといわれても、恐怖に支配されつつ、侮蔑・嘲笑の眼に忍耐する方を選ぶ。戦う勇気をもてず、尻尾をまいてする卑屈の忍耐もある。

卑屈な忍耐も、慣れれば平気になってもいく。鈍感になる。自身をおとしめ傷つける悪徳と言ってもいいような忍耐となる。いじめられて我慢するだけでは、おそらく、一層のいじめをもたらすだけとなり、会社でのそれでは、過労死も生じるような悲劇をもたらすことともなる。不当な事には忍耐などせず、苦痛をわめき散らし「助けて」と大声をあげて逃げ回り、あるいは忍耐するのなら、いじめを排除して戦うことにと忍耐力はまわす必要がある。

戦うべきところで、逃げる手として忍耐をつかえば、卑劣な卑屈な忍耐となる。そこでは、勇気をだし知恵を出して戦う必要があり、泣き寝入りの卑屈の忍耐を選んではいられない。いじめが多い社会であるが、暴力などの犯罪には躊躇せず、転校とか転職も考え、あるいは警察沙汰に出来るよう工夫をすとか、裁判に訴えるとかの手間にと忍耐は使用されるべきだろう。身近な者に心配かけてはと黙ってこれを我慢もするが、我慢するところを間違えている。

#### 6-4-2. 大きな忍耐から逃げるための小さな忍耐がある

暴力団の脅しの恐怖に忍耐できず、自殺したというようなニュースを聞くことがある。大きな恐怖・辛苦に忍耐できず命を絶つことは、いじめ・脅迫などで時々ある。命を絶つぐらいなら、命をかけて戦ったらと思うことであるが、おそらく、執拗ないじめに絶望的となり戦う気力さえも奪われた状態になるのであろう。

死ぬことは、苦痛であり忍耐を要することであるが、自殺する気になったものには、死は、現にある辛いことから自分を救ってくれる唯一の手段と解され、ほとんど我慢もいらぬぐらいのものになる。しかし、それは、逃げているのである。楽になりたいということしか思いつかなくなるのであろう。冷静に考えれば、脅迫しているものと戦うべきなのである。執拗ないじめには、被害者は、勇気を出して、警察にいくとかこれを告発すとか、場合によっては非常手段をとって自分の方からいじめる者をたじろがせ恐怖させるような（武道を習得するなどの）工夫へとエネルギーを注ぐべきであろう。死ぬよりは、過剰防衛でも悪には反撃し鉄拳を下すというぐらいのバイタリティーをもてるようにと、こちらに忍耐力を注ぎたいものである。

殺されるのは大変な苦痛だろうが、その死さえも、自分で選ぶことがある。いつまでも続く不安とか、絶望の暗黒に閉じ込められての苦悶に忍耐するよりは、自殺時の苦痛の方がましだということである。100メートルの絶壁から飛び降りろと言われたら普段は恐怖に足がすくむが、自殺する者には、生の苦悶からの解放に向かって飛び立つ感じで、恐怖の苦自体はないか小さくなっているのであろう。名誉を守るため、責任をとるためにと

尊い命を絶つことがあるが、いじめで自殺するような場合は、生の巨大な苦痛（絶望や悲哀）に耐え切れず、卑屈な忍耐に逃げているだけのように見える。

#### 6-5. 忍耐には、賢く関わりたいもの

忍耐は苦痛を注視しているが、それ以外のことは、お留守になりがちである。大きな忍耐つまり大きな苦痛ほど、苦痛だけにとらわれて、他を見る事ができなくなる。忍耐は、反自然であるから、放置しておいてうまくいくものではない。状況を熟知し大局を忍耐のそとから見ていないと、愚かしいものになってしまうこともある。忍耐は、すればいいというものではない。反忍耐、苦痛回避こそが必要な場合もしばしばである。おそらくはそれがほとんどで、わずかの場面で忍耐という反自然の苦痛甘受が有効なのである。苦痛の受け入れは、例外として有意義なのであり、圧倒的には、反忍耐、つまり自然にしたがうこと、苦痛排除が正解であろう。苦痛になるようなことは避け、快適さを求める反忍耐が日々の生活では圧倒的である。

忍耐は、苦痛甘受以外にはなにもないのであれば、犠牲があるだけである。「骨折り損」だけである。忍耐に意味があるのはその犠牲を手段として目的・結果にすばらしい価値が獲得可能となる場合のみである。あるいは、大きな忍耐から逃避しての小さな忍耐で自らを欺くこともあろう。その犠牲と目的をしっかりと把握して大局を見定めていないと、愚かしい忍耐となりかねない。

忍耐は犠牲をつねにともなう。等価交換を世の原理と見る者は、犠牲のマイナスに匹敵するプラスが忍耐をもって約束されると思勝ちである。あの世での至福のためにと現世で辛苦の犠牲を前払いしようというひともいる。だが、辛苦の前払いは確かにしたのだけでも、来世の至福は現世にはなく、夢・幻想である。あの世がなければ、至福は詐欺である。忍耐の犠牲は、かならずしも報いが得られるわけではない。賢くかかわらねばならない。

#### 6-6. 忍耐は、人生の決定的な場面に出てくるものもある

忍耐に出会わない日はない。朝起きるときから、眠いのを我慢して起きるのだし、尿意を抑え忍びつつ、顔を洗う。テレビが朝から姦しいのを我慢しながら、天気予報のあるのを待っている。こういう些事の忍耐が、してもしなくてもどうということのない忍耐が日々の忍耐である。忍耐などどうでもいいではないかと言いたくなる。だが、なかには、人生に決定的となるものもある。怒りを忍耐できなかつたために、失職したり、ひとを死に追いやるようなこともある。玉石混交の忍耐である。些事の石ころの忍耐は適当に片づけておけばよいが、人生の玉となる決定的な忍耐については、これは命を懸けても成功させる気構えを堅持するのではなくてはならないであろう。かつ、忍耐力は、経験を通して高まるものであるから、些事の忍耐も馬鹿にせず、肝心の時のためにトレーニングしておくことも必要となる。

忍耐は、徳目にあがる節制や勇気以上に、多くのひとの人生にとって、ときに決定的なものとなることがある。いくら大馳走を前に節制できても、そのひとの人生は、それだけでは何も変わらないであろう。だが、忍耐は、善悪を問わず、直面する辛苦から逃げるのがなければ、そのひとのなすことをストレートに大きなものにする。なにごとについても、やけにならず、我慢強く生きることがいる。ここというところで忍耐すれば、未来が開けてくる。忍耐できたかどうかで、人生はまるで違ったものになってくる。勇気は、こ

れがあれば、危険に際して有利な生き方ができるが、幾重にも安全を配慮した現代社会では、ごくごく特殊な場面に限定される。だが、忍耐は、日常的にでてくるもので、これに優れておれば、人生の多方面において有利に立ち向かえることとなろう。どんぐりの背比べの戦いであれば、先に諦めたものが敗退し、忍耐に優れた方が勝利者になる。ナポレオンの格言に忍耐を語る言葉がある。それは、「勝利は、忍耐する方に、あり *La victoire appartient à persévérer.*」というものである。おそらく、これは、多くの人の納得する人生の真実であろう。

\*本「忍耐の倫理的な位置（細論）」は、広島大学文学部倫理学教室の雑誌『HABITUS』Vol.20に掲載した論文「忍耐論－その倫理的な位置－」（本リポジトリに所収）を、ウェブで「忍耐論 I（忍耐の倫理的な位置）」(<http://blog.goo.ne.jp/kondoyoshiki>)として展開した細論を、若干手直しして纏めたものである。